
孤独なワルツは猫も食わない

猫梟

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

孤独なワルツは猫も食わない

【Nコード】

N3305J

【作者名】

猫梟

【あらすじ】

浜夜善は追い求めている。

人ならざる者達の祭り場所。この世の境目。

たった一人の大切な人に再び会えることを夢見ている。

ただの人間である浜夜にそこへ行き着く術はない。

妖怪、霊、片っ端から人外の情報を調べ漁る。

そして遂に、浜夜は長妖怪を名乗る一匹の妖怪へと辿り着いた。

頼りになる仲間達と共に手掛かりを追いかける。

徐々に徐々に、それは浜夜の前に姿を現していった――

第一話（前書き）

もしも前作から引き続きご覧になって下さっている方がいらしたら

大変申し訳ございません。m (_ _ _) m

2009年の年末くらいから新しい作品を連載する、などと吐いておきながら遂にその約束は守られませんでした。とうに2010年です。

こんな約束を守れない自分ですが、それでも読んで下さる方、本当にどうもありがとうございます。ようやく半分近く物語が出来たので、こうして第一話目を掲載できました。

大変遅くなりました。初めましての方は初めまして。猫梟と申します。いきなりお詫びの文から始まり情けない事この上ないですが、それでも最後までお付き合い頂ければ幸いです。

それでは。

第一話

プロローグ

浜夜善は夢を見る。

まどろみの中に、十年以上に渡って現れるそれは姿形はいつも変わらない。

絶えることなき笛の音が夜空で乱舞している。お供を務めるのは和太鼓だ。地の底から湧き上がるような太い響きが、一定のリズムでこの場を唸らせている。

赤と白で彩られたやぐらの上には幾十人。その周りには倍以上の数。「祭」と背中に記された紺色のはつぴを着た者達が、まるで人を小馬鹿にするようなのろけた動きで不恰好に踊っている。一樣にしてその顔を窺うことはできない。彼等は皆面を付けているからだ。朱を差す頬、水玉模様の白ずきん、何よりトレードマークは阿呆みたいに突き出た唇。——ひょっとこだ。

面は一種類だけではない。顔全体が真っ白に覆われ、波のようにたゆたう細い目と真っ赤な唇。おかめと呼ばれる、ふくよかな顔もひょっとこ達の中に混じる。

彼等は音楽に合わせ、やぐらを中心とし輪を成すように、腰を低くし手の平を大げさに右へ左へと掲げ滑稽に回る。

地に膝をつき、それを眺めている。浜夜の体は小学生の頃のものだ。この夢を見る時はいつもそう。自分の原点とも呼ぶべき出来事。忌まわしい夢にして大切な人の欠片。

やぐらの中心部には木柱で骨組みされた塔が形成され、その天辺へ向けて梯子がかけられている。先に見えるのは一心不乱に和太鼓を叩く一人のひょっとこだ。浜夜が視線を向けた途端、太鼓バチの動きが加速した。それに合わせ、どこからか鳴り続けていた平坦な笛の音も速度を上げる。全てはビデオの早送りのようだ。率先する

リズムが速くなれば、それに追隨する踊りも自然と速度が増す。ひよっとことおかめは、ただでさえ笑いを誘うような踊りを二倍速で行うが、浜夜の顔に笑みは浮かばない。逆だ。踊り手達には不気味さしか感じられない。

重苦しい振動音。狂気を奏でる笛の音。阿呆を通り越して人間をやめたお面達。

これは儀式だ。

胸が苦しくなる。不快な和太鼓の音が脳を叩く。

——夢の終わりが近づく。最悪の終わり方。既に夢の結末を知っている。

どこからともなく塔の上に主が現れた。

和太鼓を殴りつけるひよっとこの隣で、何も言わずに浜夜を見下ろしている。

二本の角と裂けた口。

般若の面が真つ白な袴を着て佇んでいた。

目が合った——そう確信する。

それを合図としたのか、般若が右手を空に掲げた。墨色の夜空、最高潮へと上り詰める和太鼓と笛、それ等は全てお飾りだ。抜き身の白銀が祭りを支配した。その手に握られていたのは日本刀。踊りと音楽がその刃を讃えている。人の生死を分ける権限を持つその日本刀を崇めている。

般若の足元に一人のおかめが横たわっていた。

いつの間に——などと愚問は抱かない。これは夢だ。ならば日常の道理は通用するはずもない。

うつ伏せに、それでも面は真正面に向けられている。

やはり——

自分を見ている気がする。

走り出す。ようやく浜夜は危機を悟る。あのおかめを助けなければならぬ。

阿呆達が立ちはだかった。自分の目の前で、高速と化した不気味

な踊りを繰り広げる。その人数は十人、二十人と自分の進行を拒むように増え続けていく。通れない！ 邪魔だ！

思わず般若を見上げる。

やはりそれが合図となったのか。

日本刀が動いた。

浜夜は届きもしない右手を虚空へ伸ばした。

うつ伏せのおかめは何も言わない。

和太鼓が暴力的な音を奏でた。

笛の音が、とても音とは呼べないような甲高い金切音をあげた。

無情なる刃がおかめの体に吸い込まれ――

「お姉ちゃん！！！！！！」

そこでもうやく浜夜は声を出すことができた。

しかし間に合わない。

おかめの体が痙攣したかのように跳ねた。その体に突き立てられた、生命を奪い取った証は残酷無慈悲なる墓標と化す。

――おかめの面が剥がれ落ちた。

既に太鼓と笛はその活動を止めていた。面は宙を落下し、梯子を蹴ってやぐらの上に落ちる。物悲しい音が一つ転がった。

無意味に差し出した浜夜の手は未だ浮いたままだ。

その手は何も掴むことができない。

今回の夢も。

前回も。

前回の前回も――

1

「絶対一人にしないで下さいよ浜夜さん！？ 私本当にお化けダメなんですから！」

だったら付いて来なければ良いのに。喉まで出かかった言葉を飲み込んで浜夜は神社の入り口である赤い鳥居を潜った。新宿区西新

宿某所。新宿駅西口を出て十分も歩けばそこは無機質なビルが立ち並ぶオフィス街だ。そんな日本有数のビル郡の中に、一見すると場違いと思えるような小規模な神社を、実は至る所で目にする事ができる。横を通ろうと誰も気にも留めないようなある意味不可侵なる領域。沈黙するビル郡に囲まれながら、二人はその中の一つに足を踏み入れていた。

七月の、夏特有の生暖かい風が浜夜の頬を撫でる。静かだ。後ろを歩く、自分よりも頭二つ分身長の低い雪がスーツの袖を強く握ったままなのでかなり歩き辛い。この新宿に拠点を置くレディースチーム「紅」で、頭に近い位置にその身を置いている彼女が途端に気弱になってしまうのだから、お化けとはある種面白いものだ。

左右に連なる柳の木に見守られ、石畳を五段ほど踏みしめると浜夜の手に握られているマイクからノイズ音が流れ始めた。——ちなみに電源はオフにしてある。

「——いいッ!?!?」

機械特有の音、砂嵐。浜夜が前方にかざしていたそれから逃れるように、雪が奇妙な叫び声をあげて背中中に隠れた。伝わってくる温もりは振動付きだ。

辟易するように振り返ると、浜夜は空いている左手を雪に向けて差し出した。

「ほら。……仕方ないから、ここからは手を?いで行こう」

月が照らす薄明かり越しに、内側にカールされた栗色の髪が勢よく揺れたのが見て取れた。浜夜の手は力強い両手で握り締められる。小さいながらも、雪の手の内側は多少なりともツボができている。彼女愛用の木刀を握りすぎたのではない、と浜夜は信じたい。

「絶対、絶対一人に——」

「分かってるよ、大丈夫。一人になんてしないから。約束する」

「ふへへへ」

屈託のない雪の笑み。裏腹にその手は異常なまでに震えていた。だが浜夜はそれを指摘する気には到底なれない。自分自身も既にこ

の神社に不吉な何かを感じ取っていたのだ。

——重力が二倍になったら、体はこのような重さになるのだろうか。

一見どこにでもあるマイク。どう見ても学校の朝礼で使われるような安物にしか見えない。しかし、このマイクが独りでに声を発する時、そこに「彼等」はいる。それは日本では妖怪、幽霊などと呼ばれている人外の者達。大学を卒業し、自ら彼等を探すようになって以来、何体もの霊や妖怪と向き合ってきた。だがこれは――

マイクは既にノイズを飛ばすだけでは収まらず、浜夜の手の中で震え始めていた。まるで、この先にいる何者かの存在を全身で大きくアピールするかのよう。

「浜夜さん……！？」

何度も一緒に搜索を続けてきた雪だからこそ、尚のこと異変を感じ取れているのだらう。彼女の目線はやはり浜夜の手に持つマイクだ。おかしい。これは異常だ。マイクはあくまでマイク。いつも人ならざる者の音を嗅ぎ当てノイズ音を発するだけのそれが、ここに来て浜夜も知らない新たな察知能力を発動させている。無機質な機械が、まるで生き物のように脈動する。

「でかい……。これは大アタリを引いたかもしれないぞ。離れるなよ、雪！」

「は、浜夜さんこそ！ 私が、私が浜夜さんを守ってやる！」

ぶら下げていた木刀袋から得物を取り出したのは雪だ。勇ましくも頼もしい彼女は自分から両手を離し、代わりに武器を握り締める。怯えは未だ残るようだが、それに真っ向から立ち向かい道を切り開くことを選択したのだらう。

ならばこそ、と浜夜も心を決める。相手が何者かは分からない。それでも自分達が既に相手のテリトリー内に入ってしまったていることは理解していた。スーツの裏側にぶら下げたある幾数もの札や数珠に手を置く。マイクも含め、それ等は仲間であるジツポが全部用意してくれた物だ。霊能力ゼロの自分は戦いとなったら完全に物頼

みとなる。——友好的な相手であることを祈る。

やがて、役目を終えたと言わんばかりにマイクの動きが止まった。空気が変わる。

いる。

息苦しい。何者かが自分達を見つめている。本能が訴える危機とは真逆に、浜夜は興奮を隠せない。……これは相当の大物だ。肌が震え、心臓が爆発するかのように波打つ。巨大な気配。生き物としての本能が警告のサイレンを心の中で大合唱させている。

風が流れる。何もせず、前方の闇と対峙しているだけで体力と気力が消耗されていくのが分かった。横目で見ると雪は自分以上に辛そうだ。荒い息が耳に届く。

妙だ。重苦しい威圧感が変わらず。しかし一向に相手がこちらに向かつてくる気配がない。逡巡は僅か。一つの仮説を立てる。危険ではあるが、このまま立ち尽くしていてもこちらが弱っていくだけだ。

「雪。木刀を下ろして」

まずマイクを地面に置く。懷からも手を放して両手をあげ、浜夜は戦う意思がないことを闇にアピールした。それは事実だ。あまりに巨大なプレッシャーに押され身構えてしまったものの、浜夜は別に相手を退治しにきたわけではない。

それは雪も承知だ。彼女は苦虫を噛み潰したような顔で渋々と木刀を地面に投げ捨てる。無防備になることを躊躇したのだろう、当然だ。しかし彼等は無闇に人に危害を加えたりしない。そのような存在であつたら昼夜新聞やニュースはネタに事欠かないだろう。ましてやこれだけの力。ならばそれ相応の知能も備わっていると浜夜は確信を持ちつつ期待する。

「姿の見えない誰か。ちよつと失礼するよ」

反応はない。

自分の気を落ち着かせるため。同時にリラックスしていることをアピールするため。浜夜はゆっくりワイシャツの胸ポケットに手を

入れると、そこからタバコを取り出す。とは言え普通のタバコではない。いわゆる電子タバコだ。二分割されていたタバコを一本に結合する。口に咥え息を吸い込んだ。火は必要ない。たったこれだけの手順で芳しい香りを堪能することができる。

横目でそれを見ていた雪がいつもの言葉を口にした。

「私にもくれよ、浜夜さん」

「何となく駄目。僕は大人だから良いけど、雪はまだ未成年でしょ」

「十八にもなれば立派な大人だ！ 大体それ、本物のタバコじゃないだろ！？」

——これでいい。雪には悪いが、このいつものやり取りをしたかった。タバコを咥えながら適当な雑談をする男女の図。浜夜は美味なる香りを境内に吐き出しながら確認する。相手の威嚇に似た重圧が薄れていることに。

「——おい」

すっかり心が落ち着いた所で遂に闇の中から声があがった。

女の声だ。それもかなり若い。

雪が緊張を走らせたのが見えた。その声に友好的な声色を窺えなかったからだろう。

「この神社は禁煙だ。臭いや二を持ち込むな」

「——釣るわけじゃないけど、近くに来て匂いを嗅いでみな。嫌な香りはしないはずだぞ。言っておくけど僕もタバコは嫌いだ。煙たしいし、健康に悪いし、服に臭いは染み付くし、お金もなくなる」

「……む？ 何だこの匂いは？」

それは今まで木の上にいたようだ。そのことに気づいたのは、宙を飛翔した何かが勢いよく眼前に降ってきた時。風圧で思わずタバコを口から落としそうになる。ジャンプした反動だろう、柳の葉が遠慮深い小声のような物音を発した。

思わず息を止めてしまう。鼻息が掛かってしまいそうだったから。それくらい近い位置に女は立っていた。

咥えたタバコの一ミリメートル先。

「これは……何だ？ チョコレートの香りがするぞ？」

あまりの登場に半ば呆然とする浜夜の真ん前で、その女は綺麗に整った形の良い鼻を押し当てていた。人間……にしか見えない。浜夜は驚愕の言葉を必死に飲み込み冷静に分析する。おかっぱ頭、薄紅色の可愛らしい唇。歳の程は二十代前半にしか見えない。動揺を出さずに言葉を紡ぐ。

「……タバコにも色々な匂いや味はある。柑橘系や甘ったるい匂いもな。ちなみに一応言っておくと、これは電子タバコというヤツだ。チョコレート味」

「健康に悪いし、お金もなくなるが、それでもタバコを吸うのか？」

「これは人に対し有害な煙は出ない。それに、火を付ける必要もないから吸い潰すこともない。何度も普通のタバコを買うより、これ一本買った方がお金の節約にもなるんだ」

——着物。薄紫色を基調としたその中心には、琥珀色の帯がしっかりと中央で結ばれていた。だが一般的なのはそこまでだ。着物の柄はデフォルメされた三毛茶色の猫の顔が斑点となって全身にプリントされており、何より目を引いてしまうのは膝部分。本来爪先まで伸びているはずの布が、太腿部分でバツサリとなくなっており股下の健康的な素肌が露になっている。夜の商売人として見られないような服装。

最後に浜夜は女の瞳をしっかりと捉える。その一点が、彼女の奇抜な服装の意味を如実に物語っていた。そこに——白と黒で構成されるはずの眼球はない。

「妖怪……だな？」

「あまり驚かないようだな。ま、私の気配を感じても悠々とタバコを噴かしているような人間だ。事情通の者か、そうでなければよほど鈍感な阿呆か」

人である自分と唯一異なる点。それは女の瞳だった。若干緑がかった黄色い眼球の中央に走る、一筋の黒い線。それが今浜夜を見つめている。

「そのタバコ、おくれ。私は電子タバコなどという物は初めてだ」
その言葉に反応が早かったのは自分ではない。勇ましくも頼もしい相方だ。

「テムエ、猫女！ 浜夜さんから離れやがれ！！」

危険を察知したのか、雪が一度手放したはずの木刀を拾い上げ女の眼前に突きつけた。手馴れた動き。――残念ながら雪は暴力の類は得意とする。

「私の庭で乳繰り合いでも始められては適わんから軽く追い出しに来たが……そちらが無粋な真似をするのなら私とて対応の対処をするぞ？ チビ女」

「誰がチビだ！ 時代遅れのオカッパ頭に風俗まがいの格好、湧いてるのかテムエ！！？」

「待った待った待った！」

慌てて仲介に入る。知能を持ち、人語も理解できる妖怪。浜夜の経験の中でもそのような者と出会った回数は本当に片手で数える程度だ。彼等は基本的に人前に姿を現さない。だからこそ目の前の貴重な妖怪との仲を険悪にするわけにはいかなかった。

自分には目的があるのだ。幼い頃からずっと抱いてきた目的が。
「別にやましい目的でここへ来たわけじゃないんだ。申し遅れた、僕は……あれ？ えつと、どこだ？」

スーツの内ポケット、ズボンの両ポケット、忙しなく浜名は自分の手を這わせる。だが目的の物が出てこない。見つからなければ見つからないほど焦りが募る。

「……浜夜さん、まさか名刺入れを尻ポケットには入れてませんよね……？」

湿度全開の梅雨の日を連想させるような、じつとりとした雪の声。言われるままに尻ポケットに手を差し込む。この手触りは……携帯か。これは……ジッポライター。これは……これだ！

黒皮の名刺入れから一枚抜き出す。両手で名刺を掴むと腰を曲げて相手に差し出した。この作法は相手が人間だろうとそれ以外の者

だろうと変わらない。

「『異路色系目相談所』の浜夜と申します。宜しく願いします」
その姿勢のまま三秒、四秒と経過した。手の中の名刺が一向に消える気配がないので、浜夜は顔を上げて相手に訝しげな視線を送る。
「——まさか私に、お前の尻から取り出した物を受け取れと言うわけではないよな？」

一蹴された。声のトーンが明らかに低くなっている。タバコ以外の物をどこに入れたか忘れてしまうのは自分の悪い癖の一つだ。だが受け取りは拒否されたが、名刺に書かれた文字だけは読んでくれたようだ。

「いろいろ……系目？ 何だ系目相談所とは。浜夜相談所の間違いではないのか？」
「む……」

返答に詰まる。あまり他人のせいにはしたくないが、これの名付け親は自分ではない。やがて何かに気づいたのか、女は無遠慮に自分の顔をまじまじと見つめてきた。その目線の向かう先は——自分の目元だ。

「——クッ！ ヒヒヒヒ！」

そして笑われる。残念ながら当相談所名前の由来を理解されてしまったようだ。憚然と名刺を仕舞いつつ、諸悪の根源に視線を向ける。——しっかり自分の目が開かれていると信じたい。

「白金雪^{しろがねゆき}だ。浜夜さんの助手をやってる。ウチの専門は霊や化け物の類全般。除霊やつたり怪奇事件の調査だつたり……普通の警察や探偵がやらない仕事だね。今回ここに来たのは依頼でも何でもなく浜夜さんの知的好奇心」

浜夜の物言いたげな目を完全にスルーできる雪は大したものだ。加え、相手が人型に近い外見で安心したのか、震えは収まり自ら質問をぶつけている。浜夜は言葉を付け加えた。

「手が空く日も多くてね。そんな日はこうして君達のような者との接触をはかっている」

「何のためにだ？ 悪いが、私達は興味本位で近づいてくる人間は大嫌いだぞ。下らん好奇心で写真を撮りたがり、テレビカメラを向けたがり、うっとうしいことこの上ない」

緊張が心を走る。それは鼓舞の裏返しだ。女の方から自分に話題を振ってくれた。だから自分は答えるべきだ。目的を。これだけ流暢に言葉を喋り、人間世界にも精通しているのだ。さぞかし名のあつる妖怪なのだろう。ならば知っているかもしれない……自分が追い求めてきた答えを。唾を飲み込む。本当に運が良い。これだけ大物に出会えたのだ。これで……答えが返って来なかったら、次の大物に出会えるのは果たして何ヶ月、何年後になるのだろうか――

「――ひょっとこ達が踊る祭り場を探している。人の……作り出すものじゃない。ボスは般若のようなヤツ。ひょっとことおかめが踊り続ける異空間。この日本のどこかに、そんな場所があるか知らないか？」

「――悪いが知らんな」

無慈悲に一言で返される。更に、何かを思い出したのように女は付け加えた。

「ああ、なるほどお前が……。仲間から聞いてるぞ、ひょっとこに関する人外の者の情報を探し回ってる人間がいると」

「は、浜夜さん、そんなに有名なのか！？」

「なるほど。私を見ても大して驚かないのはそれか。人間でありながら、人間以外の者に特化し過ぎている。私からすれば化け物はお前達の方だ」

その言葉は耳から耳へと素通りしていた。「知らんな」。浜夜の興奮と緊張は一拳に霧散する。これだけの相手だ、元々期待をするなどという方が無理なのだ。また……ふりだしに戻ってしまった。

「用件はそれだけか？ ……タバコをくれないのなら、私はもう帰るぞ。ではな」

「ま、待ってくれ！」

反射的に呼び止める。答えを持たなくとも、目の前の妖怪は浜夜

にとって重要な手掛かりの一つだった。あの祭りが人間のものではないのは知っている。だから浜夜はこうして何度も妖怪や霊達にアプローチをするしかないのだ。

「えっと……名前は？」

何でも良い。とにかく会話を引き伸ばさなくてはならない。今まで同様、一度消えたら人間嫌いな彼等はきつと二度と姿を現してくれない。タバコ一本では繋ぎ止められないだろう。彼等の世界にパイプを作りたい。そのためには誰かの協力が必要なのだ。人ならざる者の誰かの。

「……教える必要もないが、名乗られたら名乗り返さんと礼儀に反するか……。私はテマリ。猫又と言えば分かるか？ 糸目男」

「猫又……」

黄色いまなこに走る黒筋の目。彼女の瞳は猫そのもの。猫又は日本でも有名な古い妖怪だ。元はただの猫が、深い年月を生き永らえることによりまれに妖怪へと化ける。

「この関東を見守る長妖怪の一人だ。お前の顔は覚えたからな。私達に妙な真似はするなよ。こちら人間との戦争など望んでいないではな」

「だから、待ってくれ！ 何か……何か困ったことはないか！？ 妖怪が人間より肉体的に優れているのは知っている！ でも……人間でなければ手が届かないことだってあるはずだろ！？」

テマリが口にした長妖怪と言う役職がどれほどのものか浜夜には分からないが、そこには妖怪達を統括する響きがあった。瞬時に頭を働かせ、そこを切り込む。彼女はおそらくただの一妖怪ではない。だからこそ多くの事柄を抱え、その分取っ掛かりもあると予測する。「悪いがお前の期待には応えてやれん。五百年以上生きた私でも、本当にそんな連中は知らんだ。仲間の誰もひよつとこの祭りなぞ知らん。嘘ではないぞ」

「分かった、ひよつとこの件は了解した。ならせめて……僕達で何か力になれないか？ 異路色系目相談所は情報収集は得意なんだ。

気づいているだろうけど、僕も雪も靈感の類はない。それでもテマリを探し当てることができた」

「情報は私やジッポ、アオイが集めてくるものであって、浜夜さん自体は別に何もしてないけどな」

雪のツッコミは置いておく。浜夜はテマリを放したくなかった。

下心があるうと、必死に食らいついていく。

「見返りに何を求めている。欲のない人間ほど恐ろしいものはこの世にない。私の見目に惹かれたか？ それとただの興味本位——」
「いやいやいや、それはないよ。絶対ない。そんなことは全く関係ない。分かった、正直に言う。僕はただ君達の世界と関係を持ちただけなんだ。あいつ等は、おそらくこの世界のどこを探しても出てこない。だから人外のものに触れないと——」

先程まで消えていたプレッシャーが突如浜夜の全身を襲った。まるで暴風だ。それは言葉を途中で切り、腕を防御に回して耐えなくてはならないほどだ。テマリ瞳に明らかなる怒気が宿る。食いついた歯と僅かに逆立った髪の毛はその象徴だろう。風が大きく唸りをあげて自分に抗議した。

隣の雪はなぜか軽快に笑っていた。——自分一人にのみ発せられたものらしい。

「お前……女から頬を引つ叩かれたことがないか糸目？ このたわけめ！」

……浜夜は、自分が空気を読めないことを自覚している。加え、昔から人間関係そっちのけでひよつとこの祭りを追いかけてきたせいか、一般的な社会常識の類にもやや疎い。どうやら自分は地雷を踏んでしまったようだ。

「——まあいい。やましい心がないのは分かった。……では一つ聞こう。ここら一帯で、願いを叶える店とやらがあるそうなのだが、お前達何か知らないか？ どうにもこの街は人が多くてな。濁った臭いが街中を漂っているせいで私の鼻が働かんのだ」

この新宿で願いを叶える店？ 浜夜は首を傾げる。怪しい宗教と

しか思えない歌い文句だが、その手の類こそまさに自分達の得意分野だ。しかし残念ながらそのような情報は聞いたことがない。

「ああ。私チームで聞いたことあるよ。あくまで噂しか知らないけど、本当に痩せたり、パッチリ瞼になったりした子がいるって。ジッポに本格的に調べてもらえば、もっと分かるんじゃない？」

「ほう……情報を期待できるのか？」

「多分ね。浜夜さんは知らないかもしれないけど、それ十代二十代では結構有名な噂だし。てかアンタ、そんな店調べてどうするんだ」「仲良くお喋りに行くだけだ」

自分の目の前で助手と依頼人が話を進めてしまっている。浜夜は無言でその成り行きを見守るが、悔しさも何も感じない。単に、雪が頼りになるということを再認識させられるだけだ。

気づけば二人の会話が止んでいた。テマリが自分の顔をまじまじと見つめていることに気づく。

——また、この生まれつきの目をからかわれるのだろうか。テマリはフツと不敵な笑みを浮かべた。

「お前の、その悩みゼロのような目が気に入った。運が良いぞ？特別に一緒に行動してやろう。……よし、その店へ私を連れて行ってくれ」

何とも傲慢な態度だが——抗議の眼差しをテマリに送る雪をよそに、浜夜は再び心臓が早鐘を打つのを感じた。今……彼女は何と言った？

そこへ連れて行ってくれ。

本当に良いのか？　そう詰め寄りそうになるのを思い留まる。連れて行ってくれ、確かに今テマリはそう言ったのだ。信じられない。今自分は、本当に妖怪と行動を共にする約束を得たのだ！

「本当にお喋りなのか？　……物騒なことをするつもりじゃないだろうな？」

テマリが同行してくれることに胸が高鳴る。遂に人ならざる者と、その世界を共にすることが出来るかもしれないのだ。それでも釘を

刺すことは忘れない。清く正しく、は浜夜の譲れない流儀だった。冷静を装って声を出す。

「お前達にそこまで話す必要はない。ほれ、早く連れて行け。美人は気が短いぞ」

信じられないことに、どうやら本当に妖怪と交渉が成立してしまつたらしい。秘密を作られる程度のことは仕方ないので追求はしない。それでも浜夜としては願ったり叶ったりだ。不安要素としては、自分でも自覚しているらしいが、このテマリという猫又の気が短い点くらいか。浜夜は自分の望みのためとは言え、破壊行為はご法度だった。

「僕から頼んでおいて何だけど……テマリ、僕は善良をモットーとしている。人間社会のルールは守ってくれよ？」

「ふん、二十年足らずしか生きていない子供が私に道德を説くか。面白い冗談だな」

了承を得られたのか今一つ分からない尊大な返事だったが、浜夜は昂ぶる気持ちを抑えつつ、会話を切って神社の入り口に止めてあつたバンへと向かう。ロックを解除し、運転席へ乗り込んだ。まずは事務所兼我が家へ戻るとしよう。雪の言う通り、情報収集が得意な仲間を頼る必要がある。

「そこは私の席だ、テメエの席は後ろだ痴女が！」

「……この座席には名前でも書いてあるのか？ 低いのは背丈だけでなく知能もだな」

喧嘩勃発。浜夜は頭を抱えた。気が短いことに関しては雪の右に出る者は今までいなかったが、それと同ランクの者が現れてしまったようだ。火打石達はお互を削り合い炎を着火させる。助手席を揉めること数分。その間、口元で美味なる蒸気を味わう。結局は元の鞘に納まつたらしく、雪が息を切らしながらも浜夜の隣に乗り込んでくる。不機嫌あらわに背後で足を組むのはテマリだ。

やかましいのはあまり好きではない。テマリの世界を覗ける代価は今後自分の白髪の数となつて現れるのだろうか、大きな成果を得

た今、そんな瑣末なことは構わない。「普通」の場所はそれこそ日本全国探し回ったのだ。あのお祭りの場所を突き止めるには、人以外の者の力が必要だった。テマリにそのつもりはなくとも、浜夜は大きな希望と期待を胸に神社を後にした。

第一話（後書き）

今作も、相変わらず区切りが上手くありません^^；
いきなりですが、第二話はかなり短くなります。凸凹で申し訳ありません。

ご質問、またはここでは何か書き辛いような事がありましたら以下のメールアドレスまでどうぞ。批判等のご意見も随時受け付けております。

`pirrot2226@yahoo.co.jp`

それから、一応HPアドも置いておきます；既に更新止まっておりますが……

`http://tobiryu.hp.infoseek.co.jp/`

第二話

車で東へ走ること十分。シャッターが降りた新宿の商店街を抜けて横道に逸れると、閑静な住宅街が見えてくる。終電を逃した学生も酔っ払いも、ホストもない、未だ騒がしい新宿を横目に眠りについた空間。築三十年の薄汚れたアパートに着くと浜夜は車を駐車場に止め砂利を踏む。ご近所さんを考えてあまり大きな物音は立えない。雪もそんな浜夜の性格を知っているから無言だ。テマリにもそれを十分注意すると、赤錆が目立つ鉄製の階段を上り一つの部屋の前に立った。鍵はかかっている。表札には消えかかったマジックで異路色系目相談所、と記されている。

「ただいま」

浜夜と雪は靴を脱いで中に足を踏み入れる。テマリも赤い鼻緒が付いた自分のぞうりを丁寧に揃えると、彼女にしては意外にも、おそろおそろの中に入ろうとして――

「臭いぞ。私の着物が汚染される」

すぐに鼻についたであろう煙たい臭いに顔をしかめた。こればかりは耐えてもらおう。

まずは仲間にテマリのことを説明しなくてはならない。仲間の一人がパソコンに向かい合い携帯で話しているのが玄関を潜った時点で見えている。淡い緑のキャップと黒いサングラス。おそらく二十代後半。煙たさの発生源、ジッポがいつもの人を食ったような笑顔で椅子に寄り掛かっていた。

「うんうん。そう、そうだよ。出来るさ。……うん。やっちゃえ。大丈夫だからさ。……このままじゃ何も変わらないよ？　お？　…

…そんな、腎臓？　何言ってるの。皮膚だよ皮膚」

ジッポの携帯はしょっちゅう鳴る。副業らしい。それでも彼は決して本来の仕事を疎かにしない。浜夜達の見ている前で、携帯を肩と耳に挟みつつもその両手は忙しくキーボードを叩いていた。

「……フィリピンかタイだな。大丈夫大丈夫。……そうそう。ただし声は出しちゃ駄目だよ」

「やあ、お帰り二人共。……あれ？ お客さんかな？」

電話の終わらないジッポに代わって出迎えてくれたのは、上半身裸でブリーフ一枚に身を包んだ痩身長躯、アオイだ。流れるような金髪を揺らし、浜夜とは別の意味の細まった目つき。小さな唇からは相変わらず男とは思えない官能的な声が紡がれた。その両腕の中には桃色のドレスで着飾ったフランス人形が抱かれている。確か彼女の名前はロザリアだ。

「ただいまアオイ。それが今日はただのお客さんじゃなくてね、依頼人でなく——」

振り返った浜夜が見たのは、ぞうりを履いて颯爽と立ち去ろうとしているテマリの姿だった。鈍感な浜夜とて、その背中からは有無を言わさぬ強い意志を感じ取ることが出来た。

「ま、待った待った待った！ どうして帰るんだよテマリ！！」

「お。私が初めてここへ来た時と同じパターンだわ」

退出されてはかなわない。浜夜は血相をかかえてテマリの腕を掴む。呑気に見ている助手は引き止めるのを手伝ってくれないようだ。

「放せ馬鹿者！ 私を狂人の仲間入りさせる気か！！」

「何を誤解しているのかは想像つくけど、まだ話も聞いてないだろ！？ ジッポもアオイも凄い良いヤツなんだぞ！」

「あのような得体の知れない連中の放つ言葉など呪詛にしかならんわ！」

何気ない一言なのだろう。おそらくテマリの本心からの言葉でないことは浜夜にも分かっていた。だが——その一言は浜夜の心に不快な音をたてて侵入する。

全ては唐突。テマリの腕を掴む力が急速に高まる。大きく変わった声色が言葉となって飛び出た。

「……おい。もう一度言ってみる……。誰が得体の知れない連中だつて？ おい」

「な……何だ？ 糸目——」

それまで常に自信に満ち溢れていたテマリの顔が歪む。理性の欠片が浜夜の心の扉を強くノックする。やめろ。彼女はこれから行動を共にする力ある妖怪だ。自分の探し物は彼女の世界にしかない。テマリを失うわけにはいかない！

明確なる意思を持って浜夜は口にする。本心の言葉を。力強く。

「出て行け。僕の仲間を蔑むヤツなんて、こっちから願い下げだ」
「……」

自分で連れて来ておいて「出て行け」。だが彼女の腕も掴んだまま。何という矛盾。

冷静な自分が反論する。どれだけ馬鹿げた言葉を自分は言っているのか。まるで子供。「冗談交じりのテマリの言葉に、何という言葉を返しているのか。」

既にテマリの顔から表情は失われていた。彼女が自分の言葉をどう受け止めたのか、浜夜に知る術はない。自分の目を真っ直ぐ見つめている。今度は笑うことはない。

やがてテマリが、ゆっくりと口を開き——

「ストップストップストップ——」

「おい待て！ 何やってんだ善——」

「善君、落ち着いて！」

二人の間に雪、ジッポ、アオイが慌てて乱入してくる。浜夜は肩を揺さぶられて我に返った。いつの間に電話を終えたのかジッポが目の前に立ちテマリとの間の壁となっている。雪とアオイの手が自分の体を掴んで制止していた。

雪がわざとらしい大声を出す。

「そ、そうだ！ ジッポ！ 新宿一帯の噂で、願いを叶える店って聞いたことあるでしょ！？ あの情報を知りたいんだ！ 教えてよ、ね、ね！」

「お、おう！ 任せておけ！ 俺のネット情報網をナメるなよ！？ ちょっと待ってる！」

「さっすが山田次郎さん！ ステキイ！ 全然ステキじゃないけど！」

「馬鹿野郎、ジッポと呼べジッポと！！」

風船からガスが抜けるように、浜夜は自分の体から蒸気のような物が頭から放出されていく錯覚を覚えていた。恥ずかしさのあまりうずくまりたくなる。雪とジッポの即席のドタバタ劇が自分の中に通り過ぎて行く。顔が熱くなるのを感じる。

「今、お茶を入れるから飲みなよ善君。——お客さんも、良かったらどうかな？」

変わらずロザリアを抱いたまま、アオイは静かにテマリに尋ねた。浜夜も、しかられた子供のようにテマリを覗き込む。

「——私の目を見ても平然と茶を出せるか。まったくこの住人は本当に変わっている。なのに私の方ときたら、お前達の目を見ようともせず人となりを見極めようとした。——すまぬ。阿呆は私だった」

何百年と生きた猫又が、知り合って間もない人間達に素直に頭を下げる。それがどのような意味を持つかわからないほど浜夜も幼くはなかった。

「いや、こちらもすまない。いきなりキレるなんてどうかしている。許してくれテマリ」

詫びる浜夜をよそに、再びぞうりを脱いで事務所に上がったテマリはもはや最初に出会った時の顔だ。彼女は短気かもしれないが、分別のある大人であることが今のやり取りで分かった。

「紹介してくれ糸目」

「ん。まずは……パソコンの前に座っているのがジッポ。インターネットで世界中の情報を仕入れてくる。テマリを見つけるために使ったあのマイクや、霊的な力ゼロの僕が悪霊と戦うための護符やら魔除けやらもネット上から見つけてきてくれる。ウチのホームペー

ジの管理人も務めているかな」

「帽子もグラサンもタバコも、このままで失礼するぞ。俺のトレー

ドマークなんだ。善とは一番長い付き合いだ。コイツも相当変わってるが、根っこは悪いヤツじゃないからよ、勘弁してやってくれ」

ジッポの角張った顔の輪郭が見せるゴツイ印象には迷彩ズボンとアーマーベストがよく似合っている。

「こっちはアオイ。新宿のホスト界は三大勢力が存在しているけど、その一角『白薔薇』のナンバー一の座を三年に渡って守り続けている。政界や業界の裏話はアオイが専門。コネやパイプが多く、彼を通じれば大抵の所は話をつけてもらえる」

「初めまして。本当は裸で過ごしたいんだけどね。善君や雪君がどうしても言うからブリーフだけ履かせてもらっているよ。それから、この子はロザリア。他に、大勢の子が僕の部屋にいるから今度一人一人紹介するよ。宜しくね」

片手でロザリアを抱き、もう一方の手でお茶の入ったお盆を持ちながらアオイは透明テーブルの前にやってくる。人数分の湯飲みをその綺麗な手で並べていった。

「ほら、座りなよ。……私の紹介は省くぜ？ さっきも言ったが浜夜さんの助手だ」

雪の声を合図に、テマリが黒皮張りの来客ソファに座る。そこから改めて室内を見回したのだろう。その顔が疑問符で埋め尽くされる。

「おかしい。なぜこの部屋はこんなにも広いのだ？ 外から見た時、この二階には住居が七つ八つあるかと思ったが？」

来客用テーブルとソファ。その隣にはジッポの予備のパソコンが四台置かれ、更にその隣には胡散臭いタイトルのオカルト本がギッシリ詰まった本棚が合計六つ。その奥にはサンドバッグが吊るされダンベルや鉄アレイが転がっておりその奥は——ここからではよく見えない。

「一階二階の部屋は全部俺達が借り切っているからな。んで、反対する善を押し切って、面倒だから二階だけ、必要な柱を残して両隣の壁は全部俺がぶち抜いた。一階は個々の住処、二階が我等が事務

所ってわけだ。なに、家主にはたんまり金を渡してあるから問題ねえぜ」

パソコンを叩きながら軽快にジツポが笑う。破壊行為を良しとしない浜夜は溜息をつくより他はない。

さすがに古き妖怪であるテマリもこれには啞然としたようだ。常識に疎い浜夜の周りには、常識外れの仲間達が数多く揃っている。

「もしお金に困ったら、そこに適当に転がっているから、いくらか持って行って良いよ？ 僕達そんなにお金使わないしね」

アオイの指し示す方向は部屋の隅だ。客の上着等を引っ掛けるための木製コートハンガーが佇んでいるが、今は何も吊るされていない。代わり——と言うわけではないのだろうが、その足元には万札が無造作に数十枚落ちている。雪が、男三人に聞こえるように「また散らかしやがって」と怒気を孕んだ声で呟いた。

湯飲みを持ったまま口を開けて固まったのはテマリだ。やがてその額に手を当てる。

「——私はずっとこの関東を見守ってきたつもりでいたが……人間という存在に対する認識が間違っていたのか？ その性格も、奇抜さも、金に対する無頓着さも……今時の人間は皆こうなのか？」

「この三人はネジが外れているから例外だ。あんたの人間に対する認識は、多分間違っちゃいないよ。頼むからこの部屋だけを見て人間を判断するのは止めてくれ」

雪の言葉に浜夜、ジツポ、アオイはそれぞれ思う所があるのか押し黙る。——ネジは外れているらしいがそれでも口は聞ける。少しあって浜夜はテマリを紹介した。

「ジツポ、アオイ。彼女はテマリ。妖怪だ。さっき雪が言っていたけど、この新宿で願いの叶える店の調査をしているから力になってやってくれ。今後しばらく一緒に行動することになる」

「おう、そうか。でもよ……すまねえ。今少し見てみたんだが……それっぽい情報から嘘臭い噂まで、情報が氾濫している。一つ一つ潰していかなくちゃならねえ。テマリさんよ、明日の朝じゃ駄目か

い」

「む？　む？　いや……別に構わんが……。それより、私妖怪——」
「サンキュ！　明日の朝までには情報を整理しておくぜ。任せな！」
そう言つてテマリから再びパソコンのモニターへその視線を移すと、叩きつけるようにキーボードを打つていく。浜夜は知っている。熱を注いだジツポがどれだけ頼もしいか。おそらく本当に明日の朝には何か情報を得られることだろう。

「それじゃあテマリ。部屋に案内するよ。今後行動を一緒にするのなら、テマリも一人の場所が欲しいだろ？　今日はもうジツポに任せて眠ろう」

既に深夜一時。三人に見送られ浜夜はテマリを連れて玄関を出る。新鮮な空気をたらふく吸い込みながら階段を降りていく。多少のいざごさはあつたが、何とか明日からは搜索が開始できそうだ。期待と興奮が胸の中に渦巻く。

「——誰も、驚かないのだな。私の目を見ても」

一階の空き部屋に着くと、テマリが難しそうな顔で唸る。

「もしかしてビックリしてほしかったのかい？　意外と子供っぽい所があるんだなテマリは」

「——くっ！」

冗談で言つたそれはどうやら当たっていたらしい。

面白い妖怪だ。老獪そうに見えて礼儀正しく、それでいて童心を持つ。

「雪もジツポもアオイも、皆一度、人害の連中に長年悩まされた経験があつてね。それにこの職業だ。腐つても妖怪の類は専門分野」

入り口の鍵を開き、ドアを開けてエスコートする。……この作法に間違いはないはずだ。

「先程はすまなかつたな糸目。お前の心に土足で踏み入れたようだ」
「こちらこそごめん。いきなりカツとなつてしまつて悪かつた」

テマリは薄暗い部屋の中に入るとこちらを振り返る。その瞳が妖艶な色を宿した——気がした。

「ヒヒヒヒ。何なら中に入るか？ 二人でじつくりと仲直りするの
も悪くないかもな」

「いや、もう大丈夫でしょ。全くする必要ないよ。不要不要」

瞬間、テマリの足からぞうりが飛んできて浜夜の鼻っ柱に激突した。流石は猫又の力か、たったそれだけで浜夜の尻は地面に着き、気づいたら夜空を見上げている格好となった。不機嫌全開を思わせる音を立ててドアが閉まる。――ぞうりは自分の顔に乗ったまままだ。

何をどう間違えたのか、後で雪にでも聞いておこう。

ともあれ――これでようやく、あの日から止まったままの課題を、一歩進めることが出来た気がする。

星の見えない墨色の空。何も見えず、右往左往の日々だった。誰ともなく呟く。

「お姉ちゃん――」

この空の下、ひよっとこ達はどこかで舞い続けているのだろうか。大の字に寝転び空の彼方へ想いを馳せる。姿なき星をこの手に掴むことを心に誓う――

第三話（前書き）

中途半端。

非常に短いです；

無理やり半分に区切るか、第三話・第四話を3：7で区切るか悩みました。

後者を取らせて頂いてます。

読み辛くてすいません；

第三話

2

起床はいつも通り六時きっかりだ。ランニングを終え、シャワーを浴び終わる頃には眠気は完全に飛んでいる。気分爽快。いつもならその後数時間は誰も起きて来ないが、徹夜で情報収集にあたっているジツポだけは今日は例外だろう。静かに階段を上がって行き事務所のドアを開ける。

「おふ。ほはほう」

来客用ソファで踏ん返り返って出迎えてくれたのは意外にもテマリだ。口に何かを入れているのか、ポリポリという音と共に朝の挨拶と思われる言葉を交わす。玄関入り口に――ぞうりは二足丁寧に並べて置いてあった。

「おはよう。早いんだな」

昨夜の就寝時間を考えればまだ眠っていても良さそうなものだが……浜夜の予想に反し、テマリの元気は少しも損なわれていないようだ。逆に、部屋の隅に置いてある巨大な黄土色の熊のヌイグルミを枕代わりにして、ジツポが豪快にイビキをかいていた。

「糸目が来たらこれを渡しておけとよ。例の店だそうだ。どれが本物が分からんが、その四軒にまで候補を絞ることが出来たらしい」差し出された紙には候補店の住所、簡単な地図もプリントアウトされている。いずれも――新宿駅を中心に歩いて十分、二十分程度の距離のものだ。しかし、ここまで分かっていたらテマリは一人でも搜索が出来てしまったのでは――

「――あ。まさか、わざわざ待っててくれたのか？　ありがとうテマリ」

それを告げるとテマリが突如苦しげに喉を叩き始めた。食べている物が食道に詰まったのか、浜夜が水を持ってこようとする前に、

思い切り息を吐き出し肩を上下させる。

「違うわ馬鹿者が！ 私は汚い街中を歩くのが好かんから道に疎い。だからここで案内役が来るのを待っていただけだ！」

理由はどうであれ、頼られることに悪い気はしない。全ての窓を解き放っているのか、爽やかな風が事務所に舞い込んだ。——今日と言つ日を祝福している……と考えるのは思い上がりか。

「これ、頂いているからな？」

不遜とした態度で浜夜の前に現れたのは、皿に乗せられたキウウリとナス。漂うシンナー臭のような匂いは自分のよく知るものだ。正体に気づき思わず叫ぶ。

「これ、僕の作ったぬか漬けじゃないか！ 何勝手に食べているんだ——！」

「一階の空き部屋の台所に沢山入っていたぞ？ 別に少しくらい良からうに。美味いぞこれ」

「違う——！」

浜夜は深く溜息を吐く。テマリが自分のぬか漬けを褒めてくれたならば尚更しつかりとさせておかなくてはならない。これは違う、このぬか漬けではまだ駄目なのだ。

「あそこに置いてあるぬか床はまだ試作段階なんだ。こんな物で満足するな。確かに市販の物と比べれば断然美味いかもしれないが、それはテマリが僕のぬか漬けを知らないからだ。色々なぬか床に挑戦してきた。三百通りくらい作つたがまだ駄目なんだ！ まだ洗みが足りない！ そうだな、とりあえず今一番の完成品は僕の部屋にある。今から——」

「ま、待て！ 分かった、よく分かった。その——何か色々悪かった」

突如遠慮がちになったテマリ。心なしか、頬が引きつっているようにも見える。

「謝る必要はない。ただそんな物で満足されては困るんだ。いいか、重要なのは水だ——」

構わず熱弁を振るう。これは重要なことなのだ。——少なくとも浜夜にとっては。

けたたましい音を立てて開かれたドアから飛び込んできたのは雪だ。彼女にしては珍しく、この時間に起床したらしい。白いカットソーシャツに、動きやすそうなグレーのショートパンツ。ポケット周りに妙にシワが寄っているが、ギャザーと呼ばれるお洒落ポイントらしい。

「下らないことで力説しているんじゃないよ浜夜さん！ 外にまで声が響いてるぞ。……テメエも、私達が楽しみにしている浜夜さんのぬか漬け勝手に食うんじゃないやねえ！」

「服のセンスもなければ学習能力もなしか。このぬか漬けに所有者の名前でも書いてあったか？」

「常識で分かるだろ馬鹿野郎！ いちいち小学生みたいなこと言っているんじゃないやねえ！」

「あああああああああ！！！！ 人が寝ている前でキャンキャン喚くな、うるせエエエ！！！！」

雪とテマリの間に落ちたのはジッポと呼ばれる雷だ。立ち上がったその姿からは、寝不足が原因としか思えない黒いオーラが全身から沸き出ている気がする。今回こそは自分でも空気が読める。——

今のジッポはヤバイ。その瞳はサングラスに覆われて読むことはできない。

「消えろ」

無感情な声。昨夜の親しみあるジッポの声とはまるで別人だ。雪とテマリが揃って言葉を失い、同時にジッポを向く。浜夜も久しぶりに見る暴走したジッポの姿だ。となると、おそらく次の行動は——

「ゴー」

「あ、やつぱり」

何の躊躇いもなく、ジッポはアーマーベストの中から無骨な黒金を取り出した。その形は、昔夏場に使用した水鉄砲に非常に形が似ている。黒い円形の穴が三人に向けられた。

「……俺を寝かせる……。——おら、とつと消えるオオオオオオオオ……」

悪魔の目覚めは決して邪魔してはならない。浜夜、雪、テマリの三人は一目散に玄関へと駆け出した。ジッポの残したメモだけは忘れずに手に取る。しばらく事務所へは入れそうにない。——時間をかけてゆつくりと四箇所の店を回る必要があった。

朝九時では店が開いているとはいい難い。仕方なく、浜夜はメモを頼りに店の場所確認だけ先に済ませることにした。適当な場所に車を止めると、四箇所のうち最初の一件目を目指し歩き出す。

「……おい糸目。あのグラサン男。あれどう見ても犯罪者だろう。昨夜、電話での会話内容もおかしかったぞ。お前私に言ったよな？ 善良がモットーであると」

釈然としない様子でテマリが話す。ちなみにその瞳には、浜夜がつけさせたブラウンレンズのサングラスがかけられていた。

「ジッポの副職は僕もよく知らないんだ。でも大丈夫。出会ってバタバタがあつて……最後にジッポはきちんと約束してくれたから。善良市民に迷惑をかけることだけはしない、て。確かに変な会話を電話越しでたまにしているけど、ジッポは僕との約束を破らないと信じているよ」

上着を腕に抱えつつ、浜夜は空いている方の手でワイシャツの胸ポケットを探る。

「あれ？」

だがそこに目的の物はない。昨夜の教訓を得て尻ポケットも探る。ない。両ポケット、ここもない。

「——タバコなら、さっき浜夜さん、自分で上着の内ポケットに入ってたよ」

「そうだった？ ……ああ、本当だ！ ありがとう雪」

だがそれを口に啜える前に、雪が浜夜の胸元を見ながら溜息をつき前に回った。

「浜夜さん、あんたある意味器用だわ。よくここまで綺麗にボタンを掛け違えることができるな」

「え、嘘!？」

「あーもー、動かないで。じっとして」

ワイシャツのボタンが全て外される。ひと気がない場所を歩いてきたのが幸いした。思わず周りを見渡すが、遠くからこちらに向かつて歩く通行人が一人だけ。安堵の息をつく。雪は何の躊躇いもせず一個一個、丁寧にボタンを通していく。まるで自分が子供みたいで、これはさすがに恥ずかしい。

「——何というダメ男だ。私も——人選を誤ったかもしれん」
「面目ない」

猫目が細まった気がした。着実に自分のポイントが下がっていく。このままでは本当にテマリから解約されてしまうかもしれない。やはり最高のぬか漬けを作らなくてはならないだろう。

「あれ? ……浜夜さんかい? あと……白金?」

芯がしつかり通った逞しい女性の声。そんな声が自分と雪を名指して呼ぶことに浜夜は驚愕を隠せない。ぽかんとしつつ、目の前の通行人に視線を返した。雪の反応速度は異常とも言えた。電気に弾かれたかのようにボタンから手を離すと、即座に相手に向き直る。

「い、五十嵐さん……!?!? おはようございます!」

「ああ、おはよう白金。……最近顔見せないなあ」

金色の長髪が風にたなびく。水色のタンクトップからは豊満な胸が曲線を描いており、その長い足も相俟ってモデルのような体系を連想させた。眩い粒状のネックレスがいやにアンバランスに映る。彼女の表情は静粛なそれとは異なり、自信と勝気に溢れ強い意志がその瞳に宿っているからだ。

「ま、仕方ないか。ボタンをつけてやるほど男に付きっ切りで離れられないのなら、そりゃ必然とこっちは来れないわな」

「五十嵐さん! 違います! 違いますから!」

狼狽する雪の姿は貴重だ。いつも元気全開な彼女が、その力を持

て余し振り回されている。浜夜はゆっくりタバコを啜るとその煙を吸い込んだ。今日はバナラ味だ。

「あの誰構わず噛みついてた狂犬がねえ……。人間変われば変わるもんだ。愛かねえ……。おはよう浜夜さん——と、そちらは？」

「今追いかけている仕事の依頼人です。その……わけあってサングラスは外せませんが……」

「相変わらずオカルト絡みかい。本当……思い出すねえ。最初は五回も六回もあんたを追いついたのに、七回も八回も私のアパートに来ては『その子を治療させて下さい』だ。胡散臭いヤツとしか思っ
てなかったけど、その甲斐あって白金は笑うことも恥らうことも出来るようになったみたいだ」

その両手にはレジ袋が握られていた。中身は野菜やら日用品やらで埋め尽くされている。浜夜の視線に気づいたのだらう、五十嵐は肩を竦めて笑った。

「この街には、帰るべき場所を失った子が沢山いるからね。白金一人が出て行っても、次々に新しい子が入ってくるよ。出来ることなら——皆に自分の居場所を作ってあげたい。浜夜さん、白金のこと頼んだよ」

慈しむような、やり切れないようなその瞳は、我が子を見守る母に似ていた。五十嵐はテマリに会釈すると再び歩き出して行った。

「白金——！ 敵は手ごわいぞ——！？ お前にはない豊満な体と、服装のエロティズムを知っている！ 健闘を祈っているからな——！」

ひと気がなくて幸いした——のは今度は雪だ。何を慌てたのか、遠ざかる五十嵐に向けて支離滅裂な日本語を飛ばしている。翻訳できない浜夜は彼女が落ち着くまでバナラを味わうことに専念。

「誰だあれは？ 何とも気丈そうな女だな」

「彼女は五十嵐さん。レディース『紅』——雪が属しているチームの一番偉い人さ。尊敬できる人で、行き場をなくした少女達を自分の家に住まわせている。雪も——長い間彼女にお世話になっていて

ね」

大声で叫ぶ雪をよそに、そつとテマリと話す。もう一年も前のことだ。道具と文献の知識だけを頼りに、数時間に渡って雪に取り付いていた悪霊を退治したのは。最初出会った雪は、口よりまず手が出る子だった。今の比ではない。——思い返し、左右の腕に痛みが走る錯覚に一瞬襲われる。

ゆでたこのように真つ赤になった雪が落ち着いたのは、浜夜がバニラ味を五分間堪能した後のことだった——

第四話

マイクの反応は店が見えた瞬間に起こった。

昨夜のような狂った反応ではない。今度は振動はなく、通常通り耳障りなノイズ音だけが木霊する。道行く人が奇怪な物を見るようにこちらに視線を向けてくる。

「おいおい、まさか一件目でいきなりアタリかよ」

興奮する口調と裏腹に、雪は浜夜のシャツの裾を掴む。

「テマリ。どうしてこのお店を追っているのか、もう一度聞いたらダメかい？　もしかしたら自分の身を守る必要があるかもしれない。そのためには背景を知っておきたいんだ」

二つの視線がテマリに注がれる。動じない。何かを考えるかのように腕を組んでいる。やがてその小さな愛らしい唇が開いた。

「……まあいいだろう。別に大したことではないしな。それより糸目、興味本位で付いてこれるのはここまでだぞ、これは最終警告だ。中でお前達が襲われても私は助けてやれんかもしれん」

「興味本位じゃないさ。——テマリが知らなくても、この中にいるヤツはひよつとこの祭りを知っているかもしれない。とにかくテマリに付いて行きたいんだ。こっちの世界は調べ尽くした。手掛かりがあるならそちらの世界しかないと思っている」

裾を掴む雪の力が増した。無言の意味だ。彼女も引く気はない。当初は、危険だから付いてくるのをやめさせようと骨を折ったが、それは全て無駄骨に終わった。テマリから人間二人はどう見えているのか、子供の遊びの延長に見えてないことを祈る。頼りなく不甲斐ない自分であるが、それでも意思だけは認めてほしかった。

「——人間同士でも、昔は今以上に戦争をしていたらどう？　現代ではそれを過去とし仲良く手を取り合おうと躍起になっている。妖怪と人の関係も同じだ。私達も好んで戦争などしたくない。およそ四百年前、今の大阪で陰陽師の連中と私達とで不可侵条約が結ばれ

た。お互いの干渉を極力控えようというものだ。だから——出来ることなら今回の件は、私は一人で調査をしたい」

浜夜とて初めて聞く話だ。確かに古事記を紐解けば、最も妖怪が跋扈していた大阪では嘘とも真実とも取れるような話を沢山見ることが出来る。しかし真偽は誰にも分からない。人と妖怪との会合の話も読んだ気がするが、それこそ一番の与太話としか思えない内容だ。

「しかし、どの時代にも阿呆はいるものだ。持たざる人間に、私達妖怪の力を分け与える。一番越えてはならぬ禁忌。他国の文明を迎え入れる貿易とは色合いがまるで異なる。人は人のままで。妖怪は妖怪のままで。そのバランスは決して崩してはならない」

「ってことは痴女よ、このボロそうな店の中にいるのは人間でなく——」

「うむ。妖怪だ。願いを叶える——となれば相手が誰か、おおその目星もついている。ヤツはまだ若く、古参の私と違い条約の重みも知らない。お前達、本当にどうなっても知らんからな」

昨夜の昂ぶりが蘇ってくる。妖怪の世界。未だ浜夜も片鱗しか垣間見たことのない世界。テマリには申し訳ないが、浜夜は子供心のような高揚感をも感じていた。

「ところで——」

急に口調を変えてテマリが顔を右へ左へと動かす。まるで挙動不審者だ。

「先から、妙に視線を感じるのだが？」

道行く人は皆テマリに視線を寄せずにはいられない。それもそのはず。夏場に着物という点でも奇異の対象となるのに、まるでそれをミニスカートのように着こなし美脚を覗かせているのだ。サンダラスを掛けていると言えど、その小さな顔と、整った鼻や口元から美人であることも想像できる。こんな人間が往来を歩いていたら、浜夜とて確実に視線を向けるだろう。

「そんな格好してりや当たり前だ！ 注目集めないうちにとつと

行こうぜ。あの店もう開いてる」

看板も何もないそのコンクリートの建物は所々漆喰にヒビが入っており、どう見ても繁盛しているとは思えない。それ以前に、これを古い一軒家と思うことはあっても、お店と認知できる人はいないのではないか。ちなみに外に商品は何も並んでいなければショーケースもない。手元のメモを見ても、ジッポもここが何の店なのか掴めなかったのか情報は記されていない。

「それじゃあ行こう。……自分の身は自分で何とかしてみせる。それで良いだろ？ テマリ」

肯定の返事はない。しかし——否定の返事もない。聞こえたのは溜息だけだ。

浜夜は曇った透明ガラスの扉の前に立つと、取っ手を持って前へと押し込んだ。

鐘の音が鳴る。

来店を告げるその合図は無人の店内に無機質に響き渡った。

まず目に飛び込んできたのは大小様々な陶器だ。壺や皿、急須などの瀬戸物の容器。値札が貼られ、年季の入った木製のテーブルに並べられている。カウンターにレジは置かれているが、そこには誰も立っていない。店内は狭く、レジの奥に二階へと繋がる階段はあるが、売り場は実質この一帯だけのようだ。

「何だかジジくせえ物ばかり売ってるな」

乱雑な口調はともかく、雪の意見には浜夜も同意だ。若年層・中年層が集うこの街で売る物にしては少々華がない。

壁際には小さなネットが幾つも貼られ、その中にはけん玉やミニカー、コマなどがそれぞれ入れてある。その横、白い絹が敷かれた台の上にはこけしや木彫りの熊、七福神のミニチュアや扇子が置いてあり、まるで観光地の土産屋を思わせた。

未だレジには誰も姿を現さない。浜夜はそのまま、何気なく店内を見渡し——

壁に掛かっている物を見て体が凍りついた。

それはお面だ。

真っ白な肌の色。白ずきん。何より最大の特徴は——人を小馬鹿にしたかのような尖った唇。ぞくりと背中に戦慄が走る。面は何も言わずに浜夜を見つめている。それに対し憤怒の表情で見つめ返す自分は滑稽だろうか。二つの面。笑われるのはどちらか。

ひよつとこの表情に動きはない。当たり前だ。触ってみる。紙質の手触り。そこに生命など宿っているはずもない。埃が指に付いた。「浜夜さん……」

氣遣うような雪の声。見上げてくるその表情は見るまでもない。声が物語っている。

——連中がお姉ちゃんを連れ去った。

突然だった。奴等はどこからともなく現れ、気づけば自分とお姉ちゃんの周りでからかうように踊り続けていた。連中は誰も言葉を発さない。笛の音と和太鼓が鳴り響く深夜のお祭り——

「実家の家にもこうやって色々な面が掛けてあつてさ。中にはひよつとこの面もあつたよ。子供の頃はそれをふざけて被ったりして……こんな物、ただ笑いの象徴でしかなかったのに。ひよつとに悩む男なんて日本全国探してもそうはいないよな」

「——糸目」

次に自分を氣遣ってくれたのはテマリだ。昨日の威風堂々なる姿を知っているだけに、アンバランスなその優しい声は貴重だった。

——テマリは、案外良いヤツなのかもしれない。

「おやお客様。そちらの面がお氣に召しましたかな？ 随分と熱を注いでいらつしやるご様子」

三人の視線が同時にレジカウンターへと向けられる。

陳列商品を見つつも浜夜は十分に氣を配っていたし、おそらくテマリはそんな自分の比ではなかっただろう。それでも物音一つ立ずにその男は存在していた。

若い男の顔。式典で見かけるような黒い羽織とグレーの袴。腹には白紋が付けられ、着る者へ深みを生み出す。ヘアワックスがつい

ているのか、弾力をキープした黒髪は新宿を歩くには良く似合う。

「面とは珍妙なもの。ひょっととも昼に見ればただの阿呆ですが、夜に見れば不気味な人外としか映りません。一説によれば、面は見る者の心次第で如何様にも表情を変えるとか。さて、お客様にはそのひょっとこ、人に見えますか？ それとも——何か別のものに？」

男の笑顔には一点の曇りもない。実に楽しげに口元を歪める。そう、曇りが——なさすぎるのだ。眉を潜めている浜夜を前に、まるでその心情の動きを舐めるかのように愉しんでいる。

こちらもそれに気づかないほど間が抜けてはいない。

「テメエが店主か？ おう、コラ。何がそんなにおかしいんだよ」「いえいえ、お気に障ったのでしたら失礼。真剣に面を手にとって頂けることがつい嬉しくて。この国の貴重な伝統文化ですから」

他人の放つ悪口にかけては雪は殊更敏感となる。——幼年期に霊と隣り合わせの生活を送り、同年代の子供達から歓迎されるはずもなかった証拠だ。男が浜夜の心を持って遊んでいることを知った彼女はカウンターまで詰め寄る。浜夜の裾からは、とくに手は離されていた。

しかし妙だ。浜夜は冷静に考える。考えすぎだろうか、どうにもこの男は、いやに自分と面とを結びつけて楽しんでいる節がある気がする。

「客ふんづかまえて笑いの種にするのか。面白い店だな。テメエこのまま——」

「黙っておれチビ女」

これまで黙っていたテマリが遂に動いた。サングラスを外して雪の横に並ぶ。その視線は真っ直ぐ店主へと向けられていた。まるで猫の目が獲物を捕えたかのような。やや汗ばむほどだった空気が途端冷たくなる。

「お前こそ黙っている！ この野郎、浜夜さんを馬鹿にしてやがる！」

「黙っている。——三度は言わんぞ」

低いながらも有無を言わさぬ迫力。怒鳴る迫力などたかが知れている。真に相手を射抜くのなら自分の心の底の闇を分かせなければならぬ。長寿の猫又は確かにそれを知っていた。

理屈でなく本能で雪も理解したようだ。口を噤むがテマリを睨みつけることは忘れない。

「やはりお前だったか呂旛^{ろはん}。願いを叶えるなどと言う夢想じみた言葉は天狗以外に考えられぬ。それでいてこの界限に潜み、若いヤツは自ずと限られる」

「これはテマリ、お久しぶりです。貴方のような見目麗しいお方がこのようなかび臭い店に入られては肌に毒ですよ？ 私のような者にかまけず、ノミの手入れでもしてご自身により磨きをかけた方が時間の有効活用になるでしょうに。そちらの彼氏さんも喜びますよ」
天狗。誰もが知る有名な妖怪だ。しかしその鼻は伝説のように突き出てはいない。

——尊大な態度。見た目から妖怪の年齢を推測するなど出来る由もないが、テマリはこの呂旛という男はまだ若いと言った。ならばそのような妖怪にこれだけ付け上がられて、果たしてあの短気な猫又は今何を思っているのか——

「私が美しいのは当たり前だ。だが最近口クでもない噂を聞いてな。どうにもお前が人間に力を分け与え、その報酬として金を貰ってるという馬鹿馬鹿しい噂だ。妖怪としてあるまじき、あまりに下らん内容。下らなすぎて逆に気になって夜も眠れぬ日がある。不眠は美肌の天敵だ」

「貴方は言わば私達妖怪の警察。人間世界では警察に捕まったら、この言葉を言うのが通例らしいですよ？ 『証拠はあるのか』。——眠れないのでしたら、そちらの方に寝かしつけてもらえば良いでしょうに」

「あれは気もきかなければ空気も読めん、枕の上で話す物語一つ知らんだろ。イビキで余計眠れなくなるのがオチだ。ところでお前、最近預金が潤っているそうではないか。人間世界は不景気で大変ら

しいからな。どうやったのかは知らんが金儲けの方法、是非とも私も知りたいものだ」

浜夜も雪も知らない世界。

それは妖怪と妖怪が対峙し、不穏なる空気を刃に変えぶつけ合う世界だ。今まで自分が退治してきたのは、程度の低い魑魅魍魎の類であつたことを知る。呂旛は満面の笑みの裏側から吹雪の如きプレッシャーを空気に乗せて飛ばしていた。店に入る前のテマリの警告を真の意味で知つた。自分で自分の身を守る？ この呂旛という男が本気になったら、自分は蟻のように潰されるだろう。何を大言壮語を吐いていたのか――。呼吸が荒い。冷や汗が吹き出る。ここは既に異界だ。

昨夜テマリが発する圧力も強大であつた。しかしあれは明らかにただのこけ脅しだったのだ。殺意の乗らないそよ風。だが今のこれは暴力を前面に押し出した台風だ。

浜夜に出来ることは、雪に駆け寄り手を強く握り締め、自分の背に庇うことくらいだ。

「――感心しませんね。他人のプライバシーにまで踏み込みますか、テマリ」

「子供が大金を手に入れてきたら親はその在り所を疑うが必至。呂旛、お前も条約の意味を知らんわけではあるまい。人に関わるな。そして見くびるな。かつて何人もの名のある同胞が人に絡み、逆に滅ぼされたことか。破壊王と恐れられた妖怪でさえ、今では人の子を楽しませるための昔話でしかない。人は妖怪を恐れるが、妖怪も人を恐れよ。恐れるのが無理ならば関わるな。悪戯程度に人前に姿を現すならまだしも、お前はやり過ぎだ。条約違反となる」

「言いえて妙ですな。そちらの彼氏さんからは死んだ霊や妖怪の臭いが鼻につきますが？ それは見逃しても構わないと。私だけ罰則が適用されると言うことで？」

眼力ある眼差しが浜夜を貫いた。足に根が生えたかのように動けなくなる。

「ヤツが消しているのは言葉も感情も持たない、本能赴くままに人を貪る雑魚だろう。逆にこちらの仕事の手間が省ける」

「いえいえ、それでなくてですね……。奇妙な残滓が漂っているようなのですが、そんな御仁に好き勝手に破壊行為をさせて宜しいのですか？ 危険性はないのかと」

新たな視線が向けられる。今度はテマリのものだ。呂旛が言ったことの意味が分からない、との面持ちで眉間にシワを寄せている。もつともそれは浜夜自身にも同じことが言えた。

「おや？ 鼻の良いテマリが気づいていなかったのですか。……ああ、そうか、この新宿は汚い臭いで溢れていますからね、鼻が良すぎるが故に逆効果になっていたわけですか。テマリの彼氏さん、何だか変な臭いがしますよ？ 嗅げないのならば、舐めてみれば分かるでしょう」

一瞬——ほんの一瞬——テマリの双眸が熱を持った。ゲームの審判員のように、何かを公平に見定め見極めるかのように。足の次に機能が停止したのは喉だ。巨大な力を持つ二人の妖怪に睨まれた浜夜にもはや命の所有権はない。それを握っているのは彼等だ。

解放される。

テマリが再び呂旛を向く。それまで踏ん張っていた浜夜は見えない支えを失い、思わず前のめりに倒れそうになった。それにしても——呂旛の言った「臭い」とは一体何のことか。

「——霊的な力は気の毒なほどにない。物あつて初めて機能する男だ。危険はない」

その言葉に呂旛は露骨に肩を竦めた。それでも笑顔は崩さない。「とにかくだ。人間がどんな些細な悩みを持って来るにしろ、それを元に金を取ることはこのテマリが許さん。今後一切やめろ。いいか、一度警告したからな。次は本当に許さんぞ」

「おや、テマリ？ どう許さないのですか？」

笑顔に邪悪が宿る。遂に明らかなる挑発を始めた。短気なテマリがここまで根気よく言葉を続けたのは、おそらく自分の持つ地位の

重さや、統括者としての心だったのだと浜夜は予想する。とは言え、残念ながらその限界はやはり長く続くものではなかったらしい。

「――条約後に生まれた妖怪はこれだから困る。妖怪同士でさえ諍いが盛んだったあの頃に生まれていれば、私にそのようなナメた口は聞けないはずなのだがな――」

破碎音。

陳列されていた皿が突如砕け散る。それは一枚だけではない。二枚三枚と合唱のように不協和音を奏で始めた。破壊が渦巻く。浜夜の隣でこけしの頭にヒビが入り、真つ二つに割れる。風もないのにうちわや凧などが勝手に舞い上がる。浜夜は雪の頭を抱え、強引に自分の胸に抱き締めた。雪は何やらモガモガと言葉らしきものを口にしていたが、浜夜が腕に力を込めるとやがて静まった。

テマリの尻が不自然に膨れ上がる。明らかなる肉質の変化。呆然と見守る浜夜の前で、テマリの短い腰回りから茶と白の毛で覆われた巨大な綿花のような物が現れた。尻尾だ――そう咄嗟に判断できなかったのは、浜夜の知る動物のそれとは大いに異なる点があったのだ。

二本。テマリの尻からは二本の巨大な尾が姿を現していた。いずれもその毛並みは逆立っている。

変化はまだ続いた。否、そちらの変化は既に終えていた。呂旛に見せつけるように伸ばされた右手だ。鉤のように突き立てたその先端からは、五本の赤い爪が天へと向けられている。いずれも十センチはあるうかという異質な長さ。それがどれほどの切れ味を誇るのか浜夜は知りたくもない。

対する呂旛の手にはどこから出したのか、槍を思わせるような鋭利な先端と、幾つもの輪を内包した銀の錫杖が握られている。

前触れなく二つの嵐が激突した。動物の鳴き声を思わせる、金属が弾かれたような甲高い響きが尾を引いて走り抜けて行った。風なき圧力を前に浜夜は目をしかめる。そこは到底人を入れる領域などではなかった。

テマリは無表情に、それでも瞳を欄と輝かせ、一方の呂旛は笑顔という名の仮面を相貌に貼り付かせたままお互いの得物で鏢迫り合いとなった。相手を食い尽くすと言わんばかりの意思が両者の武器から放たれ、それは耳障りな擦れ合う音を奏でた。

お互い一步も譲らず。もはや戯言は交わさず己の力のみで語り合う。

唾を嚥下し、浜夜は雪と共に人ならざる者達の戦いに魅せられる。圧倒的な武の主張。

それが前触れなく解かれた。

拍子抜けしたのは――呂旛だ。

「行くぞ糸目。もう用は済んだ」

何のしがらみもなく、まるで興味を失ったかのようにテマリは振り返った。その背は呂旛に向けたままだ。無防備にも程がある。しかし彼女の目は輝きを失っており、二本の尾も爪も、いつの間にか元の状態に戻っている。

「――フン」

錫杖が空気に溶けるかのように消えた。呂旛は明らかなる侮蔑を込めて鼻を鳴らす。既に笑みは嘲笑となっていた。

「拍子抜けですなテマリ、この程度で長妖怪に名を連ねているとは」
応酬はない。テマリは再びサングラスをかける。退出の意だ。

気概を削がれたせい、それともテマリに無視されたという子供じみた腹立たしさからか、呂旛は不快に眉をしかめると、捌け口を求めるかのように浜夜に視線を固定した。

だが、浜夜自身も別段言葉を交わす気はない。テマリの後を追って店を出ようと――

「ひよつとこはお祭りなくしてその出番はありません。彼等は可哀想な存在です。日頃は蔵で眠らされ、その目覚めは年に一、二回だけ。果たして彼等はお祭りの際にどんな思いで踊り続けるのでしょうか？ ひょうきんな仮面の裏側で、もしかしたら人への復讐を企んでいるかもしれませんよ？ そう、たとえば――人を彼等の世界

に連れて行ったり、とか」

視線で相手の心臓を射抜けるのならば、今の浜夜の眼光は弓矢だ。解き放たれたそれは、呂旛の思惑通りだろう、愉悦に満ちた天狗の双眸に吸い込まれる。

「……お前……何か知っているのか……!?」

答えは返ってこない。呂旛は浜夜の必死の形相を受けて、心底樂しそくに笑顔を浮かべるだけだ。

「——答えるよ!」

浜夜の口から言葉が飛び出る前に雪が代弁する。だがそんな人間二人の醸し出す迫力こそが、呂旛からすれば極上なる美酒だったらしい。目を細め、口は裂けんばかりの三日月を描く。

「デメエ——!」

「やめんかチビ女! どうせお前がどうこう出来る相手ではない!」
「——ッ!!」

叱咤はテマリのものだ。自分だけでなく雪も感じているに違いはない、このもどかしさ。先刻のテマリと呂旛のやり取りを見てしまった今、自分達はとうしようもない無力感に襲われている。

雪はあらん限りの怒りを絞って睨みつける——その相手はテマリだ。気が短い雪だが、それでも聡明な彼女のことだ。おそらく場違いな八つ当たりをしていることは自覚しているだろう。

凜とした佇まいのテマリはそれを受けようが気にも慨さない。サングラス越しとは言え、厳しい瞳で雪を見つめているのが雰囲気に分かった。

瞬間、呂旛の瞳が色を持った——

浜夜は雪とテマリに視線を往復させていたせいで、それに気づくのが遅れてしまう。視線を呂旛に移動した時には、既にその顔は変わらず恵比寿の面でも貼り付けたかのような喜色満面だ。

呂旛の目が捉えていたのは——まさか雪? だが店に入った時から取り立てて注視する場面などはなかったはず。なぜ今になって——鈍感と誹られる自分でも、一つの結論を導き出すことができる。

雪がテマリに刺すような視線を送ったその場面。

それを――見ていたとは思えない。

なぜ？

「構うな。……行くぞ」

慌てる人間が一人傍にいと、それを目の当たりにする他の人間は冷静になれる。その話は本当だったらしい。我に返る。冷静になつて――違う！ 落ち着いている場面ではない！！

「待てよ！ 何を知っているんだ。お姉ちゃんは生きているのか！
？ 無事なのか！！」

「糸目！！ いい加減にしろ！！」

怒気を孕んだテマリの声は、浜夜の生存本能に訴えかける。生命の脅し。そこまで踏み込まれ、ようやく思い留まることができた。知りたい。この男から聞き出したい。同時にそれは畏であることも知っている。こんな空気で、こんな会話の中で飛び交う真実はまやかashiで満ち溢れているだろう。

後ろ髪引かれる思いでテマリに続く。開いたドアから鳴り響く鐘の音が妙に苛立たしい。

「ありがとうございます。またのご来店、お待ちしております」
慇懃に頭を下げる呂幡を振り切り、浜夜はやるせない思いで店を後にした。

「どうしてあつさり引き下がるんだよ！ あんなふざけた野郎、締め上げちまえば良いじゃねえか！」

その後街を歩くこと十分。雪の怒りは未だ収まりがつかないようだ。

「あれ以上問い詰めた所で、あいつは何も口にせんよ。お前達、見事に呂幡に乗せられすぎだ。それに私の目的はあくまで警告。一瞬我を忘れかけたのは恥ずべきことだが、あいつを殴るために店を訪れたわけではない」

「――それでも、あの呂幡という男はひょっとこ達のことを何か知

っている」

落ち着こうと努力する浜夜をよそに、興奮は全身から溢れ出ていた。自分とひよっとこの関係を、まるで当事者のように呂旛はほめかしていた。

「糸目、少し確かめさせてもらうぞ。——と、ここらで良いだろう」思考を渦巻かせていたせいか、浜夜は今自分が歩いている場所を全く注視していなかった。雪も同様だったのか、二人して辺りを見渡す。いつの間に入り込んだのだろう、そこは狭い路地だ。呂旛の店以上に薄汚れたコンクリートの壁が左右に連なっている。もうすぐ昼になるというのに、やけに薄暗い。人の気配はなく、いやに涼しい風が空き缶を遠くへと運んでいった。

「テマリ。ここ行き止まりだけど？」

「それでいいのだ。糸目、服を脱げ」

意図が分からず浜夜は言葉を失う。雪は——妙な解釈をしたのだろう、浜夜とは別の意味で言葉を失っている。

「上半身だけで良い。それとも——私に見せたいのなら、下も脱いで構わんぞ？ ヒヒヒヒ」

「テ……メ……エ……はあ……！」

「落ち着いて雪。分かった、今脱ぐ」

鬼の形相でテマリに駆け寄ろうとした雪をなだめ、浜夜は上着を近くにあった金網に掛けると、ワイシャツを脱いでインナーシャツもさっさと捲くる。

「ほっ」

感心したような溜息がテマリから漏れた。顔を赤らめた雪が、落ち着かない様子で視線をあらぬ方向へと彷徨わせた。

「筋骨隆々とまではいかぬが、中々に見事な肉体だな」

「……どうも。毎日軽く運動しているだけだよ」

敵と戦うためには体力も必要だ。オカルト知識を詰め込むのと同じ時に自らをも鍛え上げた。ずっと——そればかりを続けてきた。ほとんど誰とも会話をせず、口々に友人も作らず——。かぶりを振る。

今は関係のないことだ。

背中に回ったテマリが、自らの指を浜夜にそつと当てる。蠱惑的で艶かしい動き。ぞくり、と不安と期待が入り混じったような奇妙な感情が背中から溢れ、身を震わせた。

「少しだけ我慢しろ」

針で刺されたような痛み。テマリの爪が自分の背を裂いているのだと知る。手術に用いるメスのように、それはゆっくりと斜めになぞられた。僅かな痛みは声に出す前に口の中で飲み込む。

「な……何やってんだよ!!」

「——お前はさきから、いちいち五月蠅いぞ。少しは黙らんか」

「雪。大丈夫だから」

何が大丈夫なのか、言った浜夜自身にさえ分かっていない。それでも雪を落ち着かせるには、自分の声が必要であることは理解している。しかし雪は二人同時から戒めを受けたと思ったのか、膨れっ面をして不機嫌に押し黙ってしまった。先から少し機嫌が悪いと感じるのは気のせいのか？ 鈍感な自分には分かる術もない。

不意打ちが訪れた。

弾力のある、何か生暖かいものが浜夜の傷をなぞる。粘液交じりのそれは、浜夜の背中であつたのは皮膚をくすぐる吐息だ。

それがテマリの舌であると分かったのは皮膚をくすぐる吐息だ。

——傷を舐めている？

麻薬が押し込まれる。癖になる。脳天に痺れが走った。有り得ない浮遊感。テマリの行動の意味を、壊れた脳を総動員させて理解する。呂旛が言っていたことをなぞっているに違いない。自分が纏う「変な臭い」。分からないのなら舐めてみる。確かそのようなことを言っていたはず……

「……ふむ。……確かにこれは妙だな。お前の言うひよつとこ祭り。目が覚めたら一度きちんと聞いておかねばならんな。お前……一体何を追いかけている？ これは何の味だ？ やたら美味だな」

視界が白く染まる。コマのように体が回転している錯覚。どちら

が前でどちらが後ろだろう。喋れない。テマリは……自分に何をしたのだろう？

「ヒヒ。お前のような朴念仁には少し刺激が強かったか？ 気持ち良かっただろう。またしてほしいか？」

喋れなくて良かった。

——その問いに答えを返さなくて済むのだから。

テマリの屈託なき笑いと雪の怒号が鳴り響く。

体の機能が停止した。口も目も動かない。視界が暗転し、黒に染まる。

最後に意識が落ちた。

第五話

3

泣いていた。

小学校の記憶は涙で始まる回想が多数を占めている。霊も妖怪も知らなかったあの頃、自分の体に妙なものが潜んでいると子供心ながらに知ったのはいつであっただろうか。それは時々、体の中で暴れ回り、精神が切り刻まれるかのような痛みを伴って具現化した。そして泣いた。何の前触れもなく泣き出す自分を何度も目の当たりにし、やがてクラスメイトや同年齢の子供達に噂が立った。

浜夜善は幽霊に取り憑かれている。

一人の日々が始まった。

両親は幾度となく自分を連れて病院を巡ったが全て徒労に終わった。家はそれなりに大きな日本家で金もあつたようだが、人ならざる者の存在など一笑に付す両親だったのだ。

「グレちゃダメだぞ。清く正しくをモットーに生きなさい。善君が素晴らしい人間で、素晴らしい行動を取っていれば、君の周りには沢山の良い人達が集まってくるから。絶対にね」

お姉ちゃん。——小学四年生の自分にその言葉の意味はよく分かっていなかった。

自分を助けてくれたその人の名前は知らない。出会って——別れるまで一ヶ月もなかったと思う。自分にとって姉であり、それだけで十分だった。名前など聞く必要もなかった。少し経って分かったのは、お姉ちゃんがいつも着ていた制服は近所の高校のものだった、ということくらいだ。

どんな時でも笑っていた。

揶揄されるかもしれないが、お姉ちゃんは自分にとって太陽だった。

「逃げなさい!!」

阿呆の群れが輪を成して踊っていた。お姉ちゃんが悲痛な声で叫んだ。

壮大な芝居を思わせるかのように、笛の音が緊迫感溢れる不気味な曲を奏で続ける。

般若が自分を見下ろしていた。

唐突だ。このお祭り会場は一体何なのか。この連中は何者なのか。自分とお姉ちゃんはどこに迷い込んでしまったのか。

闇の帳が下りた。

そこまで来て、ようやく浜夜に意思が宿った。

——ああ、これは夢だ。

思い出したくない過去。それでいて浜夜善の核を形作る大切な人との思い出。自分の原動力。

夢はうつろう。

まだ続くのか。今夜はいやに長い夢だ——

和太鼓が腹の底にまで響き渡った。

浮遊感が失せ、意識が覚醒する。心臓が跳ね上がり体が身震いする。

ここは現実？

すぐに答えは出た。違う。やはり夢だ。

どういうことか。浜夜は混乱する。夢の中だと言うのに、いやに自分という存在の輪郭が明確に現れている。思考も、手足も体も、起きている時のものと何ら変わらない。

幾千と聞いたことが、忌まわしき音色。本来人の心に染み渡るはずのその響きは、もはや浜夜にとっては悪夢への誘いでしかない。

橙色に淡く輝く提灯が蜘蛛の巣のように張り巡らされている。異常な数。日本伝統の和音が陽気に場を彩った。主役は——口の尖った笑い者。ひよっとこだ。おかめも混じり、男女の面が薄明かりの下で交互に流れて行く。

拳を握り、その感覚を確かめる。至って健在だ。同時に愕然とし

た。自分の手はまさしく大人の手。浜夜は幾度となくこの夜を過ごした。しかしいずれもその時は子供の姿であり、決まった映像を見せられるかのように出来事は進行し、勝手に終焉を迎えていった。今回は何かが違う。いつもの異質なる夢に混沌が混ざり込んだ。これは——初めての夢だ。

白い陽炎が揺れ、浜夜が目を擦っているうちに実体となつて姿を現した。

般若だ。いつもの白い袴を着て——その足は一人のおかめを踏みつけている。日本刀がその首にそつと当てられた。

先程の夢の続き——ではない。それだけは分かる。あれは浜夜の過去の記憶。目の前のこれは——夢。それもとことん狂った夢だ。駆けた。救えるかもしれない！ 般若との距離は十メートル足らず。

轟音が落ちた。

意思と裏腹に、体は止まらざるをえない。自分の行く手に空から降ってきた二体の怪異は、人間に対し圧倒的な制止力を持っていたのだ。砂煙が舞う。

高さは三メートルほどか。裸の上半身は自分の比にならない逞しい丘陵が描かれている。黒曜石を思わせる漆黒。腰に巻く布も、その手に握られる破壊棍も同じ色だ。

二対からなる憤怒の顔。阿吽の呼吸。顔だけが漆のような輝きを宿し、朱色に染まっている。

仁王像が揃つて浜夜を見下ろしていた。

舞い上がった砂塵が収まり、同時に浜夜の呼吸も落ち着きを取り戻す。

気づく。

二対の像の顔部分が、まるで切り取って剥がすことが可能とも言えるくらい揺れ動いていることに。

面なのだ。

新たな面が登場したのだ。

感想を抱く余裕はない。仁王達はそれぞれの呼吸の元に棍を振り上げたからだ。口を開いた側「阿」像が先に、口を結んだ「吽」像がワンテンポ遅れて。

振り下ろされた速度は常軌を逸していた。何の抵抗もできずに浜夜にぶち当たる。

これは夢だ。とびきりの悪夢。

初めて浜夜は夢に感謝した。通常ならば骨がひしゃげ、肉と臓器が潰されているであろう衝撃を受けても痛みを感じなかったからだ。しかしその衝撃は浜夜の意識を遠くへ飛ばした。

般若と、その足元のおかめが揃って最後まで自分を見つめていた。浜夜は夢から覚めた。

「おや、善君起きたかい？　ずっと眠っていたけど大丈夫？」

まず最初に確認したのは自分の胸元だ。手を当てて軽く掴む。――

何の変哲もない普通の胸だ。肉も骨も、おそらく臓器もいつも通りそこに収まっている。

まるで自分は悪夢にうなされた子供のようだ。酷い寝覚め。息も荒い。

「善君？」

ようやく自分と呼ぶ声に気づく。アオイのものだ。純白のドレスに身を包んだ三十センチ程の人形と共に、薄桃色の巨大なクッションの上からこちらに眼差しを向ける。ちなみに人形の名前はリコだ。事務所の奥で寝かされていたようだ。九十センチのプラズマテレビが隅に置かれ、その隣にはアオイが使う裁縫用具一式や、色とりどりの布、ミシンが並んでいる。

随分眠っていた気がする――そう思い壁に掛かっている時計を見て愕然とした。何と、既に短針は五時をさしている。浜夜の視線からその心の裡を読んだのか、アオイが先回りして答えた。

「ああ、言っておくけど今は朝の五時だから。善君がここに運ばれたのは昨日の正午くらいさ。それと、背中に付いていた引っ掻き傷

は消毒して手当てしておいたから安心して。――雪がずっと付き切りで心配していたよ？」

「ちよつと待つてくれ……それじゃあ……二十時間近くも僕は眠っていたのか!？」

確か……呂旛と会い、その後に路地裏へ連れられ……そうだ、そこでテマリが――

浜夜の心が大きく波打つ。あの舌の感触を思い出し、不覚にも心が揺れてしまった。

――とにかく記憶はそこまでだ。それ以来ずっと眠り――あの奇妙な夢を見続けていたのか。おそらく雪やジツポ、アオイが交代で自分を見てくれていたのだろう。

「――ありがとうアオイ――」と言いたい所だけど、仕事はどうしたのさ。考えてみればテマリがここに来た深夜にも普通にいたでしょ」
長い金髪が悲しげに揺れた。浜夜はワイシャツの胸ポケットから電子タバコを取り出して口に咥える。――どうやら自分は、昨日の服装のまま寝かされていたらしい。

「最近、マリアが風邪を引いたようなんだ。数日前からずっと調子が良くない。今も僕の布団に寝かせているけど……。昨日は仕事を休んだし、今日も途中で帰って来てしまったよ」

マリアとは、括った銀髪とこげ茶色のロングスカートが特徴の人形だ。涙目のアオイは溜息を一つ吐くと、まるで苦悩する芸術家のように額に手を当てる。その美しいとも言える顔と相俟って、それは一枚の絵画にも成り得た。――これでズボンを履いてくれれば尚完璧なのだが。

バナラの香りを吸い込む。残念ながら、浜夜には人形達の「表情」は見えず、彼女達の「風邪」に関しても手助けはしてやれない。人形達の顔はどれだけ見つめても変わることはない。それでもアオイが言うには、一人一人に性格も個性もあり、その表情から言葉が伝わってくるのだとか。

昨日の件をテマリに問い質したい所だが、さすがに朝五時に押し

かけるわけにもいかない。ランニングでもして時間を潰そうか——
と思った矢先、アオイの口から衝撃的な言葉が飛び出た。

「僕は三時くらいに帰ってきちゃってさ、その後お客さんから電話があつたんだ。やたらと僕に何でも買ってくれる話好きの奥さんで、善君が探しているものと関係あるのか分からないけど、妙なことがあつた、て言うんだ」

珍しく歯切れが悪い口調。どうにも回りくどい。遠慮がちにアオイは言葉を続ける。

「その奥さんが、深夜にタクシーで代々木公園の近くを通っていたら——その——見たらしいんだ」

「何を？」

先を促してやる。アオイもジッポも基本的には浜夜に何の遠慮もない。

浜夜は事務所の三人に対しては、自分が昔から追い求めているものに関しては話してある。自分は彼等三人の過去を知っている。代わりと言うわけではないが、自分の過去も三人には話したのだ。稀に見せるアオイのこの態度は、気兼ねない関係であることを承知しているのに、それでも浜夜に氣遣う時のものだ。

「お祭り。タクシーの中からチラツと見えただけらしいよ？ 見間違えかもしれない。それでも……彼女は言うんだ。もう明け方近い三時、四時だと言うのに、提灯の明かりと——輪を描くようにして踊るひよつとこ達を見た、て」

タバコが口から滑り落ちた。

金槌で頭を思い切り殴られたような衝撃。

悪夢は這い上がる。ここ十数年、浜夜の頭の中だけに存在していたそれは、遂に現実までも侵食し始めたのだ。いや——そうではない。ようやく姿を現したと言うべきだろうか。脳裏に先程まで見ていた、いやに現実感のあつた悪夢を思い出す。

何かが動き出している。

自分の知らない所で何かが始まっている。

上着を引つ 掴むと玄関へ走る。慌てたアオイの声が聞こえるが、その言葉は脳にまでは届かない。確かめなくてはならない。夢から伸びた魔手が遂に現実という土の中を突き抜けて外に躍り出たのかを。いつもとは異なつた悪夢。それだけでも不可解であるのに、起きた途端に現実世界でも異変が目撃されている。このリンクは偶然なのか。可能性としては、お祭りを何かと見間違えたという線もある。だからこそ自分の目で確認しなければならないのだ。

「せめてお風呂くらい入っていきなよ善君」

アオイには悪いが、言葉を返している余裕さえもない。

既に空は明るかった。

朝特有の透き通つた空気が、浜夜のはやる心を抑えるかのように浸透していく。昨日とは真逆に肌寒い。頭が冷やされる。車のキーが砂利の上に落ちる。手が震えていた。だがこれは――武者震いだ。バンに入り込み、即座にエンジンをかける。期待と不安。それだけではない。他にも十の感情が混ざつたような、何とも形容できないわだかまりを抱えて浜夜は車を発進させた。

第六話

いつもの道具一式を持ってきていたのは僥倖と言えた。

本当ならばアオイの言う通り、まずはゆっくり風呂にでもつかるべきだったのだ。そのことを後悔したのは広大な敷地を持つ代々木公園が見えた時である。明らかに冷静さを欠いていた。鬱蒼と生い茂る木々に囲まれた公園。公道に面しているエリアのどこかしらがくだんの場所なのだろうが、それを手掛かりなしで探すにはあまりに骨が折れる……

聞き逃してしまうほど小さなノイズがマイクから聞こえたのはその時だ。即座に車を路肩に止めて降り立つ。——ジッポには感謝しなくてはならない。インチキ紛いの霊能力商品が氾濫しているネット世界から、見事にこのマイクを探し当ててくれたのだ。「霊の声が聞こえるマイク」。胡散臭さ全開のキャッチフレーズは今や浜夜も声を大にして言える素晴らしき売り文句だ。

目撃者は饗宴の片鱗を外から垣間見ただけだ。実際のそれは、公園の中心部から行われていたらしい。浜夜が奥へと進むにつれ、ノイズが少しずつ大きくなっていく。

中央広場は無人だった。いや、正確には無人とは異なるのだろう、視界を広げれば青いビニールシートが幾つも目に入る。無音。ランニングをする人の姿さえない。踏みしめた雑草が唯一この世界に存在する音だ。マイクの音も鳴り止んでいる。

何の変哲もない広場。早朝と言うこともあって人がいないが、それ以外に不審な点は何もない。ひょっとこもいなければ提灯もやぐらもない。だが――

「それでも数時間前、確かにここに何かがあった……」

浜夜一人だったら途方にくれていただろう。しかし機械(?)は嘘をつかない。手持ちのマイクが反応したのならば、それはこの場に異質なる者が存在していた証なのだ。

誰か一人くらい起きていないかと、浜夜は一番手近なビニールシートへと歩き出す。だが途中に将棋倒しのように倒れた複数の自転車が視界に入り、思わず足を止める。――見てしまった以上、浜夜はそれを見無視することは適わなかった。溜息交じりに向かうと、外側から順番に一つずつ自転車を起こして行く。全く、自分は一体ここに何をしに来たのか。

「朝一番に出て行ったかと思えばボランテアか？ 感心すべきか苦笑いの一つでも送るべきか」

ノイズ音が流れるよりも早くテマリはその姿を現した。大気が大きく揺れる。それは彼女がこの場に現れた速度の裏返しだ。浜夜は手を止めず横目で視界に入れると頭を掻いた。

「……だから、そのキュウリではダメなんだ。もっと美味いぬか漬が僕の部屋にある」

テマリは透明なタツパの中に手を入れると、軽快なリズムを思わせる動きで中身を口へ投げ入れる。その物体が何なのかは作った浜夜は聞くまでもなく分かってしまう。それが何番目の自分の作品かを嗅ぎ当てることさえも可能だった。

「私とて、留守中のお前の部屋に足を踏み入れるほど無粋ではないだからこれで我慢している。……そう悔しい顔をするな。これも十分美味いぞ。もっとも……」

全ての自転車を起こし終わると、浜夜はテマリを真正面から捉える。猫又の顔が――怪しく歪む。

「昨日の、舌がとろけるような甘い酒に比べたら少々物足りんがな」
慄く。サングラス越しにテマリの目が輝きを宿したような錯覚を覚えた。臆していないことを示すために、少し語気を強めて問い質す。テマリは笑った。自分の胸中など見抜かれているのだろうか。

「呂旛の店から出た後、一体僕に何をしたんだテマリ。二十時間も眠っていたんだぞ」

「目とは裏腹に、お前は愚鈍ではないようだ。想像はついているのだろうか？ 糸目、お前の体内に残る奇妙な残滓を文字通り味わって

みたまでよ。今まで聞き逃していたが、この近辺を見守る者として私はお前に問わなくてはならん。あれは……ひょっとこ達とは一体何だ。ただの一端の妖怪とは思えん。味に溺れかけて長く吸いすぎた。お前が深く眠ったのはそのためだ。麻薬のように甘美で依存性がある。——美味しいが、危険な味だ」

隠すつもりは最初からない。理由はどうであれ、テマリがひょっとこ達に興味を持ってくれたのは更なる一歩だ。浜夜は記憶を回想する。それでも長話にならないよう、頭の中で整理をつけた。

「今と違って、昔は僕も靈感の類が強かったんだ。そのため小学生の頃は変なモノに取り憑かれて散々な毎日を送っていた。それを助けてくれたのが……ある日公園で俯いて泣いていた僕の前に現れたお姉ちゃんだった」

手近なベンチに腰を掛ける。テマリは——座らないようだ。

ああ、こんな感じだった。冷たいベンチに一人座って——お姉ちゃん目は目の前に立っていた。

「名前も知らないお姉ちゃんには強い靈感があったみたいでさ、高校生だ言うのにそれを使いこなせている感じだった。まるで正義のヒーローのように、あっさり僕の中に巣食っていた何かを追いついて……僕はそれで救われた。霊的な力もその時に消えたみたいで、おかげでそれ以降、人以外の者に悩まされることはなくなったよ」

「ふん……。それだけ聞くと、ハッピーエンドに終わったようだな」
そうなのだ。あの時、心に光が差し込んだのを覚えている。その後——結局友達はお口から出来なかったが、自分が正常な世界の中に

戻れたことに安息を抱いたのだ。

「お姉ちゃんとの関係はその後も続いた。と言ってもほんの数週間だけだね。ほぼ毎日遊んでいたな……。その日の夕方、家の近くにあった神社で遊んでいたんだ。誰もいない神社、僕一人がはしゃいでお姉ちゃんは遠くからそれを見て笑っていて。それで、新しい場所を探検するとか何とかで、僕はお姉ちゃんを連れて神社の裏手に回った——」

ぬか漬けと口を往復するテマリの手は止まらない。だが不思議と、真面目に聞いてくれているのが何となしに分かるので、浜夜もそのまま続ける。

「——最初は、そこでお祭りが行われているのだと思った。でも違った。——目の前の光景は異質な何かであると子供心でも分かった。ひょつとことおかめの面をつけた者達が世界を作っていた——」

目を閉じる。笛の音が聞こえる。言葉はない。音楽と踊りだけで構成された世界。この世の果てを探しても彼等は姿を見せないだろう。人ならざる者達の祭り。誰の楽しげな声も聞こえないそれを、果たしてお祭りと呼んで良いものなのか。声が、感情がなければそれ等は全て虚像と化す。

「やがてその中からただ一人、般若の面を付けたヤツが現れた。日本刀をかざし、僕達の方までゆつくりと歩いて来た」

逃げなさい！！

浜夜は体を突き飛ばされる。今思えば、霊能力溢れるお姉ちゃんは、自分以上にあの場の醸し出す恐怖と異質を理解していたのだろう。よるめいた浜夜は地面と睨めっこする形となる。即座に顔を上げる。だが……

「全て消えていた。お祭りも……お姉ちゃんも。僕はただ一人、神社裏手の何もない空き地でしゃがみ込んでいた。その後——搜索願も出されたし、僕も何度も警察官から事情聴取を受けたけど、結局お姉ちゃんは見つからなかった」

これで全てだ、と言わんばかりに浜夜はテマリを見上げる。タツパの中身はまだ多くのぬか漬け達がひしめき合っているようだ。それでもテマリは食べるのをやめていた。言葉はない。それも仕方ないだろう、そもそも彼女は最初に宣言しているのだ。自分はひょつとこなど知らない、と。

代わりに意外な言葉が落ちてくる。浜夜の予期しなかった言葉だ。「辛かったか？——一人は」

湖畔に寄せる小波のように優しく、静かで包み込むような声。思

わず浜夜は面食らう。

どの時点のことを言っているのか。お姉ちゃんと出会う前か、それとも失った後か。いずれも浜夜はほとんど一人だった。その後は独学で人外のことを学び、体も造り、大学を卒業した後は片っ端から霊やら妖怪やらの事件を追い続けてきたのだ。——そしてあの三人と出会った。

「今は辛くないさ。仲間がいるからね」

言葉の裏返し。それだけで、テマリには浜夜の学生時代の気持ちが伝わったようだ。浜夜とてごく普通の青年である。悲しい、辛い、苦しい、を何度も味わい、平然としていられたわけではない。

「——帰ったら、三人に改めて詫びよう。最初、私は酷いことを言った」

ジッポもアオイも雪も、少なからず自分と同じ経験をしてきた。

自分も仲間も常識外れが揃っている。だが逆を言えばそれは——皆社会から冷遇され、爪弾きにされたことがある者達なのだ。

悲しみを知った人間でないと、他人の悲しみは理解できない。

だから四人はパズルのようにくっ付いて離れない。片割れのようにピタリと綺麗に当てはまる。

浜夜は思う。テマリの声に宿る寂しげな響きに嘘偽りは感じられない。と言つことは——

「テマリは……」

そこで言葉を止める。

それは自分如きが踏み込んで良い領域でない気がした。思えば彼女とて、遥かに年下の自分達を所々で尊重していたではないか。自分も彼女に同等の思いを返したい。

電子タバコを勧めることを思いつく。……それも違う。安易に物を渡すのも軽すぎるだろう。

「テマリはどうして妖怪を取り締まる役に付いているんだ？」

結局口をついで出た言葉は安直な疑問に早変わりした。今思えば、自分達に同行すること自体やはり腑に落ちない。テマリならば呂旛

の元に行き着く方法はいくらでもあったのではないか。考えられるのは、早急な解決を望むために自分と手を取り合うことにしたか……他の何かか……

答えはない。どうやらそれすらも自分が尋ねるには早すぎたようだ。突然、テマリが自らの手でサングラスを外す。猫の瞳があらわになった。しかし……

どこか寂しげで、郷愁に想いを馳せるかのような慈しみに満ちた瞳。迂闊に手で触れたら碎けてしまいそうな硝子細工の結晶。自分に扱えるはずもない。やはり、自分はテマリにからかわれるくらいが丁度良い。その思いを読み取ったのかのように、再び彼女はサングラスを元の位置に戻した。

「ヒヒヒ。ほれ、そろそろ行くぞ」

いつものテマリに戻っていた。不敵な笑みを浮かべ、こちらに手を差し出してくる。

——きつと分かっててやっている。手を差し伸ばすのは本来男の役目だ。

ベンチから腰を上げ、その手を取ろうとして——

砂嵐が頭の中で吹き荒れた。

視界が白黒に染まる。

テマリの手。美しい輪郭で形作られ、傷一つない綺麗な手。

こんな手だっただろうか？ かつて自分は「手」を見た。手？

何でそんなものを覚えているのだ。手など何百何千と見ているはずだろうに。そもそも誰の手を思い出そうとしている？

「糸目！」

我に返る。テマリの顔が間近にあった。香水をつけている様子はないのに、ほのかな花の香りに似た匂いが鼻腔をくすぐる。呆けた顔を切り替える。

「……ああ。すまない、大丈夫だ……」

その言葉は誰も納得させられない。自分もだ。

「……どうした。魂でも抜けたかのような、真っ白な顔をしていた

ぞ」

テマリは明らかに納得していないようだが、それでも深く追求はしてこない。どのみち自分も今起こった、テレビが故障したかのような映像など説明できるはずもない。

——今のは何だ？

テマリの手を見た瞬間、既視感のようなものに捕われた。

手？ 手の平に対し、記憶が錯乱するほどの思い出など存在しないはずだが……

「ほれ、行くぞ。……帰って休む必要があるな」

「ま、待ってくれ。その前に、ホームレスの人達に話を聞きたい。

ここで何があつたのか見たはずだ」

「糸目——」

頭がようやく安定する。だがテマリの言葉は、修復しかけた浜夜の頭を更に砕いた。

「言っておくが、あのビニールシートの中には誰もいないぞ。ここだけではない。この公園の中にある数百のビニールシートの中身はどれもカラだ。人っ子一人いない」

電流に似た衝撃が脳内で弾けた。考えてみれば……そろそろ朝六時にもなるのにさきから誰一人としてホームレスを見かけない。テマリが嘘を言うはずもなく……ならばそれは真実だ。

「……どう言うことだ」

「分かん。昨日までは確かに生活していたようだな。生活臭がどこもかしこにもある。ただ、人だけがない。それから……そのひよつとこ共がここにいたのは確実のようだ。お前から昨日舐め取った匂いがこの公園に僅かに残っている。今はもういないようだがな」

テマリの声は硬い。これはおそらく、長年生きた彼女でさえ初めて遭遇する異常事態なのだろう。テマリも、他の妖怪も誰も知らない「ひよつとこ祭」。そして……あの時のように人が消えた。今度はお姉ちゃん一人ではない。数百人が一斉にだ。

あの時、お姉ちゃんに突き飛ばされなかったら自分も消えていた

に違いない。

「こんな所にいた！ 出るなら一言声かけてくれよな、浜夜さん！」
緊迫した空気を切り裂いた大きな声は浜夜の馴染みの声だ。二人が見守る中、息を切らしながら雪がこちらに駆け寄ってくる……木刀袋をぶら下げて。

「雪……」

「体は大丈夫なのかよ。ずっと心配してたんだぞ！」

「雪、急いでここから出た方が良い。ここは危険だ」

数百人が一夜にして消え去った。連中はここで悪夢の祭りを行ったのだ。あまり長居して良い場所ではない。しかし、雪にしては珍しく浜夜の心を読み損なったようだ。いつもならば自分の声色一つで状況を察知できるはずの雪が、惘然とした面持ちに変わる。その視線の先にいるのはテマリだ。

「……何でそいつは良くて、私はダメなんだよ」

——機嫌が悪い？ そう言えば、意識を失う前も雪は少し尖っていた気がする。どうやらそれはまだ治っていないらしい。

「僕達も今から帰る所だ。心配させて悪かった。体の方はもう平気だから——」

「糸目」

早口で三文字。だがそこに秘められた言葉に妙な力が込められている。これは——警告？ だが一体何に對して。

テマリは——雪を見ている。そこにいつもの呑気な態度はない。

肌を刺すかのような厳しい空気が猫又を通じ浜夜にも伝わってくる。

「雪、すまなかった。とにかくここを離れよう」

何かに耐えるかのように、悔しさと怒りと、涙と我俣と、癪癪という名の爆弾を飲み込んだかのような雪の顔は見ている浜夜にも辛さが伝わってくる。

様子がおかしい。

だが理由が分からない。雪は分別ある大人だと浜夜は知っている。たまに子供っぽい感情を覗かせるがそれは愛嬌だ。彼女はよほどの

ことがない限り浜夜を困らせたことはない。

「えっと……車のキーは……ああもう、どこだっけ」

深く考えもせず言葉を放ってしまう。キーの場所が分からないのも事実だが、きつと雪ならピンポイントに答えを探し当ててくれることを期待したからだ。だが……それは失敗に終わる。自分とはことん阿呆だ。今朝雪を残してアパートを出てきた。ならば彼女が車のキーの在り処など知る由もないではないか。雪の表情に更なる痛烈なシワが刻まれる。問いに答えられなかった悔恨だ。

「何をやっている阿呆め！　ワイシャツの内ポケットの膨らみは何だ！」

歯車が外れた。

浜夜がテマリの声を制止する前に、その言葉は雪の脳内に記憶されてしまった。

これは浜夜と雪の一年前からのやり取り。冗談でなく、素で物の在り処が分からなくなる浜夜とそれを溜息交じりに指摘する雪。テマリがそれを知らないのは当然だ。慌てふためく浜夜に対し、頭を抱え、テマリが思わず答えを述べてしまうのも至極当たり前の流れと言える。

それがまずかった。

白金雪の中にある何かにヒビが入った。

浜夜はそれを感じ取る。雪の視線に更なる色が入り込む。テマリを見るその目の中に、決して綺麗とは言えない濁った光が灯る。長年の歯車を勝手にずらした怨敵へ送る宣戦布告。

既に空は明るい。

そこに影が落ちた。

風が凪ぐ。

唸り音は浜夜の横を付き抜け、絶対なる破壊の意思を持って一人の妖怪へと衝突した。

二十時間前の再来。

テマリは十本の赤い爪で、そして対峙する雪は全力で木刀を振り

下ろしていた。

その狙いは頭だ。攻撃は寸前で受け止められ、暴発したエネルギーが小気味良い音となって空へ溶ける。テマリのサングラスが落ちる。現れたその瞳は真剣に頭上の得物と、雪自身を見つめていた。

「……チビ女……」

顔とは裏腹に茫然自失とした声はテマリのものだ。しかしそれはすぐに怒りに塗り潰された。

「……そうか。……呂旛め、ナメた真似をしてくれる……。自身で挑むならともかく、感情の生き物である人を惑わし、唆し、弄ぶか拳句の果てに私と戦わせ、自分は高みの見物。どうやら本当に落ちる所まで落ちたようだな！ 本来ならば誇りの象徴である天狗の鼻を、人が嘲る意味で使う理由がよく分かったわ！！」

二本の尾がその姿を現す。テマリを中心に強風が吹き荒れる。草木は風圧から逃れるかの如く一斉に傾き、怒気を内包させたその嵐は四方八方にぶちまけられる。浜夜は踏ん張って耐えるしかない。一瞬で体内の猛りを全て放出したのか、すぐに大気は元の落ち着きを取り戻す。

——呂旛？　ここであいつの名前が出てくるのか？

ならば今の雪の行動は本心からではなく、あの男絡みとのことだろうか。

「……ちくしょう……！　お前さえいなければ……！！」

搾り出すような雪の声。

拮抗が弾けた。

下がったのは雪の方だ。無言。それでも殺意を満遍なくその瞳に宿らせ、テマリを呪い殺そうとするかのように視線で射抜く。だがそれは僅かにも満たない時間。踵を返すと、浜夜が駆け寄る間もなく走り去って行ってしまふ。

「雪！！」

「待て、白金雪！　心を強く持て！！」

言葉は届かない。雪は一度も振り返ることもせず、そのまま疾走

し姿を消す。

残されたのは、何も出来ず齒痒い思いで見ているしかなかった浜夜。地団駄を踏むテマリだ。

「……すまぬ糸目。私の一言があまりに不用意すぎた。チビ女が妙な邪気に捕われているのを感じていながら……私がスイッチを入れてしまった……！」

——やはりテマリは分かっていた。決定的な一言を放ってしまったことを。

それを責める気など浜夜にはない。自分は棒のように立っていることしか出来ていないのだから。

「あいつの差し金か。そう言えば昨日、妙な目で雪を見ていた気がする」

そうだ。思い返せば店を出た後から、雪にはいつもの軽快さがなくなっていた。

腸が煮えくり返っているのだろう。齒を食い縛り、絞り出すかのようにテマリは言葉を出す。

「あれが必ずしも本心でないかと言えば、それは違う。今のやり取りにチビ女の意味も確かにあった。しかし……それを増長させたのは間違いなく呂旛だ！ 心の隙間に忍び込み、操った張本人」

「どうしてテマリを？」

「昨日の復讐だろう。それ以外に考えられん！」

そうだろうか。本当にそれだけか？ 呂旛はひょつとこと自分をほのめかしていた。そして、呂旛の家を出たその夜にいつも異なる夢を見て……起きたら連中が代々木公園に現れていたのだ。

かぶりを振るう。

今そんなことはどうでもいい。

「雪を追おう。このままにはしておけない」

最初から、鈍感で済ませて良いことではなかったのだ。

もはや浜夜とて、なぜ雪がテマリに反発をしたのか理由も分かっていた。

「一人は……辛いものよな。古今東西、そこに例外はない」

先程の怒りとは正反對のテマリ。その沈んだ声から、彼女も結論に至ったことを知る。

はたから見れば、雪を邪魔と思う人もいるかもしれない。突如怒り、突如攻撃し、理由も述べずに勝手に消えていく。しかし浜夜は違う。「浜夜達」は違う。ジッポもアオイも、今回ばかりは自分を怒るだろう。雪を闇に突き落としてしまったのは――自分だ。そして自分達は知っている。その闇がどれほど深く、凍えるほど寒く辛いものかを。

雪がどこに行つたのか見当もつかない。それでも一旦は事務所に戻ることにする。

夏にしては妙に肌寒い風が吹き荒れる。その中に天狗の笑い声が混じっている気がした。

事務所に戻る車の中で、浜夜もテマリも口を聞かなかった。電子タバコを吹かし今後について考える浜夜と、やはり背後の席で物思いに耽るテマリ。だから代々木公園を立ち去って以降、最初に言葉を交わした相手はジッポと言うことになる。

「おう、お帰り。さつき五十嵐さんが来たぜ。すぐに帰ったけど」
自分達の姿を見ると、ジッポとアオイは神妙な顔で揃って現れた。おそらく自分も似たような顔をしていることだろう。

そうか、雪は――元の居場所に帰つたのか。

「善君……」

五十嵐がどのような面持ちでここへ現れたか、二人の様子から手に取るように分かった。それでもアオイは自分に気遣う声をかけようとしてくれる。

「待てアオイ。……おら、五十嵐さんの残した物だ。お前に渡しておけとよ」

小さな紙切れが手渡される。テマリと共に覗き込む。そこには住所と地図だけが記されていた。言葉の類は何もない。文句も恨み言

も。浜夜には、かえってそれが不気味に映った。雪の——あの顔を見て、五十嵐は今どんな気持ちだろう。自分に——どのような感情を抱いているだろう。

「善、何があったかは知らねえ。俺もアオイもお前に一度救われているし、お前が道を踏み外すようなヤツでないことも知っている。でも……お前は雪を裏切った。そうだな？」

語弊がある——などと言うつもりはない。ジッポの言う通りだ。自分は雪を傷つけた。裏切ったのだ。彼女がどれだけ脆く、儚いか、理解しているつもりでいたのに。ジッポは大きく紫煙を吐き出すと、額にシワを寄せる。

「俺もアオイも雪も、そしてお前も、俺達は皆ナイーブだって知っているだろうによぉ……」

腕を組んで不機嫌そうに言葉を吐き出した。浜夜はそれを黙って受け止めるしかない。

自分の無責任さはジッポの心をも崩してしまった。四つのパズルがバラバラになっていく。愛想を尽かされても仕方ない。強い絆だった。それは今でも思っている。しかし、それはあくまで外の世界へ向けてだ。内側からはいとも容易く壊せてしまう。当事者である自分ならば尚更。

「とにかくだ。お前、あいつを連れ戻して来い。雪がいないと流しも片付かねえ。俺の財布も、どこに埋もれているのか俺自身が分からねえ」

一見投げやりに聞こえるそれは、明確な意思を持ってジッポから浜夜へと受け継がれる。それは異路色系目相談所の総意であることを知る。

「善君。僕達はチームだ。でもね、皆君を中心に集まってきた。僕は君の隣に、ジッポも君の隣に、そして雪は……きつと誰よりも君の隣にいたがつている。善君はこの相談所の大黒柱なんだから」

「そつだぜ善。新しい女が出来たからって、雪を構ってやらなきゃ

——つぉおぉお!!?」

サングラスの奥から発せられたテマリの眼光は、音もなくジッポを貫いた。派手な音をたてて背中から床に転げ落ちるジッポ。タバコが皮膚を焦がしたのか、アチィッ！ との声がそれに続く。

改めて五十嵐の残したメモに目を落とす。あくまでそこに記されているのは場所のみだ。時間の指定も何もない。

ならば——今すぐ行こうとも文句は言われないだろう。

「行ってくる」

「うん、行つてらっしゃい。……僕達も行こうよジッポ」

「ああ？ 俺とお前が行つても意味ねえだろうが。……まあいい、気が向いたら行つてやるよ」

ドアを潜る。テマリは当然のように後ろから付いて来た。そのことにジッポとアオイは——何も言わない。浜夜は一瞬葛藤する。テマリが来たら余計に話がこじれるかもしれない。——と、胸の内を読まれたかのようにテマリに顔を覗き込まれた。サングラスは外されている。その瞳は真剣そのものだ。語る必要もない、と暗に言っている。

「テマリ——」

「早くそこへ案内しろ。急ぐぞ糸目」

なぜテマリは協力してくれるのだろうか？ 尊大に言うならば、今回の件は自分とテマリが原因で起きたすれ違いだ。そこに責任を感じているのかと思つたが、彼女を見ているとそれも違ふ気がする。

テマリはあくまで真つ直ぐ、義務でも世話でもなく、自らの強い意志で雪の元へ向かおうとしている。

何かを見ている。

そして何かを感じている。

言うならばそれは使命感のような。

凜としたその佇まいを前に、質問など挟むことは叶わない。

浜夜は再びバンへ乗り込むと、テマリを連れて、五十嵐の指定した場所へと向かう。

ここから十五分足らず。場所は歌舞伎町だった。

第七話（前書き）

相変わらず区切る場所が上手く見つからず……
今回は区切り無しで掲載しました；
いつもより長いです。

第七話

4

色とりどりのネオンは太陽が頭上で輝く時間帯であろうともその輝きを損なわない。それでも本来この街の天へ君臨するべき月だ。闇あつてこそ、それに乗じた活気が宿る。パチンコ店も風俗店も、ゲームセンターも居酒屋もまだまだ眠い時間帯である。道行く人も忙しげで娯楽など求めていない。

だがそれは、あくまで表の顔を見ているに過ぎない。路地に入る。その通路の中央に存在する、カニのような歩き方をしてやっと通れる隙間の抜けた奥にあったのは、詰まれた木箱の山と古ぼけた家屋にはめ込まれた鉄扉。繁華街のざわめきは届くが、完全に外と切り離されたスペースだ。隙間から一步踏み込むだけで、表の世界から裏へと潜ることが出来るのだから街とは面白い。

木箱には四人の男達が腰をかけていた。浜夜はともかく、テマリを見ると何人かが下卑た口笛を飛ばす。どうやら色々歓迎されているらしい。一人が近づいてくる。日本人ではない。肌の色と顔を見る限り、東南アジアの国の人間だろうか。浜夜はメモのままにここへ来たものの、そこから先は何も聞いていない。前方に見える扉に入れば五十嵐が――そして雪がいるのだろうか。

「どうぞー。五十嵐さん、中で待てます。二人来たら案内言われます。ドア入ってまっすぐ歩く下さい」

たどたどしい日本語。呂旂とは違う気色の悪い笑み。歳は三十代のほか。髭で覆われ、窪んだ目つきをしたその男は、それだけ告げると手をテマリの尻へと伸ばし――

「ヒッ！」

その動きが機械のように正確に止まる。テマリは男を振り向きもしない。ただ手をかざしただけだ。五本の刃物が男の喉元に突きつ

けられ、そこで静止していた。木箱に座っていた男達の嫌らしい笑い声が止まる。一人が懷に手を入れていた。

「行くぞ」

悠然と、見る者を魅了するかのような仕草で髪をかき上げる。だがそれは明確なる威嚇だ。虫を誘惑し、誘い込む蜜ではない。遠ざけ、不躰に近づく者を血で贖わせる気高き薔薇を連想させた。

テマリの雰囲気に氷点下の凍えに似た空気を感じ取ったのか、男達はそれ以降は何も言ってこなかった。浜夜は半ばその空気に吞まれながらも後に続く。

耳障りな軋み音をあげて扉は開いた。中は薄暗い。コンクリートで出来た細い通路が奥まで伸びている。活気はない。人の声も温かさもない。左右に見える扉には蜘蛛の巣が張られていた。進む。途中適当な部屋を何気なく覗き込む。薄暗い部屋の中には、図書館のように棚が整然と並べられ、その中にはDVDと思わしきケースがギッシリと並んでいた。それは床に置かれたダンボールからも溢れ出している。

「糸目」

鞭のしなやかさをイメージさせるような鋭いテマリの声。何事かと浜夜は向き直る。

「ここに呂旛がいる」

身が引き締まる。知らずと姿勢が正された。

「どうして？」

「自分で祭りをお膳立てしたのだ。それを最後まで見て楽しみたいと思うのは当然だろうよ」

——丁度良い。あの人を小馬鹿にしたような笑みが思い浮かぶ。呂旛に問い質そう、一体ひょっとこ達の何を知っているのか。煙に巻くような言葉はもう終わりだ。真実を全て聞き出す。もつともそれは雪を連れ戻してからだ。——出来るだろうか自分に。違う、やらなければならぬのだ。

薄暗い通路は遂に終点を迎えた。突き当たりに両開きの、緑一色

のペンキで塗られた扉が見える。先頭を進むのは浜夜だ。足音が大きく反響する。それは自分の心臓の音みたいだ。緊張しているのか。雪に会ったら——どんな顔をすれば良いのか、まだ決めていない。

両手で扉を押し開く。

音の洪水が押し寄せてきた。

激しいギターの音色が部屋中を支配する。抑制のない笑い声。

鼻に突いたのは微かな刺激臭。——どうやら誰かが薬品を焚いているらしい。

大きな空間。元は内と外をフォークリフトで行き来していたのか、閉じたシャッターが片側の壁を埋め尽くすかのように下ろされていた。反対側の壁には茶色いコンテナが鎮座されており、スプレーで落書き塗れにされたその下には空き缶やタバコが散乱している。

笑い声が止まり、一斉に視線が注がれるのが分かった。どこからか流れる耳障りな大音量の音楽だけが無機質に木霊する。

背後で扉が閉まる。浜夜の眼前に広がるのは無数の白装束だ。

雪から聞かされたことがある。紅は重大な案件がある時は日夜問わず集会を開く。その時彼女達は皆正装——真っ白な薄手のコート、同じくズボン。さらしを胸に巻き頭である五十嵐の前に集う。

呂旛の姿は——見えない。紅の中に溶け込んでいるとも思えない。穴が開くほど見られている。視線はマシンガンのように自分を蜂の巣に変えていく。殺意と憎しみのこもった弾丸は浜夜の心の中に突き刺さり、弾け、体全体を蝕む。

「——女の方も来たのかい。まあいいや、こっちは来なよ、浜夜さん」
聞き覚えのある、凜とした頼もしい声。それを合図としたように音楽が鳴り止んだ。歩く。声は入り口と対面側からだ。一歩進むごとに、無言の重圧が背中中に押し掛かってくるようだ。目を走らせる。と、至る所から紅の熱い視線を窺うことが出来る。百人はいるだろうか。年齢は十代、二十代。髪は虹のように色とりどり。丸坊主の女もいる。鎖が奏でるやかましい音、金属を床に擦り合わせたような音、これ見よがしに木刀をちらつかせている者もいる。

その中に混じって――雪はいた。

フォークリフト用の、プラスチックのパレットに腰掛けている五十嵐の隣で力なく座っている。二人も同じ白装束だ。五十嵐と雪の周りから、何人もの仲間が浜夜を威嚇するように睨み付けてくる。

「ほら、そこ座りなよ浜夜さん。お連れさんは……すまないね、てつきり浜夜さん一人で来るかと思ってたから、椅子は一個しか用意していないんだよ」

広間にポツンと置かれたパイプ椅子は滑稽に映る。浜夜は勧められるままに座り、テマリはその横に立った。五十嵐の声は昨日と何ら変わらない。周りの連中と違い、自分を見ても感情一つ乗せることはない。

「雪……。ごめん。ここから――」

「どうして白金が私達の所にいるか、まさか説明なんていらなかな？ 浜夜さん」

浜夜の言葉は五十嵐によって意図的に遮られる。語気に込められるは感情ではない。有無を言わさない絶対なる意思だ。浜夜は悟る。五十嵐の心中で滾るマグマの如き灼熱の怒りを。

「僕は……一時的とは言え、雪を追いついてしまった。彼女の居場所を消し去ってしまった」

「それがどう言う意味が分かるよな？ 過去、白金を化け物のように遠巻きにしていた連中とは違う。あんたは白金にとって救世主だった。大袈裟でも何でもなし。そのあんたから締め出されたんだ。

……一度持ち上げておいて、再び井戸の底に落とす。残酷にも程があるねえ」

雪は俯いたままだ。表情は見えない。それでもきつと声は聞こえている――と信じたい。

「こんな女、面倒臭くなつたかい？ 白金には悪いが気持ちは分かるよ。普通の女なら、男がちよいと離れてもその帰りを信じて待つものさ。でも白金は違う。それはあんたが一番知っているはずだ。あんたしかいなかった。そのあんたが離れて行ってしまうことは、

白金にとっては暗闇の中にあつた唯一の明かりを失つたようなものさ。分かる？」

——分かる。だがそれは口に出したら安っぽくなるので言うことはできない。

周りに誰もいない。薄気味悪い目で見られ、陰口を叩かれ、物を投げられ——

自分は散々知っていたはずではないか。なのにどうしてそれを忘れてしまった！？

「安っぽい正義感で白金を助け！ それで満足だったかい！！？ あんたの小っぽけな自己満足のために白金を犠牲にするな！！ この子の体に憑いているモンを祓うと言つて聞かなかつたあの時のあんたは、もつとまともに見えたよ！ だから私も白金をあんたに託したんじゃないか！！」

五十嵐にはきつと雪の気持ちいが痛いほど分かっている。だから——それを追想するうちに怒気が膨れ上がっていったのか、彼女は立ち上がった。

居場所のなかつた自分達。

居場所を失うことの意味を誰よりも恐れていたはずなのに——！
「その女が来て、自分の存在の意味がなくなった。そう言つてこの子は泣いたよ、一年ぶりに！ 女を作るのは構わない。でもだからと言つてそれを、白金を泣かす理由にするのは最低だ！！」

ゆつくりと浜夜へ向かつて歩いてくる。金色の髪をたなびかせた白き死神。五十嵐の目は欄と燃えていた。その手に握られているのは雪と同じ得物、一振りの木刀だ。

「糸目——」

「絶対に手を出すな、テマリ。五十嵐さんだけじゃない、他の人にもだ」

小声で約束を交わす。

テマリの力を持つてすれば、おそらく百人が束になるうが切り抜けられるのだらう。だが、そんな瑣末なことはどうだっていい。自

分は——殴られに来たのだから。

雪は俯きながらも、たまに身を震わせている。泣いているのだろうか。

「その腕をどけな」

言われていることは分かっているけど意味が理解できなかった。一瞬浜夜は戸惑う。それでも言葉のままに、膝の上に置いてあった両手をどかし、パイプ椅子の後ろに回す。

直後、手加減なしの木刀が右膝にぶち当たった。

「糸目！！」

「ッ！！！！」

歯を食い縛って激痛を堪える。五十嵐は容赦なく、浜夜の骨を砕くべく暴力の限りをその手から解き放ったのだ。周りから五十嵐を賞賛する口笛が飛びかった。

雪が顔を上げた。

その表情は——悲痛に満ちていた。

声をかける前に、今度は左膝を打ち砕かれる。痛みが体内で暴れ狂い、それは脳髄の支配までも許す。一瞬真つ白に染まる視界。声は出さない。これは自分の意地だ。だが乱れた呼吸系統からは絶え間なく大きな息が吐き出される。全身の体温が沸騰し、嫌な脂汗が湧き出た。

またしても緊張感のない口笛が飛ぶ。おそらく今度は——自分宛へのものだ。

「フン。我慢強さだけは相変わらずだね」

「……浜夜……さん……」

泣き腫らしたであろうその瞳は痛々しいほどに赤く染まっている。雪は浜夜を見た。目が合う。赤い瞳は悲しみを湛えながらも、それでもこの公開処刑の中止は口に出さない。

それが白金雪の今の思いであることを知る。

「チビ女、お前自分でも気づいているのだろう？　今のお前の怒りは、半分はお前のものだ。だがもう半分は……得体の知れない何か

によつて操られていることを」

雪の目に宿す感情に変化が起こる。浜夜からテマリへと移した視線には憎悪が込められていた。

テマリの声はひどく静かだ。独白するように淡々と紡がれる。

「すまない。一人は……辛いものよな」

「知つた風なことをぬかしているんじゃないねえ!!」

水滴を思わせる小さなテマリの響きは雪の導火線に火をつける。

それを聞いても尚、テマリは揺るがない。哀愁さえ漂わせるその細い体は、雪の怒りを静かに受け止め体内で反芻させているように見えた。それが更に自身の熱を高める起爆剤となつたのか、雪は立ち上がり歩き出す。

当然——その向かう先はテマリだ。手には、浜夜がすっかり見慣れた彼女愛用の木刀。

「邪魔なんだよ、お前! このままで良かったのに。ずっと今のままで良かったのに!!」

振り下ろされた木刀をテマリは視線で追いかける——バネのような勢いで突如その身を後退させる。まさに猫。危険を察知して瞬時に場を飛び退く行動。

耳をつんざく破壊音。

誰もが目の前の光景を疑つたことだろう。浜夜も五十嵐も、そしておそらくテマリさえも啞然とその現実離れした痕跡を見つめている。

テマリを捉え損ねた雪の木刀はコンクリートの床に激突していた。だが驚くべきはその惨状だ。本来ただの木材でしかない木刀はコンクリートを穿ち、直径一メートルにも渡るクレーターを形作る。破片が宙を舞い、砂塵が散つた。蜘蛛の巣のようにヒビ割れた地面は、雪の一撃に如何なる破壊力が込められていたかを物語る。人一人安易に壊せるであろうその力。

テマリは俯く。体が震えていた。恐怖——と思つたのは一瞬。即座に顔が上がる。その勢いでサングラスが虚しい音を立てて落ちた。

猫の瞳が憤激に染まる。遂にそれは言葉となつて吐き出された。

「呂幡！！ 貴様、どれほどまでに私を愚弄するか！！！」

慄いたのはその瞳ではない。テマリの醸し出した圧倒的な存在感と、怒りを描写するその響きは百人の人間に染み渡った。それを浴びてもただ一人、雪だけは歯牙にもかけない。

「これほどまでに人離れた力！ よほどの隙間がないと、如何に呂幡とも言えど人間に分け与えることは叶わなかったはず！ チビ女、どうして……！？」

——浜夜には分かった。

テマリには——分からないかもしれない。

妖怪二人が対峙し、それを見ていることしか出来なかった自分達。足手まとい。不必要。いてもいなくても同じ。浜夜でさえそのような劣等感を抱いたのだ。ならばそれ以上に、テマリが現れたことによつて自分の立ち位置の危機感を感じていた雪は——

無言。だがその気迫は雪の言葉を代弁する。そこにドス黒い何かが混じっているとしても、それは雪にとっては望むべき力なのだろう。再度、木刀が振るわれる。テマリは——床に手を付き、身を屈めてそれをかわした。

「……何だかヤバそうかな」

五十嵐の呟きは浜夜にも届いた。

そうなのだ、諸悪の根源を叩かないと雪はきつと解放されない。

だから——

「ああ、でも言うておくよ浜夜さん。私はね、たとえ今から十分後に世界が滅びるとしても、義理と人情を優先する。つまり——」

「……あツツツ！！！」

一切の躊躇いもなく、処刑執行人のように五十嵐は木刀を振り下ろした。次なる矛先は右腕だった。気が狂うほどの痛みが更に追加される。既に両膝に埋め込まれた戒めの証は刻一刻と大きくなっていった。それは罪を思い出させるように、時間が経つにつれ痛みを増している。体を捨ててしまいたい欲求。呼吸をすることに全身の細

胞が悲鳴をあげる。

椅子から転げ落ちた音は派手に響いたようだ。雪と再び目が合う。彼女には、はつきりとした意思があった。その証拠に、ボ口雑巾のようにされている自分を見て目を伏せたのだ。

「五十嵐さん……雪と……話をさせて下さい……」

「……」

返答は灼熱の苦痛を伴って返された。五十嵐は嬲る。頭は狙わない。自分に後悔と苦痛を植えつけるのが彼女の役目。最後まで残っていた左腕も持っていかれた。四箇所の火山口からは苦しみと言う名の噴火が絶え間なく続く。

「糸目——！」

「——あんたは頑張ったよ。あんたが悪い男じゃないのは私も知ってる。だからもう良いじゃないか。白金は私達と共に生きる」

言葉を口にするのも辛くなってきた。声なき絶叫が体の節々で木霊している。息がまともに吸えない。だがこんなものは……きつといずれは消え去るのだ。雪が受けた苦痛は消えない。

「返してもらいます、雪を」

「返してもらっ、と来たかい。どうして？ 肉親でも恋人でもないだろう」

「五十嵐さん。貴女のチームは、血の繋がりを一番とするのですか？ そんなものより、もっと深い絆で結ばれているはずだ。口にすると陳腐になってしまうような青臭い言葉で」

「……言うじゃないか。そんな体でよく大口叩けるよ」

襟を掴み上げられ、右頬を引っ叩かれる。今度は平手打ちだ。しかしその鋭い音は五十嵐の中で吹き荒れる嵐を反映しているとも言える。ここまで来るともはや口笛を吹く者はいなかった。固唾を飲んで紅のメンバー達は行く末を見守る。浜夜は知る由もなかったが、メンバー達は皆、五十嵐がどれだけ雪を大切にしているかを知っていた。そしてそれは、もはやただの暴力や暴言で収まる範疇にはない。リンチで囃し立てるような、その類の薄っぺらいものでもない。

のだ。その空気は攻防を重ねていたテマリと雪にも伝わる。二人はそれぞれの思いを視線に乗せて浜夜へと向けた。

「雪が……心から、自分はもう異路色系目相談所にいたくない、と貴女に話したのでしたら諦めます。僕が言うのもおこがましいですが、これは心のすれ違い。きっと、今起きなくても近い未来のどこかで起きていた試練。だから僕達はこれを解決して乗り越えていく必要がある」

確信していた。

自惚れと誹られても良い。雪が自分達を嫌うはずはない。

だって——自分とジッポとアオイと、その中でいつも一番に声を張り上げていたのは彼女なのだ。

五十嵐は嘘をつかない。それも浜夜は確信している。否定の言葉は——なかった。しかしその目の剣呑さは何ら衰えることはない。

「僕の右腕を持って行つて下さい。差し出せるのはそれくらいしかありません」

「そんな動きもしない腕はいらないよ。——そうだねえ——」

再び木刀を手にした五十嵐は、その先端を浜夜の足の付け根へと向ける。

「この場で去勢してやろうか。——白金もある意味、女として恥をかかされたんだ」

そこに下品な響きはない。だから誰も笑いはしなかった。故に恐怖が部屋の中に渦巻く。五十嵐は害虫でも見るかのように見下す。昨日の柔らかな目を知っているだけに浜夜は辛い。

「五十嵐さん……」

渦巻く濁流に小石を投じたのは——雪だった。もはや五十嵐に意見できるのは彼女を置いて他ないだろう。

「もういいよ——」

「白金。何が起ころうと、仮にあんたが人を殺そうとも、それでも私は白金の味方だ。白金だけじゃない、ここにいる全員、誰一人傷つくことを私は許さない」

浜夜から見える範囲でも、その言葉に反応して何人かが俯いたり、落ち着かない様子で顔を動かしたりするのが見えた。五十嵐は——母だった。彼女達は子。だからこそ相手が誰であろうと五十嵐は容赦しないのだ。だからこそ——自分に制裁を与える閻魔にも成り得るのだ。

「……とは言え、一年白金が世話になったのも事実かね。——アバデイン、いるかい!？」

浜夜が入ってきた扉が開かれる。そこから姿をのぞかせたのは二メートル近い巨軀を誇る欧人だ。刈り上げたその髪の下で浮かぶ顔は邪悪なる愉悦。緑の瞳が怪しく光る。

「五十嵐さん、もういいよ! そこまでしなくても——!」

「アバデイン、その男を連れてお行き。ただし殺しちゃダメだよ」
うずくまる浜夜の肩に、野太い手がかけられた。丸太を思わせるような豪腕。テマリが危機を察知してこちらに心を寄せるのを感じる。それでも浜夜は冷静に告げた。

「五十嵐さん。僕は貴女と、貴女の仲間を傷つける気はありません」
「お優しいことだね。明日以降もその心がけていておくれ。じゃあね、バイバイ浜夜さん」

「でも——」

左手で丸太を捻り上げ、そのまま自分の方へと引っ張る。男は驚愕と苦痛の声を同時に発するが、それが浜夜が聞くその男の最後の声となった。バランスを崩し自分へと飛び込んでくるその体に渾身の掌を打ち込んだ。五十嵐が、雪が、テマリが目丸くして見守る中、男は体のくの字に折ると、そのまま受身も取れずに崩れ落ちる。悶絶。電流を流したかのようにその体が痙攣する。善良をモットーとする浜夜が自らの禁忌に触れた瞬間だった。

「貴女達以外の人は別です。僕を罰することが出来るのは紅だけだ」
「……骨くらい折れているかと思っただけだねえ。随分、頑丈じゃないか」

青春を謳歌しなかった日々の裏返し。この世の裏側を求め、同時

に体造りに余念がなかった日々。その実は本意の元で結ばれた。人外相手に役に立つのかは分からなかったが、それでも単純な強さをも浜夜は求めた。

僅かに五十嵐に動揺が走った。狙ったつもりはないが、木刀に耐え、その上で巨軀を沈めたことは彼女の中で何らかの波を形作つたようだ。その隙を浜夜は逃さない。

「雪！」

叱られる前の子供のように、雪の体が震えたのが分かった。良い兆候だ。浜夜が一番恐れていたのは「無関心」。それでも先から雪は、こちらを気にするような反応を何度も見せている。

ならば――

これは自分が言った通り、心のすれ違いの一つ。不幸な人生を送ってきた雪は普通の人に比べ、精神が不安定だった。加え、そこを妖怪につけ込まれたのだ。もっともそれは浜夜にとつてただの言い訳。自分が一時、ひよつとこやテマリに気を取られて雪を蔑ろにってしまったことは事実。

「ごめん……雪。僕の所に戻って来てくれ……！」

立ち上がり頭を下げる。気の利いた言葉など思い浮かぶはずもない。ならば子供にでも出来ることを自分にするしかなかった。完全なる無防備。この頭を五十嵐に砕かれても文句は言えない。

頭が割れるような衝撃――は来なかった。

地面と睨めっこをしながら五秒、十秒と経過する。

耳が痛いほどの静寂。顔を上げれば、まるで判決を下す裁判長を皆が注視しているかのような光景が広がっているのだろう。

「頭……上げてくれよ、浜夜さん」

言葉に従って浜夜は視界を戻す。五十嵐は沈黙していた。雪に、好きに喋らすことにしたのか。

雪の双眸は、遠目にも揺らいでいることが分かった。だが言葉が出てこない。心の中で葛藤が生じているのだろう。浜夜は待つ。その口からどんな言葉が出ようと受けるつもりだった。やがて――

「私——イ！？」

その言葉は最後まで紡がれることはなかった。突如雪が頭を抱えて苦しみ出したのだ。齒を食い縛り、まるで酔っ払いのようにフラつき始める。一番近くにいたテマリが何事かと駆け寄ろうとするが、雪は木刀を横に一振りし、拒絶の意を示す。

「ちくしょう……煽るなちくしょう！！ 分かってる、分かってはいるさ！ 私、私は……！」

まるで自分で自分と対話をするように、苦しげに雪は呟く。

状況をいち早く理解したのはテマリだ。その瞳が憤怒で溢れる。

「呂旛！ いい加減にせんか！！ 私に気に入らんのなら、自ら来れば良いだろう！ これ以上人を弄ぶでない！！」

返答はない。いや——あつたのだ。

雪は碎くかのような勢いで木刀を両手で握り締め、苦しげに、荒い息をつきながら標的を定める。浜夜と五十嵐が異変を察知して同時に駆け出す。テマリの問い掛けを嘲笑うかのよう、雪は——呂旛は——新割りの要領でテマリの前に木刀を振り上げた。

「私……私、もう嫌だ！！ 私はただ、浜夜さんと一緒にいたいだけなんだ！！」

泣きじゃくるように発したその言葉が浜夜に突き刺さった。だが……なぜだろう。

その言葉に、一番ショックを受けたのは——

テマリは呆然と、目の前に迫る木刀を見つめていた。

まるで抜け殻のように。中身だけどこかへ消えてしまったように。唸りと共に下ろされる破壊の一撃。先程の割れたコンクリートを鑑みるならば、人の頭など卵を割るように潰すことが可能だろう。

テマリは——動かない。

乾いた音が生じた。コンクリートをも貫く力を思えば、あまりに地味で拍子抜けした、くぐもった響き。それを真の意味で理解した時、浜夜の足は止まり、悪寒で全身が埋め尽くされた。

それは一枚の絵画のようだった。渾身の力を込めて剣を振り下ろ

す白装束の雪と、美しい着物で身を纏ったテマリ。その剣は——音ごと吸い込まれたのだ。絶対なる壊滅の意と共に。

木刀はテマリの頭上で止まっている。

両者共に動かない。

絵画に魂が宿る。

テマリの頭から——一滴の鮮血が頬を伝って首へと流れ落ちた。

受けたのだ、テマリは。全てを粉々に打ち砕く雪の尋常ならざる力を。それも——頭で——

木刀が真つ二つに砕けた。同時に雪の心も木っ端微塵に散った。

「あ……あ……」

驚愕と恐怖。雪も、まさかピンポイントで当たるなどとは思っていなかったのだろう。目を見開き後ずさる。また一つ、赤い川がテマリの綺麗な顔を汚し、薄紫色の着物に吸い込まれていった。浜夜と五十嵐は知らず足を止めていた。

テマリが——ゆっくりと歩み寄る。雪が身を引いた分だけ、その間を詰めるように。

怯えには多くの感情が内包されている。雪は眼前に映る猫又を真の意味で恐怖した。それでもテマリはその足を止めることはない。遂に両者の空間がゼロになる。

もはや動くことさえ叶わないであろう雪の前で、テマリが右手を宙へと伸ばした。

迫り来る痛みにも備えてか、反射的に目を瞑る雪。

「テマリ、待て——！」

言葉は無力。待てと言われて待つ者などいない。それでも浜夜に出来るのはそれくらいしかないのだ。そして知る。自分の言葉は——見当違いで、無意味であったことを。

小さな雪の体がそつと抱きしめられた。包み込んだのはテマリだ。雪の目が驚きで見開かれる。

「すまぬ……一人は……辛かったであろうな……」
何度目か。

既に何度も聞いたテマリのその言葉を、浜夜は心の中で疎んじていた。

誰もが気軽に吐いて良い言葉ではない。同じ苦しみを知った者でないと、その苦しみは永遠に理解できないのだ。知った風に、もつともらしい台詞で取り繕われることを自分達は嫌う。だからこそ、それもあつて自分は過去に雪を助けることが出来たのだ。

誤解だった。

ようやく気づく。自分がその思考に至ったのなら、雪も同様にそれを知ったはずだ。

テマリの声は、涙の海で跳ねる魚のようだ。見渡す限りの悲しみが地平線の果てまで続く。その青を血液としテマリは生きている。

浜夜も雪も——五十嵐も悟る。

血の涙が流れ落ちた。絹のような美しい茶色で覆われた頭皮から零れ落ちたものだ。その純真なる赤さえも輝かしい。聖母のように雪を抱くテマリは、自らの傷などまるで無関心な様子で慈愛を注ぐ人を越えた者の献身なる姿。息を飲む。彼女は確かに数百年の時を生きたのだ。

「……ごめん」

「……気にするな」

感情の果てに存在したのは裸の心だ。テマリと雪は——お互いの魂に触れたのだろうか。

静かなる時が落ちる。自分如きの足音でそれを乱して良いのか浜夜は悩み——

「糸目。こつちへ来い。チビ女を頼む」

「ん……ああ」

戸惑いは五十嵐に対してだ。視線を向けると、彼女はあからさまな溜息を吐いた。だがそこに刺々しいものはない。頭を下げると雪の元へと駆け出す。痛む体の節々は完全無視だ。

気を利かせてか、テマリは身を引いてくれた。雪を抱擁する。胸の中に雪の涙が染み渡っていくのを感じた。何度も何度も彼女は謝

罪する。打たれた四肢の傷をそつと雪が撫でた。正直それだけでも痛い。だがそれ以上に……その仕草から優しい心が伝わって来るので成すがままにさせる。これで——良い。怒りも涙も自分にぶつけてほしい。

誰も何も言わなかった。雪の謝る声とすすり泣く音だけが空間を支配する。浜夜は無意識に電子タバコの箱を取り出していた。今度は何も考えない。空気が読めないだとか、鈍感だとか、そんな想いは不要。自分がそうしたいのだ、ならばそれをすれば良いだけの話。当たり前のことだ。

「お詫びと言つては何だけど……雪、これあげる」

「……良いの？」

静かながらも期待に満ちたその声に浜夜は言葉が詰まる。逆に、物で買収するかのような自分の行為を咎められるかと思つていたくらいなのだ。

「罰として、しばらく僕は禁煙だ。……一本吸つてみるかい？ チ

ョコレート味がお勧めだよ」

「ありがとう、浜夜さん！ チョコレート味——あ、待つて！ だったらイチゴ味が良いな！」

「うん？ ……じゃあ……はい、吸つてみて」

本体にカートリッジを接続して雪に渡す。単純な仕組み。あとは息を吸うだけで蒸気を味わうことが出来る。雪はおそろおそろ電子タバコを口に咥え——やがて息を吐き出した。

「おいしい？」

「うへへ……分かんない。でも何か嬉しいや！ ……初めてだしね」
なぜか、見せつけるようにテマリに向かって息を吐き出す雪。白い蒸気が甘い香りを乗せて昇る。

不敵な笑みでそれに応えるテマリは——表情をリセットするかのよう一旦俯くと、再び顔を上げた。そこにギラつく瞳を見て、浜夜と雪は息を飲む。

重い何かが倒れる音。

そこへ視線を向ける最中で浜夜は動きを停止する。その音は一箇所ではない。四方八方、部屋全体から突如起こったのだ。辺りを見回してその異様な光景に戦慄を抱いた。

紅のメンバーが全員床に倒れていた。最後に倒れる一人を目撃した浜夜は思う。まるで――糸の切れた操り人形のようなのだ。何の予告もなしに彼女達は崩れ落ちたのだ。

自分と雪と――五十嵐は無事のようなのだ。

その中の誰かが声を発する前にテマリが告げた。

「安心しろ。外傷はない。さすがにここから先は――あまり多くの人間に見られたくないのだな。悪いが眠ってもらった」

優しい声。雪の想いを知って以降、テマリは可愛らしく、しおらしい。

だが三人は心を震わせる。その声の裏側にある闇を感じ取ったためだ。

ずっと抑えてきたのだろう、テマリの肩が揺れ動く。息苦しい瘴気が発せられる。体内で荒れ狂う熱が漏れ始めていた。テマリの体から残酷なる激情が捌け口を求めて産声を上げた。

「呂旛!!!!」

壁が長方形に切り取られ、粉碎した。テマリから飛び交った風が、バターを切り取るナイフのように明確なる意思を持って動いたのだ。どこかの部屋と隣合わせだったのか、その奥には古ぼけたソファにゆったり腰をかけて笑顔を浮かべる呂旛がいた。破壊の呼応を受けて立ち上がると、何ら悪びれた様子もなくテマリと向き合う。

――自分達の出番ではない。そう判断した浜夜は雪を連れて壁際へと下がる。

「……ごめん……。……一時……振舞う……様……」

すれ違い様のその呟きは、唸る暴風にかき消された。浜夜が真意を求めてテマリを見るも、その顔は既に修羅と化している。

悟る。テマリは何らかのスイッチを外した。

呂旛はいつもの、人を食った笑みを絶やさない。浜夜は愚かな恐

れを抱いた。今のテマリの様子を、ヤツは正しく理解しているのだろうか？ 先程までのテマリの悲しみは、見る者全てが言葉を失うかのような深遠に満ちていた。

では、その悲しみが引つ繰り返ったら？

あの底のない悲しみが、全て怒りに取って変わったら――？

「いやはやテマリ、全く貴女の言う通りでしたよ。人は敬わなくてはなりませんかね。あれだけ心を縛り付けたはずの私の鎖を、そちらのお方は見事最後に脱出することが出来た。面白いですね」

テマリは何も言わない。

浜夜はここから逃げ出さないように意思を抑え付けるだけで精一杯だ。生物としての本能が警告している。足元から頭までゆっくりと這い上がってくるような恐れには吐き気さえ覚える。

「ここまで手筈を整えて、ようやくやる気になったみたいですね。テマリ、私のことを見下していたでしょう？ 心の中で子ども扱いしていたのが十分伝わってきましたよ。天狗は人から敬われる存在であるせいか、下に見られるのを酷く嫌うのです。今後は気をつけていただきたい」

細工は凝っていた。それが故に、テマリが何らかの反応を自分に表示すと思ったのだろう。呂旛の思惑は外れる。未だテマリは喋らない。天狗の笑みに苛立ったシワが刻まれた。

「だんまりですか、いい加減にして下さい。やってみたらどうですか？ 武力行使。……出来ないのでしょうか？ 昨日も、一撃打ち合っただけで身を引いた臆病者だ。長妖怪だか何だか知りませんが、弱者に従う謂れはありませんよ。私に物を言うのなら身の程を弁えることです」

クツクツと、沸騰した鍋のように笑い声を弾ませる。呂旛は喧嘩を望んでいるのだ。下らない見栄とプライドのためだけに、雪を利用し――テマリの神経を逆撫でさせた。

闇が――呟いた。

「……もう喋るな…… 呂旛。私とて…… 自分を抑えられん……」

「クッ……！」

咳が詰まったように呂旛は吹き出した。それを皮切りに、哄笑を響かせる。癪に障る笑い。天狗は高々に口を開けてテマリを腹の底から笑った。

笑いが――

不自然に停止する。

人間達に焼き付いたのはその光景だ。

理解は後から遅れてやってくる。

「――ハッ――？」

滑稽なのは、何が起ったか理解するのに一番時間を必要としたのは呂旛であつたということだ。

一秒に満たない瞬間。

瞬き一つの間。

高笑いの象徴である大きく開けた呂旛の口元に、赤い刃が突き刺さっていた。

貫かれていた。

団子を刺した串のように刃は呂旛の口を貫き、そのまま奥の肉壁をも突き破る。

水の入った袋が破裂したような太い音。

「――イイイイイイイイ！！！！？」

奇声は、知らずに異物の侵入を口に許した呂旛から。

浜夜は雪を強く抱きながらも、目の前で起きた事柄に見入る。

テマリの右手にはあの赤い爪がその姿を現していた。だがいつもと異なるのは、その在り方だ。五本の刃はテマリがかざした指の先で一つに交わり巨大な剣と化していた。握り拳ほどの大きさ。それは伸びている。数メートルにも渡る無慈悲な刃は、その先に佇んでいた下衆を何なく飲み込んだのだ。

結果だけがそこに在った。

過程がない。映像を？ぎ合わせたテレビの動画。攻撃と言う名の前振りが一切消えていた。

それは呂旛も同じだったのか、爪を引き抜かれたその顔は血で薄汚れているにも関わらず、拭おうともしない。荒い息を血と共に吐き出し目を見開くだけだ。その行動は浜夜の動体視力だけでなく、妖怪である呂旛からも今のが視えていなかったことを窺わせた。

汚らしいものをぞんざいに払うかのように、テマリは爪を宙へ振った。赤飛沫が床へと散る。今度は浜夜にも見えるように、爪はゆっくりと元の形状に戻ると五本の指へ収まった。

「……なるほど……これがテマリの力ですか……なるほどなるほど。良いでしょう、ならば私もお見せしますよ、昨日のような遊びとは違う……呂旛の力をね……！」

息も絶え絶えに、呂旛は気丈にも言葉を紡ぐ。未だその顔には恵比寿が張り付いていた。しかし、もはやその顔を無理に取り繕っていることは浜夜の目からも明らかだ。

テマリは——つまらなさそうに呂旛を一瞥する。

「見せてあげましょう！ 奥義、六夜の——」

両耳が飛んだ。

冗談のような光景。

簡単に剥がれ落ちてはいけなはずの、聴覚を司る器官は、福笑いのように他愛もなく外される。呂旛の耳が無慈悲に床に落ちる前に、浜夜の耳をつんざくような悲鳴が飛び交った。

品のない叫びは呂旛の口から血や唾と共に吐き出される。突如開いた二つの穴からも、行き場を失った鮮血が溢れ出した。

雪が顔を背けた。

浜夜は言葉の代わりにその体を強く抱きしめてやることしか出来ない。

テマリの爪は——収まったままだ。だが不思議と、その赤い爪には禍々しい血がこびり付いている。

既に呂旛の仮面は剥がれ落ちていた。

その下にあったのは、見得も外聞も全てを放棄した、苦痛に呻く一人の愚者だ。

言葉はない。テマリの口は閉ざされたままだ。

それが酷く不気味に映る。

歩き出した。ゆっくりと。相手を蹴るように、その身に満遍なく恐怖が染み込むように。

背を向けたテマリの表情は、浜夜からはもはや見えない。膝をついた呂旛は苦痛に塗れながらも顔を上げる。その先に何を見たのか――その表情が引きつり、歪んだ。

溶ける。恐怖と狂気と、生と死を掻き混ぜた混沌は、自らの力とすることで均衡を保つ。

「六夜の――！！」

右腕が切断された。

同時に最後に残っていた呂旛の虚栄心も完全に消し飛ぶ。

何度目か、断末魔に近い金切り声を呂旛は飛ばした。浜夜達三人の肌を震わせるほどの人ならざる叫び。そこに込められているのは純粹なる苦痛のみ。

今、分かった。

なぜ昨日、テマリは呂旛と対峙した後にさつさと身を引いたのか。馬鹿馬鹿しいくらい単純な理由だったのだ。

子供の喧嘩にムキになる大人がどこにいる？

初めから喧嘩にさえならない。ではなぜこのような――？

……呂旛はおそらく本人の意図する以外の何かで、テマリの心を穢したのだ。だからテマリは怒っている。いや、これは――怒りを通り越して、我さえも忘れている。

収まるのか？ この状態のテマリは、自分の意思でその刀を鞘に収めることが出来るのか？

「浜夜……さん？」

疑問は胸の中からだ。雪の体をそつと自分から解放したためだろう。

このままではいけない。

こんな惨状、きつとテマリとて望むべきものではないはずだ。

清く正しく。

他人に押し付けるつもりもないが、目の前で惨劇が起きていると言うのに、それを見過ごすことは出来ない。雪の制止を振り切り、浜夜は駆け出す――

既に勝敗は決していた。

浜夜の思った通り、最初から争う必要さえなかったのだ。

「待て！ 分かった！ 悪かったテマリ！！ 私が悪かった！！」
その女を苦しめる気など初めからなかった！ 悪ふざけが過ぎたことは謝る！！」

テマリの歩行速度は変わらない。ゆっくりと、ゆっくりと、機械のように一定した速度――

片腕を落とし、口を貫かれ、両耳を削がれ、呂旛は血溜まりの中にうずくまる。

そして懇願した――命を。

「もう人間から金を取るのもやめる！！ 全面的に従う！！ だから、だから――もうやめてくれ、テマリ！！ お願いだ――」

ぞうりの動きが止まった。呂旛にとって報われなかったのは、それは何も自分の言葉をテマリが受け入れてくれたからではない。

単にテマリが――もはや呂旛に対し、進めるべき歩の間がなくなつたからだ。

「お願いだから何とか言ってくれ、テマリ！！」

悲愴なる願いは最後まで叶えられることはない。

呂旛は見たであろう。処刑執行人の構える、生死を分かť境目。

赤い境界線。

境界が天狗に刻まれる。その体が生と死によって分断される――
――直前。

「テマリ！！！！」

腹の底から搾り出した浜夜の声は、テマリの背後で大きく響いた。振り上げられた右手を捕まえる。だが……こんなものはきつと、テマリからすれば子供の力で握られているのと何ら変わりないだろう。

それでも彼女は動きを止めた。相変わらず浜夜からはテマリの表情は見えない。無作法に左手でテマリの頭を鷲掴みにすると、コマのように回転させて自分の方へと向かせた。

意外だった。テマリは何ら抵抗することなく、浜夜の成すがままにされたのだ。視線が交差する。彼女の瞳に怒りはない。ただ虚ろな眼差し。浜夜を見ている。だがその視界に浜夜は映っていない。何という矛盾。テマリは浜夜善を通じ遠いどこかを見つめているようだった。

「おい、テマリ!？」

幻想溢れた妖精を連想させるような、儚く、大気に溶けてしまいそうな存在。慌てて浜夜はテマリの両肩を強く握り、揺さぶって声をかける。

首に腕が回された。両腕だ。包み込むように、テマリはそつと浜夜を捕まえる。その黄色い目に描かれるは——幸福感？ 魅惑に満ちた桃色の唇が迫る。それは、動くことさえも叶わない浜夜の口に重なる前に、可愛らしい花弁を思わせるかのように開かれた。

「ああ……ようやく……」

落ちる。

戒めは解かれた。浜夜の首に掛かっていた圧力が消ると同時に、テマリは全ての力を失ったかのようにその体を冷たいコンクリートに委ねる。瞳は閉じられていた。

部屋を埋め尽くしていた殺気が跡形もなく消えている。——幕が降りたのだ。

浜夜はテマリに呼びかけるが何も反応は返ってこない。だが呼吸は安定しているし、病気特有の目立った汗の類もない。安堵の息を吐いた。着物に血の染みは付着しているが、いつの間にか頭から流れ出ていた血も止まっている。人を越えた、妖怪の再生能力だろうか。

「——救急車——はマズイね。医者——もマズイか。人じゃないんだろ？」

一番早く、冷静に物事を判断出来たのは五十嵐だ。浜夜と雪をよそに、落ち着いた声で道を考えている。テマリの瞳も、人知を超えた力をも目の当たりにしてこれなのだから尊敬に値する。

「そっちの、気を失っている血塗れの兄ちゃんもいるし……裏のツテに連絡してみるかね」

忘れていた。背けたくなるような血溜まりに目を向けると、そこには白目を向いた呂旛が置物のように鎮座している。体を解体されかけたと言うのに、それでも生気が宿っているのが分かった。

「ジッポやアオイに相談してみようよ浜夜さん。あの人達、ヤバイ道にも詳しそうだから——」

「オラアアア！！ テメエ等全員手エ上げろオオオオオ！！！」

荒々しい男の声。それに連動するように扉が開かれる。

一体これ以上、何が起るといふのか——

辟易とした思いを抱え、浜夜は自分が潜った入り口へと目を向けた。

そこにいたのは——

「何だコリヤ！！ お前等何やってんだ！！？」

「あ。雪君、善君と仲直りしたみたいだね、良かった」

頼もしき仲間達。緑のキャップとサングラスをトレードマークとするジッポ。灰色の大きなリュックを背負い、その両手には——銃のような物が二挺握られている。隣には、白いスリムパンツを履いたアオイ。……上半身は裸だ。流石と言うべきか、自分と雪を一目見ただけでアオイは空気を読み取ったのだろう、わだかまりが解けたことを確信している。気恥ずかしそうに雪が俯いた。確か事務所を出る時ジッポは来るのを渋っていたが、結局はこうして駆けつけて来てくれたのだ。登場が遅かったのは……美味しい所でも持つて行こうとしていたのだろうか。

「あんた達……どうやってここに入った？」

少し苛立ちの混じった顔で五十嵐が顔をしかめる。見張りの人間の所在を気にしているのか。五十嵐も少なくとも二人の顔だけは知

っているはずだ。

「おう？ 外に敵ついのがたむろっていたけど、万国共通のパスポートを見せたら素直に通してくれたぜ？」

「はあ？ 何だいそりゃ。浜夜さんの写真は事前に私が見せていたけど、他の人間は——」

「これよこれ。人種も肌の色も言葉も思想も関係ない！ 日本人以外には特に通じる言葉！ 全世界で、お金よりもキスよりも心よりも愛される魔法の切符！」

そう言つて背中のリュックから次々と中身を取り出す。ダイナマイト——に似た、紐が付いた円柱の塊が束になっている。手榴弾——を思わせる、凹凸があり緑色の卵状の容器。モデルガン——と信じたい物体が六つ……

「浜夜さん……」

ジト目。いつか浴びた雪のそれに引けを取らないくらい、五十嵐の重たい眼差しが向けられる。

「あんたのモットー、もう一度聞いて良いかい？」

「コラコラコラ、誤解するんじゃないやねえよ！ 俺は善の言いつけはきちんと守っているぜ！？ 善良な市民を守るためにしか使ったことないっての！」

浜夜はジッポを全面的に信頼している。もはや言うまでもないことだ。

でも……たまにそれを疑いなくなる時があるのも事実だ。たまに、であるが。

「それより善君、派手にやったねえ……。そっちの血塗れの人なんか特に酷い。ここは任せて。歌舞伎町のこの界限はスミレお姉さんの管轄のはずだから、僕から連絡しておくよ」

またしても一番に反応したのは五十嵐だ。彼女にしては珍しく狼狽をあらわにする。

「あんた……スミレさんの知り合いかい！ 確かにこの建物の所有者は、辿っていけば最終的にはあの人だけだ。でも、よほどのこと

がないと連絡なんて取れないと聞いたよ!？」

「……? ああ、カヨさんに直接話を通して良いけど、流石にそれはスミレお姉さんのメンツが立たなくなっちゃうでしょ。だから一応手順は踏んでおかないと……」

「カヨ、て……まさか、この歌舞伎町の元女王のことがい!?!? あんた一体何者だい!?!」

捲くし立てる五十嵐と対照的に、アオイは困ったように言葉に詰まる。「何者?」と言われて即答できる人間は数少ない。無論、五十嵐の驚愕も浜夜は理解しているが、おそらくアオイは彼女の胸中を理解できていないだろう。通訳のように間に割って入ることにする。

「ありがとうアオイ。それじゃあここは任せるよ。あ、紅の人達は多分気を失っているだけだから」

「良しさ、これで僕も今日は仕事をサボる口実が出来たよ。最近寝てないから、眠くて仕方ないんだ。スミレお姉さんとお話してた、と言えば店長も五月蠅く言ってこないだろうからね」

「来れる所までは車で来た。テマリくらいは連れて行けるだろう。そっちの兄ちゃん——車に血の臭いが染み付いちまうから別便で頼む、アオイ」

テキパキと、ことが進められていく。

浜夜の誇る仲間達。そして異路色系目相談所のチームワークだった。

「……五十嵐さんっ!」

そんな中、温度差を感じさせるような真剣な声が部屋を震わせた。その声が誰のものかなどと問うのは愚問だ。

雪は——五十嵐の前で膝をついていた。両手がその上に添えられる。

正座だ。

「すいませんでした!?!?!」

一言。地面に額が当たっているのではないか、と思わせるくらい

深く腰が曲がる。浜夜、ジッポ、アオイは押し黙るしかない。紅の中に自分達は立ち入ることは出来ない。

沈黙は——ない。雪が最後の一文を言うか否かのタイミング。

五十嵐は面倒くさそうに、雪を追ひ払う仕草を手で行う。同時に言葉が発する。だが呼ばれたのは意外にも浜夜だ。

「浜夜さん……あんた人が悪すぎるよ!? 着物の子はワケ分らない力は爆発させるわ、危ない軍人オタクは連れてくるわ、裏世界へ根回しは出来るわ……あんた何でも有りじゃないか! ハナからこっちは勝負になっていないよ! ワンペアで良い気になっていた私と、ファイブカードをひた隠しにしていた浜夜さん。本当性格ひん曲がつてるわ」

言葉が出てこない。浜夜としては五十嵐を馬鹿にするつもりなど微塵もなかったのだが……

「とつとと白金連れて行つちまいな。馬鹿馬鹿しくてやってられないよ、もう! こっちは全員呼んで、気合入れて皆を集めたつてのに。あーアホらし、腹立つわ!」

雪が立ち上がる。そっぽ向く五十嵐に、再び深く頭を下げた。

それで——終わりだった。

頭二つ低い身長が自分の後ろから付いて来る。両手で強く握り締めているのは木刀ではない、電子タバコの箱だ。ジッポとアオイがそれを見てそれぞれの笑みを浮かべた。

「うへへ」

紅一点が三人を照らす。とりあえず——雪に聞きたいことがある。自分の財布と携帯が見当たらない。彼女に聞けば教えてくれるのではないだろうか。

今の彼女ならきつと答えられる。あの時の、車のキーの答えだつて正解してしまうに違いない。

第八話

5

昼を過ぎても、七月とは思えない妙に肌寒い気温は続いていた。

心地良い窓際の日溜りに身を置きながらも、浜夜が眠りに落ちてしまわないのは一重にそのおかげでもある。事務所の中は静かだ。雪は蓄積された疲労が押し寄せたせいか、ジツポも昨日の徹夜が堪えたのか、各々のお気に入りの寝場所に枕を置いて眠っている。ちなみに……一応ここは客も姿を現す事務所内である。基本的に皆、夜寝る時以外に一階の「家」には戻らない。仲間の団欒と憩いは、ほとんどこの二階で行われる。ジツポはともかく、雪は——女の子なのだから、あまり他人に寝顔を見せるのもどうかと浜夜は常日頃思っている。言葉づかいの悪さを正すのはとうに諦めた。ならばせめて、女の子の恥じらいは身につけてもらいたい。黙っていれば、ただの小さな可愛い女の子なのだ——

テマリは浜夜の眼前で布団に寝かせてある。気を失った状態は依然として続いており、未だ目は覚まさない。あれほどの事態を引き起こした張本人にしては、呑気とも取れるくらい安らかな顔だ。異路色系目相談所では、病欠で寝込む者が出たら常に誰かが付き添うようなルールがいつの間にか設定されていた。誰が決めたわけでもない、強制したわけでもない取り決め。いつから始まっただろうか。まだ自分とジツポの二人しかいない時だったか。うなされていたジツポを放っておけないと思う心があった。後にアオイ、雪が来てからも、何となしに病欠の時は傍にるようにしたのだ。病は人の心を弱らせる。普段気丈な人間でも、ふとした隙間から臆病風が差し込み支配される。ジツポも自分を真似た。アオイも雪も、更にそれを真似た。誰かが夢の奥で戦っているのなら、一緒に戦ってやることの出来ない他の誰かは、せめてその傍らに身を置く。それだけで

も大分違うものだ。それは自分も何度も経験している。

片膝について目を瞑る。呂旛にも話を聞かなければならない。一体、あの男はひょっとこ達の何を知っているのか。おそらく今頃は現場に残ったアオイがその手の人間に話をつけて表沙汰にならないどこかに搬送を済ませたことだろう。テマリの傷が再生したことを鑑みれば、呂旛も、もしかしたらある程度の再生能力を持っているのかもしれない。ならば好都合だ。雪を唆したことは許せることではないが、あの件は自分にも大いに責任がある――

ふと、気配を感じた。

事務所内に物音はない。開いた窓から風が迷い込む程度だ。

違和感を感じ、浜夜は目を開いた。

テマリが布団から上半身を起こしていた。

その凝視している先は自分の顔だ。

幼子のように無垢。二十代前半としか思えない普段の顔が、突然十歳程下がったかのようなうだ。

無事を安堵する浜夜の前で、テマリの双眸が滲み出す。声をかけようとした最中のことだ。喉まで出かかった言葉を浜夜は思わず飲み込む。思考が飛んだ。体も……飛ぶはめとなった。

「竹様……！」

何を思う間もなく、テマリが自分に抱きついてきた。

「竹様、竹様！ 見つけました！ やつと見つけました！！ 会いたかったです。テマリはずっと貴方にお会いしたかったです！！」

そのまま床に押し倒される。甘い香りが吹き上がり、テマリのふくよかな乳房が押し付けられた。疑問符で埋め尽くされた頭に喝を入れる。テマリが自分を誰かと勘違いしているのは明白だ。病床に巢食う孤独なる病は妖怪にもその力を発揮したのか、それとも単に歌舞伎町での一件がまだ回復しておらず軽い混乱状態に陥っているのか。いずれにせよこれはテマリの本意ではない。

「テマリ……！ 僕だ、浜夜だ……！」

着物越しにその両肩を掴むと自分から引き離れた。未だ背中中は床

に付いたままだが、それでもテマリとの距離を保つことが出来た。

拒絶を感じたのか、幼子の顔は最初悲しみに揺れ動き……数秒を経た後に夢から覚めるかのようにその表情が無へと変わる。次いで表れたのは疑問。秋空のように矢次に変化するその顔を浜夜はまじまじと見送る。やがて自分の知るテマリのそれに変わった時、ようやく胸を撫で下ろす。

疑問は言葉となって口から吐き出された。浜夜は笑顔でそれを迎える。久しぶりにテマリの声を聞いた気がした。

「……どうしてお前は、私に組み伏せられているのだ？」

「……そうだね。僕もそれを聞いて良いかい？ 起き上がりで悪いけど」

決してただの野次馬根性ではない。浜夜は知りたかった。テマリが何を思い、雪のためにあそこまで必死になったのかを。おそらくそれは、たった今自分に起きた出来事と関係があるのだろう。

浜夜は一步を踏み越える。

再び静寂が集った。

だが今度は、そこに一人分の吐息が加わっている。

浜夜もテマリも——一人ではない。

二人分の温かさ。少し離れた所には、更にもう二人分の温もりが見て取れる。

額にシワを寄せていたテマリは、やがてバツが悪そうに頬を掻いた。歌舞伎町での出来事を思い出したのだろう。これ見よがしに溜息を吐く。その息が再び吸い込まれた時、表情は一変していた。

「お前のように、とても細い目をしたお方だった」

物語は唐突に紡がれた。優しい顔。でも少し寂しそうな顔。遠い昔話が回想される。壁に寄り掛かって想いを馳せるテマリ。夢を語るような目だ。浜夜はそんなテマリに思わず見惚れる。

「いつから人語を理解できるようになったのかは覚えておらん。だがいずれも人の言葉を喋る猫など面妖でしかない。それは人だけに限ったことではない。仲間の猫も私を遠ざけた。親が死に、遂には

一人ぼっち。坊主共に追い回される日々。捕われた時も、この鬼ごっこがそれで終わるのなら良いかとさえ思った」

嫌な音を立てて浜夜の心が軋んだ。痛い。心臓に杭が突き刺さり抜けなくなったかのようなようだ。

その日々を——こうして語れるまで、テマリはどれほどの年月を必要としたのだろう。

彼女は笑った。何と眩しい笑顔だろうか。

「本当に可笑しな方だった。この地一帯を支配する領主とあろう者が、恐いもの見たさで自ら化け猫の元まで馬を走らせ、事もあるうが飼慣らそうとする。私も、人が取ったその行動を薄気味悪く思ったが、何より猛反対したのは家臣達だ。もう城中、大騒ぎでな……ヒヒヒヒ」

その時の様子を思い出したのか、心底楽しそうにテマリは笑った。下らない——あまりに下らない嫉妬心が一瞬浜夜の中に湧き起こる。それほどまでにテマリは無邪気な笑みを浮かべていた。

「当時は戦続きの乱世。誰もが武を天下に知らしめようとしていた時代。そうしなければ隣国の懷に自らの首が収まってしまう時の最中だ。なのにそのお方はな……。夢ばかりを見ておったよ。やれ平和だ、友好的に手を取り合おうだ……。人に化けることさえも出来ない、当時ただの低級妖怪であった私の背中を撫でながら、奇麗事ばかりを並べてな」

辛辣な物言い。だがそこに込められる想いは慈しみに彩られていた。テマリはきつと、その人の考えに共感を抱いたのだろう。自らの境遇も相俟って、叶えるべき夢と思ったのかもしれない。

言葉が区切られる。葛藤。自分が先を促しても良いのだろうか。おそらく物語は良い終わり方をしない。テマリはそんな浜夜の心を汲み取ったかのように自ら先を続けた。

「竹様……。一年程かな、一緒にいられたのは。その後、突如消えてしまったよ」

「……うん？」

言っている意味が分からない。テマリは死んだとは口にしていない。消えた……と言うことは、城を捨てて逃げ出したのだろうか。

「おしまい」

旅が終わりを迎えた。唐突なる幕切れ。物語の先をねだるかのように視線を向けるが、そんな考えを見透かしたかのようにテマリは軽快に笑った。どうやら今自分が聞けるのはここまで、と言うことらしい。

「そんな顔をするな。元より滑稽な目が更に妖怪じみて見えてしまう。……別に隠しているわけではない、本当に私の物語はこれで終わりなんだ。それに……確かに先程は一瞬取り乱したが、私とて何百年も、哀しみを我が物顔で跋扈させたりせんよ。気持ちの整理は付けている。お前が妖怪のような表情を作る理由は何もない」

同情は不要。ならば浜夜もそれ以上は何も言う必要はない。話は曖昧に終わっているが、そこを追求してほしいとも思っていないだろう。気にはなるが……別の言葉で締めくくる。

「義理固いんだな。それで今では妖怪の警察役、てことか」

「地獄の中で糸を垂らされては、それに飛びつくより他ない。糸を持つ主を仏と崇め、その思想に染まってしまうのも致し方のないこと。おかげで今は、呆れるくらいの平和主義者になったわ。ヒヒ、ある意味呪いだな、私を永遠に縛り続ける。街の平和。それは竹様の悲願だ」

面倒臭さがありありと伝わる。だがその口調は愛しげだ。浜夜は知らず微笑む。

気配を感じた。——テマリが目覚めた時とは違う、いやに物理的な気配。重く大きい影。

振り返る。テマリは既に察知していたのか、楽しげな瞳をその人物に向けたただけだ。

ジッポが仁王立ちしていた。その右手に握られているのは——なぜか一升瓶。そして唐突に一言。

「飲むぞ」

また不眠で壊れているのかと思ったが、違う。ジッポのサングラスの奥から水滴が頬を伝って流れるのが見て取れたのだ。拭うこともせず、透明な液体で満たされたその瓶を前へと突き出した。

「良い話だ！　俺は感動したぞ！　そう言うわけで今日は休業だ。今からここで飲み会を開く！！」

「いえー！」

その背中からグラスとつまみを腕に抱きかかえて現れたのは雪だ。いつの間に起きたのか、いつから話を聞いていたのか……。ジッポは特に涙脆い。――テマリもあえて軽い口調で話してくれたし、泣くほどの悲しみは包括されていなかったはずだが……。もはやジッポにそれを言っても通じまい。そんな中、銃弾と爆撃が飛び交うような、けたたましい着信音が鳴り響いた。言うまでもなくジッポだ。気分を害されたのだらう、大きく舌打ちを打ちながらも携帯を手に取り話し出す。

「……分かつてる。剥いでる剥いでる。……大丈夫だ、向こうには金がないんだ。あ、何？　眼球？　無茶言っんじゃねえよ。悪いが今日はもう閉店だ。……おう、じゃあな」

手短に会話を終えたジッポ。通話終了と共に再度舌打ち。

「副業？　……いい加減、何やっているのか教えてよ。いっつも怪しい会話してるじゃんジッポ」

「怪しくなんかねえよ！　至って普通の商売だって！　全部お前の偏見だぜ雪？」

二人の気持ち対しては申し訳ないが浜夜は水を差ことにする。真昼間から酒を飲むことへの抵抗と、今自分が気にかかっている一つの事柄のためだ。

「悪いけどジッポ。僕はアオイが戻ったら、行く所があるから――」
「糸目。言っておくが呂旛はしばらく目覚めんぞ？　命に別状はないだろうが、ヤツの力を考えると――そうだな、面会が出来るのは早くて今日の夜くらいか」

流石と言っべきか、テマリに見事に先回りをされる。しかし、あ

れだけの傷を負って——あと六時間、七時間のうちに言葉を交わすことが出来るようになるとは、妖怪の生命力には目を見張る。

それを聞いてジッポの口がにんまりと歪んだ。なぜかテマリも楽しげに目を細めている。

——まだまだ日は高い。

「なら決まりだな糸目。お前は固すぎる、少しくらい人生楽しみめ朴念仁」

「あのね！ 忘れたのかテマリ？ 昨夜だってホームレスが集団で消えているんだぞ。まだ騒がれていないようだけどそれも時間の問題だ。大体お客さんだって来るかもしれないのにお酒なんて……」

「客なんて全然来ないじゃん。私が正式に事務所の看板作って、名刺も作って一年経つけど、その玄関が開かれたの十回あったかどうかでしょ？ マイナーなんだよね、うちの事務所。コアな人達の間では有名だろうけど、一般人はまず知ることはないもん」

……急所を突く雪。これには浜夜も言い返すことは出来ない。

妖怪や霊とこれだけ触れ合っておきながら、テレビや雑誌の取材など一度も申し込まれたことがない。積極的に売り出していないのも確かだが、正直少しだけ寂しく、虚しい面もあった……

「なら、決まりだな」

肩にテマリの細い腕が回される。反論の槍を全てへし折られた浜夜には、肩に圧し掛かってくるその誘惑を退ける武器がない。雪がテマリを蹴っ飛ばし始めたその傍らで、思わず頭を抱える。

女二人が楽しくお喋りを始めた最中、ジッポがそつと浜夜へと歩み寄った。

「……これで完全に仲直りだ。テマリにも色々あったみたいだし、良いんじゃないのか善？ 酒は、昼間っから飲むのは自堕落ってイメージはあるが、人をくつつけ合う時に最も有効なアイテムであるのも確かだ。お前はここのリーダーなんだ、皆の調和を図らないとよ」

サングラスの奥から優しい眼光が光った気がした。囁きにも等し

いその声は自分の心に染み渡っていく。こんな、人の心情に疎いリダーには優秀な補佐が必要だ。それは何人いても良い。未だ乾かないジッポの頬を見つめながら少しだけ考える。だが結論はすぐに出了。浜夜善ともあるう者が、今更まともぶらなくても良いではないか。

「雪はお酒ダメだからね」

その一声で案は可決された。

雪が喚き、テマリが勝ち誇ったように笑った。

これが異路色系目相談所。寄る浜なく集まった者達は、しかし深い絆で結ばれる。常識外れの仲間達による馬鹿げた行動。

途中でアオイが合流し五人の饗宴が続いた。テマリの予想通り、やはり呂旛はまだ目覚めないらしい。ここ数日、メンバー内で一番睡眠から遠ざかっていたアオイは眠たそうに報告すると、一時間もしないうちにイビキを掻いてしまった。だがその寝顔はどこか満足げだ。ジッポの下手くそなストリートダンスが始まると、浜夜はそつと抜け出してアオイのための掛け布団を取りに行く。ちなみにアルコールは飲んでいない。後の、車の運転を考え摂取を控えたのだ。

「糸目」

乱痴気騒ぎを遠くに、押入れに手を入れた浜夜に声がかかった。

テマリだ。

片手には自分用のビール缶を。もう片方の手には――炭酸飲料の缶を持っている。

「今日は迷惑かけたな。すまない。……後でチビ女にも謝っておくよ」

謝罪のわりに、その顔は朱を帯び目は楽しげだ。

――それで良かった。テマリがどれだけ心の優しい妖怪か、自分も、きつと雪も知っている。

押入れから手を放し炭酸飲料を受け取る。プルタブを開けてテマリのそれと軽くぶつけ合わせた。

「良い仲間だな。……皆、心より結ばれている。……年のせいかな、

酒の魔力か、この温かな暖が少し羨ましい」

どこから取り出したのか、テマリはタツパに入ったぬか漬けをポリポリと口に始めた。

——この猫又も、すっかり馴染んでいる気がする。

「テマリは——」

愚問が口から飛び出そうになった。彼女は「願いを叶える店」の調査で自分と一緒にいるだけだ。それが終わったら——また元の場所へ戻ってしまうのだろう。おそらく呂旛の元へ行く時が、行動を共にする最後だ。その後始末が終わったら——解散。

彼女は言っていたではないか。人は人のままで。妖怪は妖怪のまま生きなくてはならない。

生まれながらに迫害され、寂しい孤独を味わった彼女を理解してやれる仲間はあるのだろうか。

——テマリを、寂しそうと感じるのは思い上がりだろうか。

ビール缶が勢い良く目の前に差し出される。躊躇う。……だが自分には口にすることは出来ない。

だから彼女は言った。ただ一言。

「ヒヒヒ。今度飲む時は、お互い酒でありたいものだな」

その約束に胸をときめかせる自分は青二才なのだろう。

でも、どんな形であれ約束があると言うことは、再び会う理由に値する。

人も妖怪も、喜怒哀楽に支配されるその心の在り方は同じだ。

妙な共感。

せめて別れの時は、自分の作った最高のぬか漬けを渡してやろう。

電子タバコがないと、どうも落ち着かない。煩惱を振り払うかのよう腕立てに専念する。

一人で取り残される宴会ほど興醒めするものはない。四つの掛け布団は寝息によるオーケストラを奏でていた。話し相手もタバコもない自分は、音を立てずに運動するくらいしか時間の潰し方を知ら

ない。既に空は暗くなっている。期待ではやる心を落ち着かせるように浜夜は運動を加速させていった。

最初に目覚めたのは流石と言うべきか、異路色系目相談所助手の雪だ。どうやら携帯でアラームを設定していたらしく、夜の七時きっかりにそれは作動した。

彼女はアルコールを飲んでいなかった……はずである。

今回の睡眠は……場に酔ったのか、蓄積された疲労の起こした結果……のはずだ。

物音に反応したのか、次々と掛け布団が払われていく。深酔いは誰もしていないようだ。

「……良い時間だな」

テマリの一言で皆の顔が変わった。――遊びは終わり。ここからは再びプロとしての時間だ。

「あれ？ ジップも来るの？」

雪とテマリ、アオイはともかく、その厳つい顔がバンへ乗り込んできた時、浜夜は素つ頓狂な声をあげてしまった。サポート役のジップが自ら同行するのは珍しい。

「今回の件は色々あったみたいだからよ。締めは俺も参加するぜ。何、どうせ事務所の電話なんぞ鳴りやしねえよ」

「……本当、いい加減な相談所だな」

苦笑交じりのテマリに浜夜を含めた全員が心の中で頷く。

バンはテマリを加えたメンバー全員を乗せて走り出した。太陽がその姿を潜めると、それを待ちわびていたかのようにネオンが街で輝き出す。煌びやかながらも、どこか低俗な人工の光が遠くで踊っている。アオイの指示に従い、浜夜は猥雑な空気が蔓延るその街の中心部へと車を走らせて行った。

驚いたことに、呂旛が収容された場所は歌舞伎町の繁華街、雑多な店がひしめく一角にあった。自分と雪はともかく、真つ当な人間と真逆の雰囲気醸すジップ、街の多くに顔が利き上半身裸のアオ

イ、怪しさ爆発の外見テマリ。これだけの個性溢れるメンツで夜の歌舞伎町を歩くわけにもいかない。結局車を降りたのは自分と雪、テマリの三人だ。車の中で、アオイが携帯でどこかへ連絡を取っている。おそらく、自分達が今から行く旨を告げているのだろう。

人ごみを縫うようにして脇へ脇へと入って行く。テマリの服装は否応なしに大勢の目に止まる。しかしその男達は確実に洗練されていた。白いスーツに身を包み、明らかに堅気とかけ離れたオーラ。武人を思わせる顔の中年二人は、自分達を見るや否や、まず真っ直ぐに頭を下げたのだ。その光景を見て、周りの通行人は露骨に視線をそらす。日の当たる世界に生きる人間達は闇を嫌う。テマリへの視線がやんだ。

「お待ちしておりました。こちらです、どうぞ」

明らかに裏口と分かる銀の鉄扉が開かれる。剥げかけた茶色で彩られたコンクリートの建物。青いポリバケツが幾つか並んでいる所を見ると生活臭は感じられる。

「突き当たりから三つ目の扉がそうです。……失礼ですが、他の扉は絶対に開けないで下さい」

閉じ際に妙な言葉が耳に届く。三人が中へ入ると扉は後ろで閉ざされた。

疑問を返そうかと一瞬思ったが、すぐさまその考えを打ち消す。アオイが話をつけたこの世界は、おそらく必要以上の物を見ようとしたりその目を潰される。彼等も無駄口は叩かず仕事を行っている、ならば自分達もそれに従うべきだ。タイル貼りの床を足早に歩き、天井から吊るされた薄暗い照明を頼りに奥へと進む。三人共無言だ。……明らかに、普通の住居や店と思えない造り。まるで刑務所内の囚人部屋のように、細長い廊下に頑丈そうな鉄扉が点々と付けられている。

目的の扉に辿り着く。

取っ手を握る。――鍵はかかっていない。

顔を見合わせる。雪は頷き、テマリもサングラスを外した後首

を縦に振った。

開く。

音なく開く扉。
——浜夜は中の光景に啞然とした。

中央にベッドが一つ。それは左右から幾つものテレビモニターを向けられている。オープンレンジを思わせる鉛色の機材が滑車付きの台の上に乗せられ、そこから触手のようにケーブル、ポンプ、チューブ等がベッドへ伸びていた。点滴台、心電図モニター、銀の皿には無数の注射器。

病室を思わせるのはそこまでだ。

窓一つない無機質な部屋、そのベッドの主は言わずともがな呂旛だ。どうやら腕も耳も復活(?)したらしい、両手両足を伸ばし仰向けに寝かされている。

その四肢は拘束されていた。各部位に三本ずつ、点滴針に交じつて黒金の鎖が巻きついており、よく見ると首輪さえも付けられている。

殺しはしない。だが生きる者へ無条件に与えられるはずの自由も人権もない。

どうやらここは、そんな部屋らしい。

「~~~~~!!!!!!」

第一声は悲鳴だ。鎖が揺れる。呂旛はテマリを見るなりその顔にありありと恐怖を宿らせる。笑顔の仮面はどこへやら、あの時の、心へと染み込まれた闇は未だ晴れることなく広がっているらしい。

何はともあれ、大きな声で喋れる元気はあるみたいだ。

「む？　よく分からね。回復したお前ならそのような鎖、いくらでも破壊できるだろうに。どうしてそのような格好で大人しくしている？」

呂旛からの返答はない。引きつった顔でテマリを凝視するだけだ。浜夜には何となくその理由が分かった。既に呂旛は全面的に降伏を願ひ出た。そしてここから勝手に出て行ってしまうてはテマリの機嫌を損ねる。だから彼は——待っていたのだらう、テマリを。そ

れでも悲痛な叫びが漏れてしまうのは、もはや本能的なものに違いない。

雪は——口を真一文字に結んで何かに堪えている様子が見えた。呂旛が憎い、しかし自分にも責任があるため大仰には物を言えない。そんなことを考えているのだろう。

浜夜、雪、テマリ。からかいの種にした者がこぞって押し寄せてきている。

呂旛の心臓は如何なる鼓動を奏でていることか……

「そんな目で見えるな……。謝るつもりはないが、私も……。少しやり過ぎたとは思っている。ただお前に聞きたいことがあって来ただけだ。この会話が終わったら、どこへ行くなり好きにしろ」

「分かった、分かったよテマリ。何でも答える、だからもうやめてくれ——」

三人はベッドの横に立つ。困ったように後頭部を掻くテマリと、悲愴な顔で懇願する呂旛。滑稽な絵ではあるが、それでも会話は成り立つようだ。溜息交じりにテマリが口を開いた。

「人から金を取り——」

「やめる！ もうやめます！ もう金輪際ボロい商売なんてしない、店はたたむと約束します！！」

言葉を言い終わる前に呂旛がそれを継ぐ。呂旛とて力ある妖怪だ。それがここまで平身低頭の如く縮こまるのだから、あの時のテマリの方が如何に常軌を逸していたかを改めて知る。

突如、テマリが浜夜へと顔を向け顎を引いた。

一瞬遅れて意図を理解する。お前の用件を告げる、とのことだろう。テマリ本来の用事は今の一言でもう片付いてしまったのだ。

誰にも気づかれないうちに深呼吸をする。雪も、テマリでさえ自分の動向を窺っている。ひょっとこは彼女にとっても素通りできない案件と化しているのかもしれない。代々木公園での会話を思い出す。力を貸してくれないだろうか、そんな都合の良い考えが頭をよぎった。

「呂旛。君は、ひよつとこ達のお祭りについて一体何を知っているんだ？」

あのテマリでさえ、生命の種として圧倒的な力を誇る猫又でさえ、危険であると言い放った悪夢のお祭り。お姉ちゃんが消えて、ホームレス達が消えた。連中の目的さえも自分は知らない。なぜ……お姉ちゃんを消した？　そもそもあの般若は何をしたいのだ？

「ひよつとこ……おかめ……般若。お祭りを思わせる、異形の者達の集会……のことですか？」

「そうだ！　知っているんだな！？」

「いえいえ、私は何も知りませんよ！　貴方が追っている者には何の関わり合いもありません！」

「呂旛……！」

テマリが吠えた。呂旛が身を竦めようとして鎖が鳴った。

知らないはずがない。……たった今、呂旛は自分で口にしたばかりだ。ひよつとこ、おかめ、般若。それにあの店で、自分を食ったかのような物言い。思わせぶりの発言の数々。

そんな自分の表情を読み取ったのだろう。呂旛は泣きそうな顔で必死に弁明を試みる。テマリと自分の顔を交互に窺い、悲痛な声をあげた。

「テマリ！　忘れたのですか！？　私はカラス天狗！　私のような若輩者でも、多少の神通力は持ち合わせております。完全にはいきませんが、人の心を読み取るのは十八番の妖怪ですよ！」

「うん！？　……あー……あーあー」

意表をつかれたのかテマリの顔は完全無垢だ。やがてそれは間の抜けた棒読みの声と共に納得で彩られる。その様子を見て何となしに理解したのだろう、雪が鋭い声でテマリに詰め寄った。

「……おい、痴女。私達、そんな話何も聞いてねえぞ……？」

「ん……ん……」

数百年を生きた威厳はどこへやら、テマリは気まずそうに視線を動かし始めた。

「私の店にひよつとこの面が掛けられていたのは偶然です！ 他の品物を見ただしょう？ ただの古臭い一商品です！ そこへ貴方が、並々ならぬ想いで面を見つめていたので……煽つたに過ぎません。そちらの女性の想いも勝手に拝見し、利用しただけ！ 愉悦のためだけの行動で他意はない。申し訳ありません！ もう二度と致しません！！」

呂旛は一気に捲くし立てると、制裁を怯えてか震え始めた。

浜夜の目にそれは映らない。

——おかしい。

その説明では何も筋が通らないのだ。

記憶を遡る。始まりはいつも夢。何度も何度も繰り返し見る夢。その夢に変化が起きたのは——呂旛の店に行き、その直後だ。気を失った自分は夢を見た。しかしそれはいつもと異なる、妙に肉付けと実体を感じるリアルが交じった夢。そこから目が覚めたら代々木公園が一変していた。

十数年と見続けてきた夢が変化した日の、境となつたのは呂旛なのだ。あの日起こつた出来事と言えば、背中 of 傷を除けばそれくらいだ。テマリが原因かもしれないとも思い立つたが、もしそうだとしたら、テマリを連れ帰り、ぞうりで顔を蹴られたあの晩に変化は起きていたはずである——

なぜ呂旛ではないのだ？

浜夜の顔から失望と懐疑を読み取った雪が、反射的に呂旛に手をかけようとする。だがそれを止めたのはテマリだ。怯えて埋め尽くされている天狗に、これ以上追い討ちをかけたくないのだろう。誰の目からも、呂旛が嘘をついているとは思えなかった。

分らない。

呂旛はひよつとこ達とは何ら繋がりはなかった。

では、彼等はどこから現れた？

何を機に現れた？

思考が渦巻く。その中心に飲み込まれていく。出口なき迷宮の扉

数は無限だ。ふりだし以前に戻された気がする。虚無が体を支配する。

携帯が鳴った。

沈黙という名の気まずい帳が降りたこの部屋で、その無機質な着信音は全員の体に電流のようなショックを与えた。どうやら自分のズボンのポケットから鳴っているようだ。今それどころではないとの思いと、謎に行き詰った憤りから、電話を切ってしまう衝動にかられた。僅かな逡巡。しかし、携帯に表示された名前を見てその考えは一挙に霧散する。

山田慶介。

アオイである。先程別れ、今も車の中で待機しているはずだ。わざわざ電話などかけなくても、すぐに会えるであろうに……

緊迫感が胸を圧迫する。

つまりこの用件は、一刻の猶予も許さないことを意味する。

「もしもし、アオイ？」

「善君！！」

声が同時に重なる。普段のアオイからは考えられないくらい抑制のない声だ。緊張と恐怖と混乱と……様々な感情が混じっている。雪もテマリも、その只ならぬ事態を理解したのか、電話越しに聞こえてくる声に黙って耳を傾け始めた。

「善君！ 大変だ、すぐに外に来て！！ これ……おかしいよ！？」

これ、とは何のことか。アオイは一体何を見たのか？ 不明瞭な言葉がもどかしい。

「アオイ、落ち着いてくれ。一体何があった？ これから戻るけど、そこで――」

「善！！」

割り込んできたのはジツポの声だ。有無を言わさぬ迫力と力強さは変わらぬ。

しかし――そこにはやはり、恐怖が見て取れた。

「すぐに戻って来い！！ 祭りが……いや、これは祭りなんてモン

「じゃねえぞ!!」

電話が切れた。意図的にジッポが切ったのか。

呆然とする浜夜の耳で、間延びした電子音が小馬鹿にするように続く。

話していてもラチがあかないから直接来い、とのことだろう。

ジッポは——言った。

浜夜がその単語に敏感に反応するのを承知で言った。

心を掻き乱される不快な三文字。

祭り。

駆け出す。背中に声がかかるが、もはや構っている暇はない。

早鐘を打つ心臓。沸き立つ血液。獣のように浜夜は疾走する。その瞳が負の感情で染まった。

狭い通路を走り抜け、出口である鉄扉を乱暴に解き放つ。

浜夜達を案内した白スーツの男達が背を向けたまま立っていた。

だが、物々しい音を立てて登場した浜夜には一顧だにしない。

違和感。

訓練され、裏の世界の場数を踏んでいると思わせる二人が、揃って顔を右往左往させているのだ。挙動不審者のように動きが忙しい。彼等は空を見ていた。見上げた顔を彷徨わせている。

つられ目を向ける——

第九話

固まった。

浜夜の瞳孔も、体も、その瞬間全てが凍りついた。

背後から近づいてくる足音。雪とテマリと——呂旛も来たらしい。大の大人三人が阿呆みたいに突っ立って空を眺めている光景。不愉快より不可思議が先行したようだ。余談を許さぬ顔で各々はその視線を追いかける。

夏の夜空。

星の見えぬ墨色が果てなく続いている。

だがその視界を遮る物があつた。白と赤のコントラスト。折り目のついた球体のような形。中では橙色の明かりが揺らめいている。提灯だ。

一つではない。建物から建物へロープが張られ、それをビッシリと埋め尽くすかのようにぶら下がっている。ベランダ、店の看板、屋根、電信柱、辺りを見渡すと、至る所に提灯は吊るされていた。無差別だ。設置した者にまともな思考があつたとは思えない。他人の迷惑を考えず、あらん限りの提灯を、とにかく置ける所に置いた。常識を逸脱したそんな考えが窺える。

言つまでもない。

こんな異様な光景は、建物に入る前は存在しなかった。

耳に音色が飛び込んで来た。

克目。

視覚、聴覚……五感に加え、浜夜の体内全ての器官が開かれる。笛の音だ。

それだけではない。甲高い響きに混じり、地の底を揺るがすような、巨大な怪獣がその足で一步一步大地を踏みしめているかのような、破壊音を思わせる轟音が一定の間を持って空へと昇っている。それが何の音か……考えるまでもない。千回は聞いた音。

騒がしさが耳についた。今度は人の声だ。

路地を駆けて通りへと躍り出た。

そこに――彼等はいた。

適当に取り付けられた無数の提灯が、気の狂うような世界の演出を際立たせる。

奏者の見えない笛の音。腹の底を直接打ちつけるかのように鳴り響く和太鼓。

主役達が世界を跋扈する。

わっぴを着込んだひよつとこが往来の真ん中を我が物顔で行進していた。果てが見えない。何十人、何百人と列は奥から続いている。水玉模様のずきん、突き出た唇。面を被った阿呆達は、自らの存在意義を示すかのように滑稽に踊る。腰を曲げ、手を不恰好にくねらせ、見る者の笑いを誘うような舞いを集団で繰り広げながら進む。中にはおかめも交じっている。いずれも一言も言葉を発さず、ただただ音楽に合わせて踊り続けるだけの存在。

中心には高くそびえるやぐら。木組みで作られたその塔に君臨するは一人のひよつとこ。和太鼓を一心不乱に叩き続けている。

近づいてくる集団。悲鳴があがった。

群れの奥からだ。よく見ると、行進には僅かな揺らぎがあった。

主軸は変わらず、一切合切踊りに専念するひよつとこ。だが群れの脇を踊るひよつとこ達は、何かを探し求めるかのようにその面を右へ左へと向けていた。数人のひよつとこの踊りが加速する。二倍速のように早まり、その動きを維持したまま一人の若い女性に歩み寄って行った。悲鳴はその女性のものだ。

不気味。

啞然とする浜夜の視線の奥で、ひよつとこが女性に抱きついた。

もはやただの変態にしか見えない。

人間の変態であればまだ救われた。彼等は存在そのものが異質だった。

助けなくては、と浜夜が逡巡している間の出来事だ。抱きつかれ

た女性の輪郭が揺らいだ——気がした。女性はひよつとを引き剥がそうとしている。……そのグレーのスーツが一瞬透明になり、空気に溶けていくように見えた。

浜夜はワケも分らず目をしばた。

ひよつとこの腕の中には何もなかった。走り出そうとした姿のまま浜夜は固まる。

消えていた。手品のように。抱きついた女性など初めから存在していなかったかのように。

「……何だよありゃ」

慄く雪の言葉は隣から。いつの間に追いついていたのか、浜夜同様一部始終を見ていたようだ。いつもならばお化けは怖い、などと言い出す彼女にその言葉は出てこない。恐怖より優先する何かがあるのか、そもそもこれは霊の類ではないのか——

「なあ、浜夜さん！ これ……何なんだよ！ 浜夜さんが……浜夜さんが時々話してくれた、ひよつとのお祭りって、まさかこれなのか！？」

言葉は更なる悲鳴と、それに連なる怒号に飲み込まれた。祭りではない。

阿鼻叫喚図。夜の歌舞伎町はパニックに包まれた。ただでさえ人がひしめく時間帯。そこへ押し寄せた阿呆の群れ。浜夜達が目撃した女性の例は至る所で見受けられていた。ひよつとこやおかめは人へ近づいては抱きしめ——その被害者の姿を宙へと消していた。

若い男がひよつとを乱雑に蹴飛ばした。蹴られたひよつとにはよろめく動きさえもない。反動でバランスを崩したのは男の方だ。痛覚さえ感じられない阿呆なのか、そのまま男に覆い被さり身の毛もよだつ手品を往来に披露する。

楽しげな——実に楽しげな音色が夜空に木霊する。日本伝統の胸が弾むような音楽。

人の悲鳴がそれを彩る。突如始まったデタラメな祭りは淀みなく進行していった——

「善、無事か!!」

ジッポとアオイが人の流れを突っ切って駆け寄って来る。その顔は焦燥感で満ち溢れていた。よほどのことでないと取り乱さない二人が揃って危機をあらわにしている。雪が尋ねる。

「一体何があっただよ!? こいつ等、どこから湧き出て来たんだ!？」

「僕達にもよく分からないんだ。突然さ。演劇の幕が上がったような感じ。気づいたら提灯が至る所に現れていた」

「とにかくここはやべえ! 早く車まで戻るぞ!」

雪、ジッポ、アオイの会話をよそに、ふと気になって浜夜はテマリを見た。いやに静か——冷静だと思ったのだ。何とも居心地の悪そうにしている呂旛の横で、テマリは——外界に晒されている猫目を細めていた。いつになくその表情は険しい。頭の中で何かを組み立てているようにも見える。

浜夜の視線に気づいたわけではないのだろう。それくらいの集中力であると見て取れた。

だが——テマリはゆっくりとこちらを向いた。

正確に言うなら、浜夜にはない。

浜夜、雪、ジッポ、アオイの四人を一瞬、射抜くような視線で貫いたことを感じ取る。

それに一人気づいた浜夜は心を震わせた。

込められていた感情に啞然とする。

テマリは……

確かなる敵意を持って自分達を睨みつけたのだ。

「浜夜さん、何ボケツとしているんだよ! 早く!!」

「あ……うん」

我に返る。自分を引っ張る雪の手を強めに握り返した。びつくりしたような雪の顔をよそに、そのまま駆け出す。怯えている? 何から逃げている? ひょっとこ達のことか頭から消え去った一瞬。その心に叱咤と激励を送る。今は……目の前のことに集中しなくて

はならない。

夢は開かれた。

連中は最初代々木公園に現れ、遂にはこの歌舞伎町までも侵食し始めたのだ。

理性をなくした人間は一つの出口に殺到する、と聞いていたのは本当のようだ。人外の異空間と化した魔窟から逃れるように、人々は通りの出口へと駆ける。

通りを避け横道を走りながら、半ば流されるように逃げる浜夜は疑問を抱いた。

待てよ。

なぜ逃げる必要がある。

「善君!？」

ただ一人、皆に逆らって足を止める。

体が震えた。今度は――武者震いに等しい、高揚を思わせるサインだ。

ここは――きつとここには――

「――お姉ちゃんがいる」

その一言で皆には伝わったようだ。

浜夜善が何を追い求めてきたか、なぜ人外を専門とする仕事に就いたか。異路色系目相談所の原点とも呼べる思い。

今この空間は――あの日の神社に繋がっている。

時を越え、場所を越え、彼等は姿を現したのだ。

そこへ落ちる白い影。

――最初にその気配に気づいたのはテマリだった。次いで呂旛。妖怪二人が振り返る。その仕草に余裕はなかった。ならばおそれく……二人は遅れを取ったのだ。

四人もそれにつられて背後に視線を向ける。

浜夜達がたった今走ってきたばかりの方向。

和を表現する音楽と、人の奏でる悲鳴は酷く場違いに重なる。

おそらくそれを……作り出した張本人。

蜘蛛の巣のように張り巡らされた提灯に、一斉に強い炎が宿る。
舞台背景、音楽、ならばシナリオもその手中に握っているのだから。
うか。

場違いなはずの白一色で覆われた袴は、この壊れた世界においても何ら違和感はない。

一人の般若が、抜き身の日本刀を携え佇んでいた。

テマリが即座に臨戦態勢を整える。言葉も交わさず、浜夜達に注意も促さず、まるでただの動物の本能仕草のように、何よりも優先して彼女は十本の刃を眼前に晒したのだ。

その一連の流れを見守るまでもなく、浜夜は目の前に現れた生き物が狂った生命種であることを理解していた。呂旛ともテマリとも違う底の見えない闇。頭と胸が掻き乱される不快な感覚。
気づく。

般若に足蹴にされている一人のおかめに。

白い面に覆われ、そこに隠された素顔を窺い知ることとは叶わない。
こちら側を見つめている。

——訂正。妙な確信を抱く。

おかめは、浜夜善を見つめている。

思考より先に行動が優先された。全ての物事が意識の奥に押しやられた。あらゆるものを忘れ去る。人も、妖怪も、仲間も。歌舞伎町も、提灯もひょっとこも。

全力でおかめへ駆け出した。

背後で痛切な声が木霊する。

たった一つのもの。

浜夜善の原点。

生きる目的。人生の終着点と言っても過言ではない。

これは夢ではない。

ならば現実だ。

ならば——手が届くはずだ。

泡となって弾けた幾千幾万の夢。

幾千幾万の死。

その全ては、今この時この瞬間のため——！！

「お姉ちゃん！！！」

二つの力が、瞬き一つの間で交じり合った。

浜夜は知る由もない。般若の日本刀がほんの僅かに揺らぎ、白銀が煌いたことを。

首に縄が巻きつけられていたかのようなうだ。浜夜の全力疾走は、蛙の鳴き声のような呻きと共に強制停止させられた。上半身は後退し、下半身だけはそれでも進もうとする愉快な絵。

テマリは浜夜の首根っこを掴み、無造作に後ろへと引っ張っていった。

宙へと投げ出される。額から薄皮一枚が剥がれ落ち、鮮血が糸を引いた。

冷や水を被せられたかのように頭に思考が戻ってきたのは、床に尻をついた時だ。

「馬鹿者が！ 餌に釣られる魚かお前は！！」

自分のために一旦閉じていたのだらう、テマリの右手から爪が再び飛び出る。

その緊迫感に満ちた声と額に刻まれた印が、ようやく、自分がたった今攻撃された事実を心に教えてくれた。

無我夢中になって、般若の動作がまるで見えていなかった。いや

……おそらく冷静な自分でも見切るのは不可能だったのではないだろうか。般若の日本刀の位置は、現れた時から何ら動いた様子はない。つまりそれは——人知の及ばぬ動きが行われたことを示している。

テマリは威嚇するように爪を構える。般若は変わらず日本刀を垂らしたままだ。

その対峙に水を差す。

無粋とは思わない。今にも斬り合いが始まる予感。その前にどうしても知りたいことがあった。

「お前は……一体何者だ。どうしてお姉ちゃんを攫った!!」

重苦しい重圧が場に圧し掛かる。嵐の前の静けさ。風に乗って流れてくる和音楽器と人の叫びが遠くへと感じる。般若は——答えない。動きも一切ない。まるで置物のようだ。

踏みつけられたままのおかめからも言葉はない。

お姉ちゃん……なのか？

聞きたい。でも、もし違ったらどうする。追い求めてきた答えがまた間違っていたら？ 期待と不安が入り乱れ、結果として浜夜は般若への疑問を優先させていた。

テマリもやはり思う所があったのだろう。関東を見守る妖怪としての立場か般若を問い詰める。

「貴様は誰だ……。私とてそこそこ生きているつもりでいる。だがこのような……ひょっとここで世界を埋め尽くすような力を持つ妖怪など知らんぞ。和の面、和の音。海を越えて来訪した妖怪でもあるまい。一体何が目的だ。なぜ人を消す!!」

般若は答えない。

おかめも——答えない。

口が利けないのだろうか。

だがどのような理由であれ、意思の疎通が図れなければ争いを回避することは出来ない。もっとも原始的な方法でしか自分の言葉を相手に伝えられない。

悲鳴の数が増している。

この踊りは歌舞伎町だけに留まらないのか、ひょっとこ達の向かう先は新宿の街中だ。

テマリの足が沈んだ。バネのようだ。

呂旛を刻んだ時は、見て取れるような攻撃の動作はなかった。

ならばこれは般若に対する最後の警告。あからさまな攻撃態勢は最大の威嚇とも成り得る。

それとも——先程の一撃を受け、テマリは何かを感じ取ったのか。たとえば、自らの脚力をフルに生かさなければならぬほどの危

機感を持ったのか。

般若は——それでも動かない。

和太鼓が一つ。

始まりの合図。

テマリのかざす爪に絶対なる破壊の意思が宿る。

浜夜が理解できたのはそこまでだ。呂旛の時と同じ、おそらく次に自分が知覚した時には般若は崩れ落ちている。

なのに。

気づけば十の刃が根こそぎ打ち砕かれていた。

展開が進んだことに気づいたのは、地面に鳴り響く甲高い物音が耳朵を打った時だ。

誰もが眼前に起こった現実を頭の外に追いやった。理解の及ばない物語。

混乱をきたす四人。浜夜、雪、テマリ、そして特に呂旛。

今朝、音もなく天狗を切り裂いたはずの神速の爪が、その真逆の運命を辿ったのだ。

赤い爪が指の数だけ地面に散らばる。

テマリと般若の距離は五メートルは離れている……。

手品と思われては適わない。そう言わんばかりに、般若はこれ見よがしにゆっくりと日本刀を元の位置——すなわち切っ先を地面へ向けて垂らす。

言葉はない。だがそこに意思はあった。日本刀は易々とテマリの武器を切り取ったのだ——

背を向けるテマリの表情は見えない。

それでも……再度その爪が十の刃の形を形成するまでに一瞬の間があった気がした。それはもしかしたら……テマリの動揺を表していたのではないだろうか。

「テマリ——！」

猫又は答えない。答える余裕もないのか。その背に狼狽を感じたのは気のせいではないだろう。

戦闘に関して圧倒的な力を誇ったはずの彼女が、更なる力を前に圧倒された。

僅かな隙さえも見せたことを悔やむように、それでもテマリは再度臨戦態勢を整える。

既に自分達の命が敵の手中にあることを、この時ようやく感じ取ることが出来た。般若と自分との距離は五メートル以上。だが賭けても良い。それでもあの般若はものの一秒で、浜夜善の首を胴体から切り離すことが出来るだろう。

白袴の腕が動いた。

生き血を吸えることを期待しているように怪しく輝く日本刀を起こし、その切っ先を固定させる。

銃口を定めるように、それはテマリへと向けられた。明らかなる宣言。

それを済ますと、今度は真上、天へと刀が向けられる。

「呂旛！ 糸目達を先導して行け！！ 早くこの場を離れろ！！」
敗北宣言だった。

般若が下す死の宣告に対し、テマリが用意した手段は逃走。

動けない。動いた瞬間、その人間は命を消される。そんな根拠もない未来が思い描ける。

それでもテマリは行けと言う。

この場に残ることは確実なる死を意味するから――

日本刀はギロチンの刃。

振り下ろされた瞬間、おそらくターゲットと定められているテマリは――

「早く行け！！」

怒声が木霊した。

般若の日本刀が無慈悲なる死を内包し振り下ろされ――

「テマリ――！！」

そこで異変が起きた。

白銀が止まる。それだけでは留まらず、突如として般若が片膝を

つき苦しげに唸り始めたのだ。日本刀を地面に突き立て、それを杖代わりに自らの体を支える。頭痛に苦しむ病人のように、空いた手で額を押さえる。

蜃気楼のようにその姿が揺らぐ。

般若だけではない。その足元のおかめも、大通りを行くひよつとこ達も、異形なる者達が霞のように薄れていく。

本意の元でないのは明白だ。般若の殺意は苦しみの最中でも決して消えることはない。

やがて――

浜夜達が言葉もなく見守る中、水に溶ける砂糖のように白い袴が霧散していく。

音もない。断末魔もない。

鬼の形相がその首を上げる。

般若も、おかめも――

最後まで浜夜を見つめていた。

笛の音がやんだ。

気づけば、狂ったように設置されていた提灯もその姿を消している。

般若もおかめも、ひよつとも――消え去った。

白昼夢。

現実世界に取り残された面々は、あまりの展開について行けず立ち尽くすしかない。

一つ分かったことは……危険が去ってくれたとのこと。

テマリが爪を仕舞う。

そして――ぞうりでアスファルトの地面をぶち抜いた。派手な音は鳴らない。大小の破片が火花のように飛び散った。

苛立ち。浜夜は初めて見る。テマリが感情のままに八つ当たりをするのを。

背が震えている。恐怖とは思えない。

対峙して一分足らず。

それだけでテマリには相手の実力が分かってしまったのだろう。五百年の時を生き、万物をも超越した猫又が……偶然命拾いをしたのだ。

それは如何なる屈辱を心に植えつけたことか。

「呂旛」

振り返る。その顔には既に怒りはなかった。個人の感情を消し、統括者としての顔を見せる。

「サトリ達に大至急連絡を取ってくれ。緊急事態だ。人の記憶を消す。それも大量に」

無駄口はない。呂旛はただ一言頷くと、すぐさま路地を駆け抜けて行った。

「ちくしょうあいつ等、代々木公園の次は新宿かよ！ あれって浜夜さんがずっと追いかけてきた連中だろ！？ 突然現れて突然消えて、おまけに人まで襲いやがった！」

「テマリよ。消えちまった人は……死んじまったのか？」

その問いに対し思考に浸かったのは一時だったらしい。テマリは、はつきりと答えを返した。……気のせいだろうか、言葉がいやに沈んでいるような感じがする。

「死んではいない。飲み込まただけだ。推測だが、おそらく次に連中が現れた時、自分の意思とは関係なくあの踊りの列に加わるのだと思う。人を増やし領土を拡大し、また人を増やし領土を拡大する。戦の常套手だ。——それより」

声のトーンが下がる。

テマリの瞳が伏せられた。周りの温度が一気に下がった気がする。再度猫の目が開かれた時、そこに宿している感情に慄然とする。

暗く、淀んだ目。

テマリと向き合うように立ち尽くす浜夜達は、その顕著なる違和感に戸惑いを覚える。

「ヤツがボスなのは間違いない。対峙し、不甲斐ないザマを晒したが、一つだけ分かったことがある。祭りが始まった瞬間、そして終

わった瞬間。あまりに唐突に思えたが、そこには共通する一つの合図があった。最初は私の勘違いかとも思ったが、般若が後ろ髪引かれるような様子で消えていったのを感じた時、その考えに確信を持ったよ」

一体何なのだ。

情けないが、自分には何も分からなかった。

テマリは確かに力では遅れをとっていた。それでも、あのような混乱の最中でこうして情報を掠め取っていた所は流石だ。

「――許せ」

いやに回りくどい。

それに先から……何やら嫌な予感が頭にこびり付いて離れない。

なぜ……

なぜテマリは、敵でも見るかのような目で自分達を見つめているのだ？

「お前達の中の一人を、この場で殺す」

第十話

6

時が止まった。

笑う者は皆無。

街は未だ混乱しているのか、たまに甲高い悲鳴が聞こえてくる。

自分は……自分達はどのようなアクションを取れば良いのだろう？

お決まりの言葉を言いたい。下手な冗談はやめろよ。笑えない冗談だな。

雪が四人の中から抜きん出た。

木刀を――構えた。

女は強い。こんな時なのにそんなことを思ってしまう。自分と、おそらく他の二人も、揃って思考をミキサーで掻き混ぜられている中、彼女はいち早く状況を察したのだ。

答えだった。

「トチ狂っているんじゃないぞ、痴女。冗談は服装だけにしとけ」

「私も、今回ばかりは冗談を言いたかった」

「待つてよ！ どうしてだい！？」

アオイの叫びは自分の代弁だ。冷徹な響きで言葉を交わす二人に横槍を入れた。

だが説明はない。祭りが始まって――それが終わり、テマリは一つの結論を得たと言う。その内容が、自分達の一人に対する死の要求。浜夜の中でパズルが当てはまる。

「まさかと思うけど、僕達の中の誰かがあの祭りを呼び寄せているなんて言わないよな――！？」

自分で紡ぎ、その内容に声が裏返った。

否定してほしかった。

テマリは自らが感じたのであろう真実だけを打ち出していく。

「鼻が思うように働かないのが何とももどかしい。祭りの始まりに感じた違和感からは掴み損なったが、終わる瞬間、辛うじて敵の正体の欠片に触れることが出来た。……そこには人の情の流れがあった」

……情の流れ。

あまりに断片的な物言いだ、それは自分が感じた驚愕や恐怖等の類ではないのだろうか。

「腐っても猫又。悪いが私の鼻は誤魔化されん。——糸目、お前が追い求めたあの連中、妖怪である私達でさえその存在は知らなかった。しかし、それが……人が故意に生み出し、故意に『出し入れ』をしていたのなら、長年妖怪の目につかなかったことも納得がいくとは言えさすがに——私の背後、お前達の中の誰かからそれが発せられているのを感じた時は驚いたよ」

「——何を言っているんだ、テマリ……」

「糸目。お前はひょっとかを追い続けた。だがそれは遠いどこかを探し続けてきたわけだろう？ お前……自分の身の回りをきちんと調べたことはあるか？」

その先に存在する結論。

長妖怪は、その赤い刃のように鋭利な言葉を容赦なく、再度自分達に投げかけた。

「お前達四人の中の誰かが、あの般若をここに呼び寄せた。……誰だ。……名乗り出る。一体目的は何だ！」

浜夜が、雪が、ジッポが、アオイが……異路色糸目相談所が言葉を失った。

浜夜は他の三人の顔を見ることはしない。誰かを疑うなんて真つ平だった。

ありえない。

そもそも——

あの祭りは自分が小学生の時に遭遇したのが始まりなのだ。その

時には当然、浜夜は他の三人とは面識などなかった。それを考える
とテマリの説には少し無理があるのではないだろうか。

ならば——まさかこの自分が犯人だとでも？

誰よりもお姉ちゃんを好いており、誰よりも会いたいこの浜夜善
が？ 馬鹿げている。

テマリはそんな浜夜の心中を読み取ったかのように続ける。

いや、この老獪な猫又のことだ。もしかしたら今の一言で、四人
の誰が動揺するのかを嗅いでいたのかもしれない。

——そこまで考えて浜夜は自分の頭を殴りつけたくなる。

どうして……自分達はテマリと対峙しなくてはならないのだ？

少し前に酒を飲んで、馬鹿騒ぎをして、浜夜はそこに新しい絆を
感じていたのだ。

それは一方的な想いに過ぎなかったのだろうか——

「誰も拳手せんか。もつとも……本人に自覚がなくなるとも、無意識に
呼び寄せたとも考えられる。その場合はいくら私が問い詰めても無
意味だろうな。何しろ自分にも覚えがないのだから。——しかし、
だ」

喉元に違和感。

状況を把握したのはその次だ。

雪が驚いたように振り返る。浜夜は目の前の光景に畏怖を覚える
前に——まず現実を疑った。

瞬時に伸びたテマリの爪の一本が、喉元にぴたりと押しつけられ
ていたのだ。

「痴女、テメエ……!!」

「お前達三人にとって最も大切なこの糸目が死に瀕したとあらば、
無意識だろうが何だろうが、お前達は般若を呼び寄せる他ないだろ
う。先程なぜヤツを引っ込めたのか、そもそも連続して二度も呼び
寄せることが出来るのかも分からん。だが——」

「どうして……なんだ？ テマリ」

浜夜の声は、ただ平坦だった。

皆が虚を突かれたかのように振り向く。自分の命を消す存在が薄皮一枚隔てた向こうに存在していると言うのに、浜夜の声は普通すぎたのだ。

まるで……それは人の声でなく、永久に変化なく鳴り続ける置物時計を思わせた。

テマリが――口を閉ざす。

「どうしてこんなことをするんだ、テマリ。勝手に勘違いしていただけかもしれないけれど、僕は……テマリと仲良くなれたと思っていたよ」

その時だけ、浜夜の心の中からひよつとこの顔が消え去った。

一人で生きてきた自分。一人で生きてきた仲間。そして……テマリ。

分かり合えると思っていたのだ。孤独を感じた自分達だからこそ、通じるものがあると思っていた。人から疎まれ、遠ざけられた者達。その自分達が、なぜ刃越しに会話をしているのか。

ただ――悲しかった。

「……糸目。この街に存在する人間から、今の記憶を消すのにどれほどの労力が必要か分かるか？ 写真を撮った者もいた、電話をした者もいた。その全てを消すのだ。そうしなければこの国はパニツクに陥ってしまう。人が消えているのだ、それも大量にな。そしてその間に、私は全てを解決しなければならん。消えた人間を全て戻さねばならん」

その声はいたって普通。任務を遂行する兵士のような。歴戦の戦士がそこにいた。

それが癪に障り……出会って初めて――浜夜は意地悪を口にする。駄々っ子のように。テマリに対し、非難と失意を乗せて――

「僕達を……犠牲にしてもか？」

テマリが顔を伏せた。何を考えているのだろう。爪を伸ばしたまま、その表情を四人に見せることなく沈黙を通した。しかしそれは破られる。確かな意思と思いを言葉に乗せ、彼女は顔を上げた。

「……ああ。……すまん」

耳を塞ぎたくなるようなその言葉を受け止める。更にテマリは言葉をつないだ。それは彼女が彼女たる所以。意思の根本。心の塊を覗かせる一言だった。

「私はな、糸目。竹様から……この街を任されているのだ。他愛もない約束だった、茶飲みに交わす何気ない話題程度の。でもな。私はあの方が……いつ戻って来ても良いように、争いのない平和な街で出迎えなければならんのだよ」

そして笑った——心底すまなさそうに。一流女優以上に良く似合うその表情は反則だ。

美貌を讃えるかのようにそよ風が流れた。

——ああ、敵わない。

そんな愚にもつかないことを思ってしまう。

それくらい、テマリの顔は——

眩しかったのだ——

争いのない平和。それを作るために、誰かを生贄に捧げ血で街を洗う矛盾。

それは他ならぬ自分もやってきたことだ。清く正しくの大義名分の下に、人を脅かす悪霊や妖怪と戦い……時にはこの肉体を駆使して人を殴り、傷つけたこともあった。

自分もきつとそうだ。

お姉ちゃんのためなら……何でもしてしまうだろう。

簡単なことだ。これは言わば天秤。二人の人物をそれぞれに乗せ、どちら側が強く傾いたか。

それでも——

テマリが手を差し出した。右爪で浜夜の喉元を押さえながら、それでも左の手の平を返す。

閻魔と仏が同時に自分を誘っているかのような異世界。

彼女は静かに言葉を口にした。

「お前も——」

一際強い風が吹いた。寒い——とても寒い風。テマリの言葉は流され、浜夜には届かない。

それが終わった時、テマリから笑みは消えていた。自嘲するかのように、何やら顔を振っている。

彼女が見せた笑顔は、もしかしたら今日までの日々のプレゼントだったのかもしれない。自意識過剰になっても良いだろう。それくらい……テマリは自然と自分達に溶け込んでいたのだから。

顔から表情が消えた。先程まで差し出されていた手も既に引っ込められ——

悪寒。

雷が頭蓋骨に直撃したような、頭にヒビが入ったかのような錯覚。視界がブレる。立っていられない。膝をつく。吐き気と眩暈が体を揺らす。皆が狼狽しながら自分を呼ぶ声が聞こえた。だがそれは果てしなく遠い場所から響いているように感じる。

手。

そう、手だ。また、手だ。

綺麗な手。健康な肌を思わせる手。滑々してそうな、小さな手。違う。

自分が見た手は——明らかに異なっていた。

雪が、ジップが、アオイが自分の傍に駆け寄って来るのが分かる。しかしそれを遠くから見ている自分がいた。幽体離脱でもしているかのような他人事。

だから——見えた。

自分で自分を眺め、その中枢へと思いを馳せる。

記憶は眠っていた。

そして破裂した。

常に長袖だった。もう夏も間近なのに、お姉ちゃんはいつも長袖のワイシャツを着ていた。別に何とも思わなかった。自分は幼く、体内に巣食っていた変なモノはいなくなっても楽しい学園生活は取り戻せず、馴染めない日々は続いていたからだ。他人のことに気を

回す余裕などあるはずもなかった。

公園で遊んでいた。その日もお姉ちゃんと沢山話をした。毎日のように会っていたのだ。

自分を救ってくれたお姉ちゃん。この人がいたから日々に絶望を感じずに済んでいた。正しい生き方を教えてくれ、いつでも笑っていた。

さ、帰ろう？

夕暮れの中、お姉ちゃんが手を差し出す。

それを意気揚々と掴む――寸前。

見てしまったのだ。

お姉ちゃんの――手首に走っていた、赤い切り傷に。一つだけではなかった。

明るくない学園生活で手一杯だった自分が、お姉ちゃんのことをもつと知りたいと思った瞬間。なぜならその傷の付け方は自分も知っていたから。自ら知りたくて、本で読んだ知識だったから。

そう言えば、どうしてお姉ちゃんは毎日のように自分と遊んでくれているのか？

お姉ちゃんの友達を一度も見たことがない。

お姉ちゃんに用事があったこともない。

瞳の深遠を覗き込む。幼い自分が他人の目を見て何が分かるはずもない。

でも見た。見えてしまった。

同じ、暗い、淀んだ日々を送り、沈んだ生活、絶望を抱え、闇に、涙して――

死にたいと願ったことのある者同士。爪弾き者同士だからこそ見える、死にかけた瞳の彩。

どうして気づかなかったのだろう。

自分の中のモノを退治してくれた人なのだ。ならば自分より遥かに強い異質の力が宿っていることを意味する。

ではそんな人が、学園生活で「普通の」人間として日々を送れる

もののなか？

それが始まりだったのかもしれない。

忘れていた……

どうして忘れていた？

まだ物語は終わらない。まだだ、扉の奥に隠されたものが……ある。

それは最後の日。

やっぱりその日もお姉ちゃんと二人で遊んでいた。神社の裏手。

誰もいない無人の広場。

あの日から願っていた。密かに願望を持ち続けていた。

自分を助けてくれた人を、今度は自分が助けたい。

でもどうやって？

非力な自分には何の力もない。

だから願った。ただ願った。お姉ちゃんに笑ってほしかった。

そうしたら――

「そうか――お前だったのか――糸目」

我に返る。ひざまずいて地面を見つめていた。吐き気も眩暈もなくなっている。声を受けて顔を見上げる。

テマリが見下ろしていた。酷く――寂しげに。

取り乱した自分から何かを読み取ったのか。この猫又のことだ。たった今洪水のように押し寄せた自分の記憶を、全て読み取っていたとしても何の不思議もない気がした。

手の平。……意図的なのか、偶発的なのか、テマリが見せたそれが決定打となった。もしかしたら代々木公園の一件で自分を疑い、鎌をかけるつもりで手の平を出したのだろうか。忘れていた？

違う。自分は封印していたのだ。

子供の頃の記憶。お姉ちゃんは自分と同じなのだと知った。助けなかった。でも何も出来ない子供の自分。そして――

「……お前は救ったのだな、姉を。誹謗中傷を受けることのない世

界。誰からも後ろ指を指されない空間。子供が必死で考えた、大好きな人を守るための唯一の方法。それは……監禁か」

テマリは小波のように静かに言葉を放つ。皆は言葉一つなく自分を見つめていた。その表情は——浜夜は見れなかった。拒絶が……怖かったのだ。

過去の心が……足元からじわりと忍び寄り、浜夜の体を支配しようとしてくる。冷たい手が体中を這いずり回った。撫で回すように心を、脳を陵辱する。

——つまりは——浜夜善が子供の頃から見続けている夢。追いかけたひよつとこ達は——

「……僕が……生み出した……？」

「なるほど——例の一件以来、お前の中にあつた霊的な力は霧散したと言つたな。違う、お前はきつと、全てを使い果たしたのだ。般若を、ひよつとこを、おかめを、祭りの舞台を作るために全ての力を駆使し、あの異世界を誕生させた」

それでは……それでは、お姉ちゃんをあの世界に攫つたのは——
「そしてどうやら、お前は自分では連中を制御出来ていないようだな。おそらく無意識に連中を発動させている。ならばあれはきつとまた現れる。この歌舞伎町で人を飲み込んだ分、より膨らんで街中を闊歩し、更に多くの人を飲み込む。そうなつたら、流石に私達妖怪としてこれ以上はもう手がつけられん。糸目——」

喉元から違和感が消え……次は首筋にその刃が押し当てられた。その意味は古今東西変わらない。今度は……もはや脅しではない。人の首に武器を当てる意味は、一つしかない。

「この場でお前を殺す。これ以上ひよつとこが暴走する前に、その主であるお前を消せば、自ずと連中も消えるだろう。ずるい言い方だが、きつと……お前の大切な人間も助かる……」

自分がお姉ちゃんを閉じ込めていた？

あの日あの場所で、自分はお姉ちゃんを思い、それは……異形な力を持って具現化された？

何と言う……

何と言う……馬鹿なのだ、自分は？

日本全国、霊や妖怪を追い求め、存在しない犯人を捜そうと必死に駆けずり回って。「清く正しく」とか偉そうに掲げて――

一番そのモットーから遠い人間は誰だ。

この世界でもっとも滑稽な虚言を吐いた馬鹿者は誰だ。

「はは……は……」

乾いた笑いが零れ落ちる。

少しずつ、少しずつ記憶が戻って来る。

記憶に肉付けがされていく。お姉ちゃんの手首。自分の思い。神社の裏手。ひよつとこ。

「そうだ……。実家でひよつとこの面を見て、コイツは悩みも何もなさそうで良いな、なんて思ってた。般若の面もその時に見ていたんだ。毎年夏に神社で行われたお祭りは……何だか羨ましかった。皆が楽しそうに輪になって踊って……。ずっと皆で楽しく過ごせば、て。ただそれだけを願ってて……」

首筋から刃がそつと離れた。だが浜夜はそれを目で追うことはしない。疑問さえも持たない。心に溜まった独白を、まるで吐き出すかのように並べ立てていく。

「……ごめんな……糸目……」

それがこの世への別れを示す言葉だと気づいた時には遅かった。悲しく、優しさで溢れた別れ文句。刹那の間。顔を上げるか迷う。このまま首を落とされるべきかを迷う。迷っている間に、タイムリミットを迎えたことに気づき――結果的に浜夜は首を垂らしたまま無念の想いで最期の時を迎えた。

大きな物音。サンドバッグを思い切り叩き付けたような――

……自分の体は転んでいない。無力感と絶望感に染め上げられながらも、それは――未だ二分割されずに五体満足で存在している。

雪――だろうか。……違う。気づけば彼女の温もりを腕に感じる。今度こそ顔を上げた。

頼もしい、と思った。空っぽの心に、見たまま、在るがままの感想が飛び込んで来た。

角張った顔。夏であるのに暑苦しそうなアーマーベスト。きつとサングラスをかけている。

大きな存在の背が自分を守るかのように立っていた。

テマリは——その体を地面に預けている。

その巨躯が攻撃したことは明白だった。

「ジッポ——」

「何ボケツとしてやがる善。らしくねえぜ？」

呆れた声。——今の話の断片だけでは理解していないのだろう。

ならば今こそ全て話さなければならぬ。自分の罪を。自分の罰を。浜夜善は、その名に似合わぬただの偽善者であることを。

もう自分でも気づいていた。思い出していた。

確かに自分はお姉ちゃんを守りたかった。でも……それだけではなかったのだ。連中の存在意義はそのような高尚な理由だけではない。ひょっとこ達が人を消し、その列に加えていく流れ。皆で仲良くずっと踊っていたい。それは幼少の頃に毎日思っていた半分の願望。でも……もう半分の願いはまったく違うものだ。

復讐。

今まで自分を笑った者への。指を指した者へ、叩いた者へ——

あの祭りには憎しみの心も渦巻いている。子供の頃味わった絶望は、お姉ちゃんと出会うことによって癒された。だがそれは決して消え去ってはいなかったのだ。心の奥に追いやられながらも、そこで着実に息づいていた。無力だった自分が手に入れた力。そこへ差し込む闇。邪悪な囁き。

浜夜善は、清くも正しくもなかったのだ。

その力を使つて、人へ報復を望む最低の人間だったのだ——

「良いじゃねえか。あれだけ俺達を迫害した連中だ。人と少し違うから、変な噂を聞いたから……。それだけでこの世界において俺達は村八分。奇遇だな善、俺もそんな連中、この世界から滅びちまえ

「は良いって何千回も夢見たぜ？」

心を見透かしたかのように——ジッポは軽快に笑った。
その声に無理は感じられない。彼が、心より楽しそうに文句を並べているのだと知った。

「でもよ、善。お前はそれだけじゃねえだろ」
振り返った。

サングラスを外していた。

その瞳はとても温かく、優しい思いで満ち溢れていた。

「だから俺達は知り合えた。お前がただの悪なら、俺達が出会う場所
は刑務所の中だったはずだぜ。そう落ち込むなって。皆、腹の中
じゃとんでもないことを考えているもんだ。お前は多分、自分を責
めちまうだろうから俺が代わりに言ってやる。善、お前は普通だよ。
真っ当すぎる人間だ」

最愛の仲間が——再度テマリへと視線を戻す。

語り、その内容を裏付けるように逞しい背中を見せつけた。

「世界中が敵に回っても、俺はお前の味方だ、善」
真っ白になった。

ストレートな物言いはジッポらしい。だからこそ——心を貫かれ
た。

それは脳や心臓を通り越して魂に木霊した。罪悪感が一瞬消え、
生への歓喜で全身が震えた。

「ちよつと待ってよジッポ。まるで自分が善君の一番の理解者だ、
て言い方じゃないか」

その隣に並ぶのは——タイトな白いズボン。

アオイは武器らしい武器など持っているはずもなく、武術の類だ
って知っているわけではない。

それなのに——

テマリの視界から自分を隠すかのように、壁となってその前に立
ちはだかる。

「でも久しぶりだね、善君が落ち込むの。おかげで、ようやく僕

達も少しは借りが返せるのかな」

どうしてだろう。

どうして二人は自分を庇うかのように前へ立つ？

素晴らしい人達だ。個性的ではあるが、最高の人間だ。そんな人達が――

「どうして――」

呟いた浜夜の思考はまたしてもハッキングされる。

「善君。仮に――僕やジツポ、雪君が素晴らしい人間だとするよ？
だとしたら、どうしてそんな人間が揃って君を助けようとすると思う？ 答えは一つ。善君が素晴らしい人間だからさ」

華奢な剥き出しの背中。なのになぜだろう、その背が強く、大きく見えた。

そうだ。アオイは夜の街で数え切れないほどの人達と触れ合ってきているのだ。事務所の中で、間違いなく彼が一番、人を見る目がある。忘れていた。この男は、歌舞伎町のホスト界の頂点に君臨する男なのだ。

「僕は……自分の大切な人を独りよがりな感情で閉じ込め、あまつさえ周りの人を恨み続けていたような人間なんだよ！？ どうして皆……！」

「善君」

人の表と裏を知り尽くし、この国の重役や権力者の心をも見続けてきた男が、子供に言い聞かせるように優しく告げた。その包み込むような感情を前に、浜夜は黙らざるをえない。

「聖人君子じゃないんだ。人を憎んで恨むなんて当たり前のことだよ。少し強めに言うならば……良い年の大人が今更何言っているの、て言いたいくらいさ」

ただ無意味に自分を庇っているだけではない。

二人は、自分達にとって至極当然のことを言っているのだ。とうの昔に成立された法律を読み上げるような、当たり前のように歩いてきた道のりの意味を今更と言った感じで説明するが如く。

「雪、善を頼んだぜ」

「分かった。……ほら、行くよ浜夜さん！」

無理やり起こされ、腕を引っ張られる。当惑。三人が作戦会議を行った様子はない。なのに……なぜか仲間達は当たり前のような呼吸で連携を見せている。

「ちよつと待って！ 行くって……どこへさ！？」

「……善、お前阿呆か？」

表情の見えないジツポから盛大な息が漏れる。その言葉にアオイが続いた。

「探し人、見つけておいでよ。……それがたとえどんな結末になるうとも、善君は行かなくちゃいけないよ。君の蒔いた種。同時に君が生きてきた理由。今の善君は自分勝手になつて良い正当な理由がある。どうしても死にたいのだったら、その後にしたらどうか？」

返答を返す時間は与えられなかった。

雪が強引に自分の手を掴み駆け出したのだ。ならばそれに歩幅を合わせないとならない。

ジツポの背。アオイの背。

テマリの、伏せられた睫毛の奥から覗く、寂しそうな瞳――

二人にテマリが止められるとは到底思えない。何より自分の心を覆うは底なき罪悪感。情けないが未だに結論が出ない。それでも暖かな炎を貰ったことは理解している。

だから……言った。答えは返せないが……お礼なら言える。

自分が感謝すべきはその結果にではない。彼等の思い。変わることなき永遠の絆へだ。

「ありがとう。ジツポ。アオイ」

早く行け、と言わんばかりに二本の腕がぞんざいに持ち上がった。

どんな噂が飛び交ったのか、歌舞伎町は既に無人と化していた。途中見えた交番はもぬけの殻だ。……飲み込まれたのだろう、奴等に。

考えて結論を出さなくてはならない。それも早急にだ。とりあえず、何となく、今自分は逃けている。しかし思考は堂々巡りだ。ジッポとアオイは自分を肯定してくれた。二人には申し訳ないが、それでも……

全てが丸く収まるであろう結論を夢想せずにはいられない。

「テマリの言う通り、僕は……消えた方が良いのかもしれない」
一緒に走る雪の足が止まった。浜夜もつられてそれに倣う。

「こんな僕だけど……最後まで清く正しくでいたい。人に迷惑をかけてまで生きるより、この場で死んで、これ以上の被害を出さない——」

鋭い音が夜の歌舞伎町に響き渡った。

頬に走る痛みはどうでも良い。重要なのは――

雪が泣きそうな顔をして、それでも歯を食い縛って自分の胸倉を掴んだこと。

自分の一言が白金雪を、異路色系目相談所の助手を苦しめたことだ。

「浜夜さんの口からそんな言葉、聞きたくない！」

この浜夜善は、今一体どんな顔をしているのだろうか。雪が自分を引っ叩くなんて、それこそ初めて顔を合わせた時以来だ。さぞ胡散臭く、弱そうで、情けない顔をしているのだろう――

「私が……私がそうだった！ グレて、補導され、物を壊して人に迷惑をかけ、生きる価値の欠片もないと思っていた私を！ 浜夜さんは、そんな最低の私を肯定してくれたんじゃないか！――」

木刀が床に転がり落ちる。雪は浜夜の胸に飛び込み、その中で嗚咽交じりに言葉を紡いだ。

「あの時私を肯定してくれたのなら、今度は私が浜夜さんを肯定してやる！ 死ぬことのどこが清くて正しいんだよ！！ 私は、本当に感謝しているんだ。あの時、浜夜さんに助けられたからこそ、こんな毎日が楽しくて、どうしようもなく眩しい日々が続いているんだ」

ジッポもアオイも、明らかに年下である雪にさえも、自分の心とその葛藤を見抜かれている。だからであろう、雪は——全力で浜夜善を支えるのだ。

「人を助けることに、いちいち理由なんて必要なのかよ！ 浜夜さんは、私や五十嵐さんに何度も何度も叩かれても、それでも私に手を伸ばして拾い上げてくれたじゃないか！ 良いんだよ、もし浜夜さんが間違っていたら、その時は……きつと……誰かが浜夜さんを倒すよ。ずっと追いかけて来たんじゃないか。私が嫉妬するくらいその人のことを思い続けて来たんじゃないか。その心が多少歪だったとしても、周りが浜夜さんを否定しても、浜夜善は走り続けて良いんだよ——！」

物音一つない街に、突如としてけたたましい機械音が唸りを上げて木霊した。遠くから鳴り響いたそれは、犬の遠吠えのように空気を切り裂いている。バイク音だ。どうやら人がまだ残っていたらしい。浜夜は思わず辺りを見渡す。気のせいだろうか、それはこの場所を目指している気がした。しかし雪はそんなことはお構いなし、と言った風に言葉を続けている。

「それに、さ。浜夜さん……今更じゃん？」

「え？ 何……？」

あまりに唐突な呼びかけ。省略されすぎて意味が伝わらない。でもどうやらそれは、悪い意味合いではないらしい。なぜなら雪は……乾いた顔で、笑みを浮かべたからだ。

「『私達』がまともなヒーローを演じて、それって無理があるよ」

——ああ。

何かが心地良い音を立てて心の中に綺麗に収まった。雪の言わんとしていることはすぐに理解できた。散々自分で自問自答してきたことではないか。

はぐれ者達。常識外れの仲間達。
今更だ。

自分達は普通の人とはどこが違う。ヒーローの清さは悪を倒して

人を救うこと。悪玉の正しさはヒーローを倒して世界を滅ぼすこと。自分は……別にそれに当てはめなくて良いのだ。

このように、歪んで尖って出っ張って、そんなピースはパズルに当てはまるはずもない。

——その時、路地から一台の青いバイクが猛スピードで姿を現した。運転手はヘルメットを被っていない。たなびく金髪が風と踊る。それは闘牛のように自分達の方へと突っ込んで来ると、甲高い摩擦音と火花をまといて眼前で停車した。

「うん？ お取り込み中だったかい。失礼。理由はよく分からないけど、今この街はゴーストタウンになっていているようだからさ、何ならもう一周してくるけど？」

芯の太い、人としての頼もしさを感じさせる逞しい女性の声。……聞き覚えのある声。

あひゃあ、で良いのだろうか？ 意味を成さない日本語を叫ぶと、雪は浜夜の体から即座に身を離す。白金雪がこのような態度をとれる相手は、浜夜の知る限り一人しかいない。

「五十嵐さん……」

「や。浜夜さん。相変わらず仲がよろし……」

木刀で浜夜の四肢を打ちつけたことなど既に過去だと言わんばかりに、あっけらかんと五十嵐は挨拶を交わしてくる。浜夜も挨拶を返そうとして――

「あんた誰だい？」

無遠慮に瞳を覗き込まれた。

「細い目は相変わらずだけどさ。……何だか随分やる気なくなっているね。白金に骨抜きにされた……わけじゃないか。いつも熱いモン持った目をしてたのに。何があったか知らないけど、今の浜夜さんだったら私でも倒せそうだね」

一発で見抜かれる。当然だ。彼女は紅の親、子の機微を読み、心を読むことにかけては右に出る者はいない。彼女の「子」ではないが、自分のそれもあるさりと看破されたようだ。

「んで、白金。言われた通りバイク持ってきたけど、これから一体どうするんだい？」

いつ連絡を取ったのか、おそらく雪は途中で不穏な空気を察し、車より機動性に優れたバイクが必要になると判断したのだろう。…何と有能な助手だろうか。

その時、三人の呼吸が一つになった。訓練された兵士のように、一斉に一つの方向へと視線が定まる。人であるが故に、人以外の奇怪な空気に機敏なのかもしれない。ゆっくりと。

通りの奥から淡い紫が揺らぎ、陽炎が生命を宿すかのように確かな姿となって現れる。魔性にて妖艶。それは美しく棘を持つ。これで――着物にデフォルメされた三毛茶色の猫がなければ完璧だ。だがそれは仕方ない。なぜなら相手は――鋭い刃を持ちながらも子供じめている部分があるのだ。

「何だい？ また喧嘩してるのかい白金」

砕けた口調とは裏腹に、五十嵐の声から一切の余裕が消え去った。肌を刺すような空気の流れに敏感に反応したのだろう。現状把握が本当に早い。

「五十嵐さん、すみません！ 浜夜さんと一緒に逃げて下さい！」
頭を下げる雪に対し、浜夜より先に五十嵐が声を発した。

「……どうしてだい？」

「えっと……ちよつと説明するとややこしくなるんですけど、あの痴女は今危険なんで……」

テマリが近づいて来る。雪の説明はそれ以上は不要だった。

赤い爪が左右に連なったからだ。無表情に、一切の感情を乗せず死神が歩み寄って来る。

五十嵐はそれを見届けると――再び浜夜の顔をじつと見つめる。その意図が読めず困惑していると、五十嵐はあからさまに首を振って雪へと向き直った。

「いいや、私も白金と残るよ。……悪いけど、今の浜夜さんとは一

緒にいたくないわ」

「五十嵐さん！今のあいつは危険なんです！だから——」

「だからこそ、だよ。言つたろう白金？たとえ何が起ころうとも私はあんたの味方をするよ」

五十嵐は雪と一緒にいた方が良い。おこがましくも——浜夜も同じことを思ってしまった。全く関係ない人間を巻き込んでいることは承知している。おそらく命までは奪われまいだろうが、危険なものも分かっている。それでも、ジツポと同じ言葉を臆面もなく言える彼女だからこそ、雪の傍にいてほしかった。浜夜は自分一人が逃げることに納得などしていないが、自分がこの場に留まるなどと言い出せば、二人は困るところか怒るに違いない。

——もしかしたらそれで五十嵐は、自分と一緒にいたくない、と釘を刺したのかもしれない。雪の隣にいたいのも事実だろうが、自分がここに残ることを一番に拒否するための牽制。

「浜夜さんはバイクなんて乗ったことないよね？でもそれオートマだから大丈夫。自転車にエンジンがついているだけ。ペダル捻れば走るし、ブレーキ絞れば止まるから」

随分大きなバイクだ。大型と言うヤツだろうか。メタリックブルーの潤沢なる輝きが眩しい。エンジンはかかったままだ。重い。大きい。シートに座り、この巨大な怪物を操れるのか不安に襲われる……もつとも、今はそんな瑣末な感情を気にかけている暇はない。

「浜夜さん」

エンジン音に負けなくらい大きな声で五十嵐が自分の名を呼ぶ。不思議な優しさに満ちていた。決して甘やかす声ではない。言うなら……苦笑しているような。

「何が起こっているのかよく分からないけどさ。浜夜さん……似合わないよそんな顔。正解だろうが不正解だろうが、どっちに転んでも良いからさ……あの時みたいな、鋼の意志を見せておくれよ。失敗しても……私達は笑って迎えてやるよ」

「あ……と、いけない！浜夜さん、これ——！」

雪が何かを投げてよこす。

慌ててキャッチし、その手の中を見て目を開いた。

「それ、返す。てか預けておくからさ。だから……絶対返しに来てよ？ 私もう……それ以外の物吸うつもりないから」

真っ白なケース。中にはおそらく、自分が幾度となく吹かした甘美なる香りが詰まっている。

これはきつと雪の宝物。

それを――渡されてしまった――

二人はもう何も言わない。その顔も見えない。背を向けてしまった。

小さく謝辞を呟く。唸るバイク音を前にそれはあつさりと飲み込まれた。

それで良かった。

浜夜はただ一人、仲間を残して歌舞伎町の中へとバイクを走らせた――

日頃人で溢れかえっている場所ほど、それが途絶えた時のギャップは凄いものだと思った。店の明かりやネオンはそのまま、主となるはずの人間だけがスッポリと消え去っている。もっとも、おそらく混乱が収まったら人も戻って来るだろうし、何よりまず警察がパトカーに乗って急行して来るだろう。浜夜は与えられたバイクに乗り、ただ一人、無人の街を虚しく走っていた。オートマ操作であることが幸いしているのだろう、基本的なバイクの動かし方はすぐに理解することが出来た。

迷っている。

自分が何をすべきなのかを。

ジッポの、アオイの、雪の、五十嵐の言葉が浮かんでは消え、また浮かんでは消えていく。

浜夜善が消えれば、おそらくあの悪夢の祭りは二度と起こることはないのだろう。お姉ちゃんを閉じ込めているのは自分だ。その檻

も壊れ、飲み込んだ人々も戻って来るに違いない。

一時停止の標識が目飛び込んで来た。慌ててブレーキを絞り、車体を急停止させる。

「……でも……そんなのはただの逃げだ。責任の種を蒔いて、それを刈り取らず放棄する」

再びバイクを走らせる。

ほのかな花の香りが流れた。

香水ではない。体臭……なのだろうか。

疎い自分でも、それを面と向かって聞くことが失礼であることくらい分かる。

「ならどうする？ お前が自分で連中を制御出来ないのは明白だ。もう一度言うが、再びあれが起こればこの国は大混乱をきたすぞ。祭りを見た人間は強制的に記憶を消去させるしかない。だが記憶操作が出来る妖怪は数が限られている。これ以上『患者』が増えたら医師が足りん」

敵意も悪意もない。仲間内で相談でもするような響き。

ミラーで背後を確認する。そこには薄紫色の着物から艶かしい美脚をのぞかせ、縁側で足をぶらぶらさせる子供のようにバイクのシートにまたがるテマリがいた。

腰に腕が巻きつく。

「捕まえた」

不快に思わない。皆に対し、そのことを内心で詫びる。

——分かっていた。

自分だけでない、皆も本当は分かっていた。ジッポの攻撃をテマリが食らった時、既に。

テマリがその気になれば——

一秒にも満たない間に自分を殺せることを。

それをあえてしないのは——

自分達への、異路色系目相談所への手向け花であることを。だから浜夜も皆の安否など聞かない。聞く必要もない。

背中に何か軽いものがコツンと当たる。テマリの頭だった。体全体をこちらに預けてくる重みを感じる。ここまでされては……どうやら自分は、もう本当に逃げられそうにない。

先程までとは正反対の態度。これから殺す相手と無邪気に戯れる。浜夜には分かっていた。これは自分に対する死刑宣告であることを。「殺す殺す」と言われていた方がよほど現実感に乏しい。

心は静かだ。自分はおかしいのだろうか。先程のように追われているよりも、追っ手がこうして自分の真後ろにいる方が落ち着いていられるのだから。今の心境を確かめるように、一言一言噛み締めて口に出す。同時にそれは浜夜善の原点。核を成す言葉でもあった。「僕はね、テマリ。お姉ちゃんを助きたい。絶対に。だから自分が死ぬことは……構わない」

「……そうか」

……言いつつ、雪に対し心の中で詫びる。だがこれが浜夜の偽らざる本心なのだ。

「でもまず、その前にお姉ちゃんの顔を見てきちんと謝らなくちゃいけない。もちろん、許してもらえるなんて思っていないけど。……死ぬ覚悟はあるし、それを拒否するつもりもない。でもそうしなければ死んでも死に切れない」

「……そうか」

燃え滾ることばかりが炎の在り方ではない。静かに、小波のように、それでも決して揺らぐことのない青白い熱さだつてある。想いを口で表す。テマリが相槌を静かに打つ。

自分の心が固まっていくのを感じた。

違う。元々それは強固な塊として根付いていた。単に自信が持てなくなっていたのだ。自らが犯した大罪を前に臆しただけ。

お姉ちゃんはある祭りの中にしか存在しない。即ち、会うためには――再びあれを発動させなくてはならない。同時にそれは、無関係な人々がひよつとこに飲み込まれることを意味する。

「僕はお姉ちゃんに会いに行くよ」

その瞬間、自他共に認める完全な偽善者が誕生した。

一人のために他の大多数を巻き込み、犠牲にする。

許しを請うわけではない。しかし浜夜は続け様に、言い訳にしかないそれを口にする。パンドラの箱の奥に、ただ一つの光が存在したように。

「あれが僕の生み出したものなら――操作出来るかも。逆に、僕でなければ連中は止められないだろうし、もしかしたらひょっとこの暴走も抑えられるかもしれない」

「阿呆。あの般若は私すらも越える存在だぞ。私さえ扱えないお前が、どうやって般若、そしてその配下であろうひょっとこ共の手綱を握れるか」

既にその可能性すらテマリは考えていたのだろう。そして同時に放棄したのだ。

テマリは浜夜の考えを読みきっている。

可能性がないことを知っている。

道理だ。テマリの動きさえ見えない自分。そのテマリさえ動きを見切れない般若。雲の上の存在だ。

だがそれでも、浜夜にはたった一つだけ試したいことがあった。諦めるのは全てを試してからで良い。それならば雪も自分の死を納得してくれるだろう。……訂正、納得はしてくれないか。

お姉ちゃんに謝罪するまで、自分への攻撃は待ってくれないか？ そんな愚にもつかない言葉が思い浮かんで消えていった。完全に独りよがりだ。この街の住人を全員敵に回す自分の行動に、更に偽善を被せるのか。……馬鹿馬鹿しいので首を振り記憶から抹消した。

バイクは依然として唸りをあげる。

もはや行くあてもなく、気づけば浜夜は歌舞伎町内を周回していた。

可能性がゼロならばさっさと自分を殺せばいい。その赤い爪で喉を切り裂けば良い。つい先程まで、あれだけ黒い感情を表に出して

自分に迫って来たのに。

どうしてそれをしないのか。

なぜ……奥ゆかしい恋人のように自分の背に体を預けているのか。
「ごめんな……テマリ。一人にしてしまいかもしれない」

寄り掛かるその体に震えが走った。凶星だった。見抜かれると思
つていなかったのだらう。

「……このシチュエーションでさえ、お前は気の利いた言葉一つ言
えんのか。どこまで女の扱いが下手なのだ糸目」

憎まれ口は抵抗の意だ。それでも……謝っておかなければならな
い。

彼女はおそらく——自分を殺すだらう。大切な人を持つのはテマ
リも同じだ。平和な街、争いのない世界。それを実現するために、
悪の帝王である自分を滅ぼすだらう。

そしてテマリは一人となる。

雪と、ジッポとアオイと……自分。

もう二度と元の関係に戻れなくなる。

テマリがどれほどまでに孤独を恐れ、嫌悪しているかは感じてい
る。更に尊大な物言いをするのなら、きっとそれは異路色系目相談
所の面々にしか分らない。

真昼間に飲んだジュースの味が蘇ってくる。

ならばきつと、今彼女には酒の味が蘇っているはずだ。

二度とその美酒を味わうことは叶わない。

「このまま……」

迫り来る風を突き抜けながらも、その小さな声は浜夜の耳に確か
に届いた。

「このままどこかへ行ってしまうか？」

素晴らしい提案だった。

お姉ちゃんを忘れ、テマリ大切な人も忘れ、永久に走り続けて
いられたらどれほど楽だらう。きつとこれは最後の道。二人が分岐
する道はすぐそこまでやって来ている。今の言葉を揶揄するつもり

はない。それでも——楽しそうに、笑いながら浜夜は告げた。

「やっぱりテマリは子供っぽい所があるな」

自分にテマリの手綱など握れるはずもない。首輪などつけたら手首を噛みつかれること間違いなしだ。それでも——その一時、テマリは束縛されることを望んだ——気がした。

「お前はずるい。あれだけ鈍感で、だらしなくて、本当にどうしようもない男なのに……」

バックミラーに無邪気な微笑が映った。

それが、浜夜が覚える最後のテマリの笑顔だった。

「どうしてこんな時だけ鋭くなる？」

自分は大切な人を見つけた。

テマリは未だ見つかっていない。

自分はお姉ちゃんに会わなくてはならない。

テマリは自分を消さなくてはならない。

——もつと同じ道を歩いていなかった。

顔を撫でていた風が徐々にその速度を落としていく。

夢の終わりだった。

「もう……おしまいか……？」

寂しそうに、切なさそうに、空に溶けてしまいそうな声でテマリは声なく泣いた。

そこは広場だった。映画館やボーリング場、ゲームセンターやパチンコが四方に見渡せる小さなスペース。日頃は携帯片手に地面にうずくまる若者達でこった返す場所。

——お祭りを行うには、少々狭い場所。

「ああ。終わりだ」

バイク音が完全に沈黙した。浜夜がキーを捻ってエンジンを停止させたのだ。

バイクが止まった。

止まってしまった。

だから……テマリはもう……自分の背にしがみ付く必要もない。

二人が――

地面に降り立った。

お互いの靴から鳴り響く音は、悲しいくらいに異なっていた――

最終話

7

呂旛が原因ではなかったのだ。

あの生々しい夢、きっとそれは自分自身の心が原因だったのだろう。確かにあの日、自分はテマリ、雪と共に呂旛と会った。その中で……自分の心がざわつくような、長年の夢の手掛かりを得た。――蓋を開ければそれは呂旛の虚言だったのだが。十数年は長い年月だ。自分はきつと……心のどこかで諦めかけていた。どれだけ経とうと手掛かり一つ得られない日々。だから夢も毎回同じだった。同じ般若、同じおかめ。日本刀でおかめが突き刺され、目覚める自分。歯車が動いたのは――呂旛の虚言から得られた期待。その期待が自分の心を動かし、夢に進展が起きたのだろう。見つけなくては、との思いが夢を活性化させ、現実には押し出そうとしたのだ。「手」に反応したのも、夢の肉付けが進むにつれて封印されていた記憶が少しずつ蘇っていったのが原因だろう。

「寝ている場所から遠く離れた代々木公園でそれは起こった。街中で起こったらパニック必至だったけど、もしかしたらギリギリで理性が働いたのかもしれない。人が密集する場所ではなく、公園内で起こり……それでもホームレスの人達を飲み込んでしまった」

チヨコレートの香りを存分に味わう。

テマリとの距離は自分の徒歩にして二十程だろうか。

――彼女は目を瞑り、静かに独白に耳を傾けている。

「回復した呂旛から話を聞いて、彼が犯人でないことが分かった。そこで……僕の心に再び大きな変化が起きた。必死に掴んだ敵が蜃気楼だった、その反動だろうね、かつてないほど僕は犯人を心の中で望んだのだと思う。だから……先程のように現れた」

付け加えるなら、テマリが般若に斬られそうになった瞬間に、祭

りが消え去ったのも自分の意思だろう。もう一度やれと言われても無理だろうが、テマリの死を自分が拒絶したのだ。

だが般若は口惜しそうにその姿を消していった。ヤツが制御下にないことは明白だ。自分が「やめろ」と口にすれば日本刀を下ろしてくれる相手ではない。

どうすれば彼等と呼び出せるのか。未だその方法は知らない。でも出来る。

それは予感ではなく、確信へと変わっていた。テマリはまだ自分を殺さない。――殺したくないのだと浜夜は願う。最後の希望、自分が連中を自在に操れるかを見届けたいのだろう。

それが無理であると判断された時――

浜夜善の命は尽きる。

事態を長引かせては余計混乱をきたす。人も警察も来ないうちに済ませてしまいたい。

目を閉じた。

心は異様とも表現できるほどに穏やかだった。

さあ、会いに行こう。

自分を救ってくれた恩人。自分が閉じ込めてしまった償いの人。お姉ちゃんを思う。心から一途に。そこには気張りも焦りもない。自分の心を覗けるのは自分だけ。彼等を否定してはならない。ひょっとこ達は自分の意思で誕生したのだから。嘘偽りを消し、虚無を晴らした時――

周囲から笛の音が鳴り響いた。

結果を見届けるまでもない。彼等はいつだってすぐ傍にいたのだ。それでも外界を見ることを惜しんだのは――

これから始まる、祭りと言う名の処刑を少しでも延期したかったから――

どうやら自分は、異路色系目相談所のメンバーが五人になることを強く望んでいたらしい。

提灯で埋め尽くされた世界。自分とテマリの距離は変わらず。二

人を取り囲むようにしてひよつとことおかめが回っていた。先程の祭りと比べ、熱気と瘴気が明らかに増している。おそらくひよつとこによって飲み込まれた人の分だけ、連中の数が足されているのだろう。

心を穿つ巨人の足音。――これを聞くのも最後となるのだろうか。やぐらが立っていた。自分と、テマリの位置からも近い祭りの中心部。見上げる天辺には激しく両手を交互に振り抜く一人のひよつとこ。和太鼓からはいつになく激しく、凶暴で、破壊を連想させるような濁音が鳴動していた。

不甲斐なく人一人守れない自分に代わり、この世界の主となるは白袴の般若。やぐらの下で日本刀を垂らし、一人のおかめを踏みつけて佇む。

――祭りが――始まる。

人と、妖怪と、人の生み出した人外の者達を揃えて。

般若は動かない。一瞬、その足元のおかめに声をかけようと考えたが、そんな刹那の隙さえも許さない気配が前方から押し寄せてきた。それは……心底辛そうに息を吐いた。

「……三十人……四十人……ああ、これは凄いペースだな……」

浜夜は最後に大きく水蒸気を吐き出すと、電子タバコを胸ポケットに仕舞う。テマリが何を言っているのかおぼろげながらに想像がついたからだ。呑気に過ごせる時間はとうに終わった。

「糸目。お前が呼吸を一つすることに、十人単位で人が飲み込まれているようだ。……やはりお前には……この世界を操る力はないようだな」

猫の目が獲物を捕らえる。

浜夜はその時、鼠となった。

「決まりだ。ここで死ぬ。浜夜善」

切り替えの早さに驚きはしない。テマリはやると言ったことは必ずやるだろう。気分屋で激情家だが、自らの成すべき事柄は真っ直ぐに行う。この数日間の付き合いでそれくらいは理解していた。

試合開始のゴングを思わせる和太鼓。それより早く浜夜は動き出していた。自分の向かう先はただ一つ——般若の足蹴にされているおかめだ。

それは——幻想。

なぜなら。

浜夜の足はその意思と裏腹に一步もその場から動き出していなかったからだ。

「え……？ あ……？」

くるぶしに何かが巻きついていて。そう知覚した時には絶望感が込み上げていた。その視線の先で帯状の赤いロープのような物が自分の両足を巻き上げていたからだ。それは雑草のようにコンクリートを割って地面から這い出していた。原因を直視すべくテマリを見る。そこには納得……せざるを得ない光景。彼女の両手から伸びた爪が、そのまま真下へと吸い込まれていたのだ。

冗談も良い所だ。まさかあの爪でミミズの真似事をしていると言うのか。

どれだけ力を込めようと二本のロープは解けるどころか、緩むそぶりさえも見せない。地下をくだるテマリの爪は魔術のように肉を絞り、骨にまで吸い付いてくる勢いだ。しかしそれに対し悲鳴をあげている暇はなかった。浜夜の眼前でまた一つ、赤い花が地面に咲いたのだ。コンクリートを砕いたそこに覗かせた芽はドリルのような円錐形をしている。その向く先は——自分の胸だ。

「先手を打たせてもらう。でないと……」

空が割れた。

自分に向けられたものではない。テマリが曲芸師のように身を振り、爪を地面に貼り付けたまま宙へと舞った。般若の放った日本刀は空気を切り裂きテマリの身へと襲来したのだ。その余波は浜夜にまで届く。凶暴で肌寒い風が自分の体突き抜けていった。

「やはりか。般若はお前の分身。お前を攻撃しようとすれば、必ず立ちはだかると思ったわ。……先程は遅れを取ったが、お前は妖怪

でも何でもない人の化身。ならば太刀筋がいかに化け物じみた速度であろうとも、その軌道は単純明快だ。人の刀術など腐るほど見てきた。避けるだけならばそこまで難しいことではない！」

地面に足をつけ、テマリはその片腕に己の意思を乗せる。

般若は——攻撃をテマリに回避され、僅かな逡巡が生じている。機だった。

テマリにとって絶好の。

浜夜の足元で蠢くドリルに死の意思が宿る。

力も何もない自分にそれを防ぐ手立てはない。

終わり——だ。

あまりに呆気ない幕切れ。

お姉ちゃんに一言も謝っておらず、その仮面の下にあるはずの素顔さえも見ていないのに。

テマリは——それ等を全てを承知の上でだろう。赤いドリルを矛

先へと解き放った。

「……糸目」

風に乗った呟きは浜夜に届かない。迫り来る終わりを前に、その頭は思考で埋め尽くされる。

皆が自分のために開いてくれた道。お姉ちゃんに生かされている人生。

清く、正しく、ではない。

それは確かに素晴らしき教え。だがもはや自分で自分の道を作らなければならぬ時なのだ。

原点は変わらず。しかし束縛されてはならない。

何より、終われない。少なくともこんな半端には。そう思った時。

その右手は何かを掴んでいた——

空は——割れない。割れたのは赤い呪縛と清らかな呪縛。一步を踏みしめることは着実に大切なこと。しかし……時にはコイントスの表裏に賭け、底の見えない谷へと飛び込んで行かなければ手に入

らないものもある。歩いてばかりでは間に合わないこともあるのだ。破砕音が和の音色の中へ不躰に乱入する。

「——たった一人のために、大多数の人間を犠牲にするか。それで……良いのか糸目！」

浜夜の両足に？がれた戒めは、ドリルもろとも粉々に砕け散る。真紅のシャワーが美しく降り注いだ。見開かれた猫の瞳は一瞬のもの。その一幕が終わる頃には現状を把握し終えたのか、テマリは赤く変貌を遂げ、燃え滾るマグマで染まっている。

一振りの日本刀が手の中にあつた。

一瞬、般若に戸惑いが生じた気がした。なぜなら浜夜が握るそれは、般若の持つ物と瓜二つの輝きを宿していたのだ。

「僕の世界で僕の生み出した般若がこれを握るなら、僕も同質の物を召還できる……てことか」

結果から過程を理解する。唯一試したかったことが成功したらしい。

今まで振ったこともなければ握ったこともない刃。それなのに……今のこの世界では自由自在にそれを操れる気がした。結果は足元に散らばる無数の赤い破片だ。残念ながら……ひょっとこの暴走は止められないらしい。何度も念じているが一向に反応がない。皮肉だが、自分が心で培った怨念は酷く強大な力を持つてしまったのだらう。

「これが……清く正しくか！ 笑わせるな糸目！！ 己の我儘で、街を、国を滅ぼすか！」

もう一つ。浜夜が賭けているコイントスがあつた。放ったコインは未だ宙を回り続けている。

「テマリ。君が本当に限界を感じたのなら、足なんて縛らず即座に僕を殺せたはずだ。まだだ。まだほんの数分程度、猶予があるんじゃないのか？ テマリから思った以上の焦りを感じないよ。君はギリギリまで僕を殺さない。テマリは望んでいるのだらう？ 僕が生きる世界を」

何より一番にしなくてはならないことは謝罪だ。お姉ちゃんの目を見て、頭を下げて、ごめんなさいを口にする。それをしなければ死んでも死に切れない。きっと成仏せずこの世を彷徨うだろう。何度でも言おう。自分は死んでも構わない。だがテマリに付け入る隙があるのならば利用するまでだ。

「随分と自惚れが強くなったな。この数日、男を上げるところか下げることしかしてないだろう」

「テマリ……」

自分だけでない。彼女もきつと内なる心と戦っている。もし……もしこの街が修復不能なまでの混乱をきたしたらそれは見てみぬふりを続けたテマリの責任となってしまうだろう。彼女は自分の大切な人へ一生顔向けが出来なくなる。「竹様」の顔に泥を塗るところか唾を吐くも同義だ。

「ありがとう」

浜夜は呟いて駆け出す。

テマリの目に宿るは僅かな侮蔑。所詮人間である自分の全力疾走などたかが知れている。テマリや般若からすればハエが止まるほどのスピード。児戯にも等しいだろう。

だからイメージする。

疑わない。これは絶対なる確信。元となるビデオを脳裏で再生。般若が日本刀を振るった時の映像。コンマ一秒以下の隙間に煌いた閃光。

言葉の通りだ。

それは光となる。

駆ける浜夜の周りから――風が消えた。

テマリの心底驚いた顔が妙に心地良い。……やっと一泡吹かせてやれた。

風なき疾走など物理的に、科学的にはありえない。だが浜夜はそれを疑問とも思わない。

なぜなら今の自分は風よりも高い位置にいるから。風さえも配下

に置く世界の王。

「お姉ちゃん……！」

そこへ正当なる王が乱入する。

百メートルを一秒で走り抜けるだろう浜夜の前で——地面にうずくまるおかめへ伸ばした手の眼前で——白き破壊王は一切の慈悲なく日本刀を振るった。

「!？」

その動作を一部始終目で追うことが出来るのだから、既に自分の動体視力は壊れている。

火花が散った。

一体何の差か。目的を忘れかけ怠惰に身を落としていた男と、十数年姫を守り続けた男の違いなのか、物理的な勢いさえも味方にしていたはずの浜夜は罅迫り合いになることもなく弾かれた。

鳴き合った音は彼方から。風も、音さえも後から飛んでくる。

「現実世界の人間には限りがある。ならば自らで架空世界を創り上げ、その内なる世界で物語の主人公のように、非現実的な力を手にした能力者が存在したと聞いたことはあった」

独白は浜夜のすぐ近くから。

舌打ち。

何がテマリに一泡吹かせてやれた、だ。

般若に弾かれ、バランスを崩したその瞬間を彼女は逃さない。

既に浜夜善は、テマリに取って完全なる敵と化していた。

「竹様の教えは正しかった。人を恐れよ。人は妖怪を恐れるが、妖怪も人を恐れなくてはならない。まったく……やはり化け物だお前は。ただか二十数年生きただけの若造が！」

赤の死神がその鎌を振るう。

そこへ白い影が落ちた。

足蹴にしていたはずのおかめを離し、浜夜を庇うかのように般若がテマリへと割り込んだのだ。

虚をつかれたのは浜夜自身もだ。しかしテマリでさえ刹那の逡巡

が生まれる。

たった今、浜夜を殺す勢いで日本刀で弾き、その一秒後には浜夜を庇う。

その矛盾した行動が、見る者全てへ躊躇いを与えた。

テマリは勢いを殺さない。足を止め自ら致命的な隙を作ることとはせず、防御を意識したまま般若へと突撃するのが分かった。「避けるだけならそこまで難しくはない」、しかしそれは攻撃を全て捨て、一切の意識を保身へと回した時の台詞なのだろう。やはり実力差は埋まらず、存在する。

欠片が数本空へと上がった。赤く凶暴なそれは、付け根を失った瞬間ただの残骸と化す。一薙ぎを終えた般若は飛び退き、再びおかめへと戻る。無造作に白き面の背を踏みつけた。おかめの四肢が魚のように跳ねる。浜夜はそこへ憤りを覚える暇もない。今の一寸劇で自らの制御を失ったのだろう、テマリが眼前に突っ込んで来たからだ。他のことに気を取られすぎて浜夜もそれを避ける術はない。場違いなコントのように二人がぶつかり、浜夜は大きく吹っ飛ばされ転げ回る。

尻餅をつきながらも注意は忘れない。右手の握りを強く確認する。テマリからの追撃はなく、般若も沈黙している。丁度、三人のそれぞれの位置は正三角形を形作っていた。浜夜は一人、口を開いて確認する。聞く人間がいる限りそれは独り言にはならない。

「般若のお姉ちゃんを守る強固な意思は揺るがないな。僕であろうと誰であろうと、般若自身と、その足元へ近づこうとする人間は容赦なく攻撃してくる。僕はただ謝りたいだけなんだけど……。面と向かって頭を下げるのが望みで、お姉ちゃんに害を与えるつもりなんてないのに」

意外にもテマリが続く。彼女も現状を確認しておきたかったのかもしれない。

「……お前を攻撃しようとしても般若は動くか。なるほど、あれは言わば幼き日のお前が望んだ姿。自分も、姉も、苛めようとする人

間は容赦なく排除すると」

「でも僕はお姉ちゃんを助きたい。あの般若が邪魔だ」

「ほう。私もあの般若は邪魔だ。お前が攻撃出来ぬ」

三つ巴でも三すくみでもない。それでも沈黙は敗北だ。刻一刻とひよつとこ達はその領土を拡大しているのだろうから。

「喜べ糸目。お前はグチグチ言っていたが、少なくとも姉を守ると言う意思是本物だったようだぞ。純粹に姉を思う心が、おそらくあの般若をあそこまで強くした。長い年月をかけて、お前の心から零れ落ちる滴がヤツの糧となった」

「……子供の頃は、靈にとり憑かれても払えないくらい弱かったのに」

「それは、非力とイコールにはならん。誰だって強力な武器があるうと使い方を知らなければガラクタだ。浜夜……浜夜、か。もしかしたらその苗字は、由来を辿れば古来の有名な陰陽師にでも辿りつくのかもしれない」

油断はない。会話はあってもテマリに心は許せない。

だが共通の敵を持つ認識が、浜夜の心に甘い誘惑を囁く。

テマリと共同戦線を張れないか、そんな子供じみたご都合主義の展開を思い描いてしまった。

「考えてみれば……何もお前を消さずとも、あのおかめを消してしまえば良いのかもしれない。そうすればこの世界が存在する意義がなくなる。つまり……ひよつとこ達の消滅だ」

夢をゴミ箱に投げ捨て、手を取り合うことを即座に放棄した。

自分とテマリでは目的が違う。

残念だ。目指すものが異なる以上、背中を預けることなど出来ない。

——今までに何度かおかめに呼びかけたが一度も返答がない。きつと言葉を発することは出来ないのだろう。般若の足を退け、面を外した時、彼女は解放されるのではないだろうか。根拠はないがそんな予感があった。

ならばどうすれば良い。般若と戦ってお姉ちゃんを勝ち取りたい。しかしその瞬間、自分は背中からテマリに刺されるだろう。自分の力が般若より勝ったと仮定して、ヤツを追い詰めれば追い詰めるほど、テマリは機は増える。

横目で猫又を窺う。やはり何かを考えているようだ。テマリは自ら口にした。浜夜善かお姉ちゃんか、どちらかを消せば良いのだと。彼女からすれば勝利の選択肢が増えたのだ。それをわざわざこちらに教えたのは、かつて仲間として共に行動した時間の残滓か、それとも……何か裏があるのか。

三人が一斉に沈黙した。

思考の最中。

両者にとって意外だったのは、一番に動いたのが浜夜でもテマリでもなかった点だ。

不穏な空気を感じ取ったのか、一対二の状況に懸念を持ったのか、般若がその刀を天へとかざした。

攻撃――

そう思った時には既に日本刀は振り下ろされた後だ。

大丈夫。斬られていない。構えたままの自分の体は五体満足だ。

テマリも……同様のようだ。

圧倒的な轟音が歌舞伎町へと響き渡る。

瞬き一つの間でそれは現れた。

和太鼓などとは比較にならない、百獣の王としてその怒号を思わせる激震音を前には逃げ出すだろう。それは言うなら神の声。地面が揺れる。心が震える。思わず手をついた。

忘れていた。

まだこの連中が残っていたのだ。

黒き破壊神。悪鬼を見下ろすかのように、二対の仁王像が棍を手に浜夜の前に立ちはだかる。その大きさは夢で見た時と同じ、三メートルほどか。憤怒の表情は心を凍りつかせる。

完全無欠なる破壊の象徴だった。浜夜善の怒りの権化。不条理な

る世界への呪いか。

呆然としている場合ではない。今度あの棍を浴びたら肉も骨も揃ってミンチにされること確定だ。

「……この隠し玉はないだろう。……ええ、糸目!？」

仁王達の実力は般若には十分劣る。そう見抜いた矢先のテマリの声だ。確かに厄介ではあるが、般若の一撃を凌いだ自分ならば何とか出来る。

テマリも同様の感想を抱いた———と思いきや、その声から一切の余裕が消えていることに戦慄する。自分が理解していない何かを彼女は悟ったのだろう。目と目が合う。猫目に恐怖が走っていた。

「貴様この国を滅ぼす気か!？」

自分が呼んだわけではない。そんな瑣末なことさえ口にすることは憚れた。

抑制のないテマリの声。その真意を問い質す前に、遠くで爆音のような反響音が木霊する。それは建物を取り壊す工事音が数倍になったかのような、爆弾でも炸裂したかのような音。

悲鳴、悲鳴、悲鳴。

破壊と叫喚のセツトは一箇所からだけではない。花火のように、気づけば四方八方からその合唱が上がり始めた。

その意味する所。浜夜は軽い眩暈を覚える。

仁王像の数が、この場にいる二体が全てではない証だった——

テマリを中心に渦のような風が吹き荒れる。猫又の尾が姿を現した。だがその姿は呂旛と戦っていた時の比ではない。全身の毛が棘のように逆立っている。流れに巻き込まれた落ち葉が一瞬にして粉々に引き裂かれた。凶暴にて凶悪なるその姿、彼女は人でも妖怪でもない。

災害だった。

タイムリミットを一挙に越えたことを知る。

「この数日色々な阿呆に出会ったが、最もたるのは私だった……。このような危機になるまで躊躇っていたのだから。どこまで……」

甘いのか。私は何を期待していたのか！」

睨まれた。

それだけで気が遠くなるかのような衝撃。長年の時を得た猫又による全身全霊を込めた眼力は魔術さえも宿るのかもしれない。足に根が生えたかのような錯覚。

宙を切り裂いて鳴り響く爆音。

般若の左右で、鎮座するかのように存在感を見せつけていた仁王像の一体。口を閉じた「吽」像の顔面が突如として赤い火花を散らし爆発したのだ。耳をつんざく暴力音。

もはや思考が追いつかない。

何が起きているのか。

テマリの仕業ではない。瞬時に立ち込める火薬の硝煙。科学的な、この場に似つかわしくない人間的な武器が飛来し、「吽」像の顔面に破壊を引き起こした。熱を持った爆風が飛び交い、浜夜もテマリも思わず腕をかざして身を守る。

やぐらが崩れ落ちた。

今の衝撃のせいだろう。天辺で演奏を続けていたひよつとこが、和太鼓と共に無様に地面へと落下する。むせ返る砂埃が辺りを覆った。咳き込みながらも状況把握に努める。

場違いな野太い声。この世界において究極的に似合わない現実感溢れる声。

「おつしゃあ！！ 大枚叩いて手に入れた甲斐があつたぜ！！ 善良な市民様を懲らしめるヤツはこの俺が許さねえ！！」

バズーカ砲——に似た鉛色のラッパのような物を、しゃがみつつ両手で肩に抱え、脇道から登場したのはジッポだ。筒状の先からは煙が立ち昇っている。その隣ではアオイがこちらに向けてささやかに手を振っていた。

人ならば木っ端微塵と化すであろうそれを浴びても、驚くことに仁王像の面は至って健在で傷一つない。それでも衝撃は殺せなかったのか体は揺れ、流石の巨軀も体勢を崩し片膝をついた。

「んんんのおおおおおお！！！！！！」

女の子と思えない、それでも女の子の声。頼もしき助手の声。果然とする浜夜がその主を捜し当てた時には、「吽」像の顔面に向けて雪が木刀を叩き込んだ所だった。

科学の武器でも傷つかない巨人を、雪の細腕でどうにか出来るものではない。

浜夜の制止は――

陶器が砕けたような甲高い響きと、大量の空気が搾り出されたような間の抜けた放音で掻き消された。仁王像の面に生じたのは小型のクレーターだ。お寺に鎮座されている銅像を罰当たり承知で叩けばこのような結果になるのだろうか。

顔を潰されることは生命機能が停止すること。幸いその常識は、この異界における異人にも通用したようだ。「吽」像は巨体を地面に投げ出すと電池の切れたゼンマイのように動かなくなる。相当な重量があったのだろう、地震に似た振動が大地を揺るがした。

――雪の尋常ならざる破壊力に、浜夜は覚えがあった。

「まだだ。もつと出せるだろ天狗！？ 力洪っているんじゃないぞ！」

「やってます！ 全出力でやっていきますよ！！」

雪の怒鳴る先には、冗談のように荒縄で何十にも縛られた呂旛の姿があった。頬は赤く腫れ上がり、その隣では五十嵐が飼い犬の首輪を握るかのように縄を掴んで呑気に佇んでいる。

――大方、上手くテマリの名前を出して呂旛を丸め込んだのだろう。確か、何か依頼を受けて姿を消していたはずだがそれはもう既に終わったのか、雪の力の供給源は悲痛な顔で叫んでいる。

日常が戻ってきたかのような幻覚。仲間と共に怪事件を追い、この世の果てを求める。

その気の緩みは完全なる自分の失策だ。

仁王像の一对が崩れ落ちたのは、彼女にとってスタートの合図だったらしい。

テマリが風と化す。――般若の足元へと向けて。

片割れとなる「阿」像は雪を敵と認めたのか、その巨体で小柄な女の子を押し潰さんとする勢いで迫っていた。それに対峙する雪。今はただ呂旛が力の限りを尽くしてくれることを願う。

図式が元に戻る。

浜夜と、テマリと、般若の三人に。

出遅れたスタートダッシュは浜夜だ。

その弾丸のような速さを前に仲間を目を丸くする。ジッポのタバコが口から零れ――それが床に到達する前に浜夜はテマリの背へと追いついていた。

――それがテマリの狙いだったと知った時は遅かった。

車とて急停止は不可能だ。人間も同様。

しかし猫又は、人や動物をも超越した神脚を駆使し、ものの一秒で全力疾走の勢いをゼロへと殺したのだ。

驚愕を口から出す間も与えられない。

浜夜にそれは真似出来るはずもない。そのような力、子供の頃とて望んだこともないのだから。

そしてテマリを追い越した先に構えるは――般若。

絶望が襲う。

二位から一位へとランナーが躍り出たその瞬間、完全に挟み撃ちとなってしまうのだ。

自らが招き寄せた死地。テマリの策。前門の般若、後門の猫又。

侵してはならない領域へ足を踏み入れてしまったのか、般若の日本刀が持ち上がる。

同時に背中から押し寄せる殺意。見ずともテマリの真紅の刃が迫る重圧を感じる。

浜夜の武器は一本。

刀を使った真剣勝負の経験もなく、戦闘経験もテマリと比べれば兎に等しい程度にしか持ち合わせていない。一つの武器で二人を捌くなど不可能だった。

般若の日本刀が浜夜の心臓を目掛けて襲来した。

浜夜善を攻撃しようとするテマリからは身を挺して守ってくれたのに、その浜夜善がおかめを奪取しようすると殺しにかかる。もはや矛盾の存在。だがそれは自分の素の心。

どちらも大切なのだ。

それでも心の根が向かった先は——自分でなくお姉ちゃんの方であつたと言っただけ。

全身全霊を込めてその一撃を弾く。

化け物じみた動体視力を持った今でさえ、同等の化け物の力を受け流すだけで精一杯だった。均衡。上回ることも下回ることもない。

浜夜善対浜夜善。

それはある意味当然の結果とも言えた。

だからこそ——そこから先に加わるプラスアルファの要素を防ぐ手立てがないのだ。

コンマ一秒の世界。

テマリの腕が確固たる意思を持って前へと突き出た。

陽気な音楽と愉快的面々。

提灯で彩られた夜空に鮮血が音もなく舞い——

「む！！？」

宙へ舞って流れたのは赤ではない。

白だ。

驚愕はテマリの口から。

浜夜は、自分の体が貫かれていないことを感じる。

テマリは自らの爪が相手の肉に触れていないことを見る。

その前に——浜夜の背を埋め尽くすかのように、短冊のような白の束が、紙吹雪の如くテマリの眼前で踊ったのだ。

それは熱を持つ。

「っああああ！！？」

炎が現れたわけではない。背を向けたままの浜夜は知る由もないが、その一寸劇を固唾を飲んで見守っていた者達には、紙切れが乱

舞する中でテマリが突如として一人で喚き始めたようにしか見えていない。

それは札だ。

よく見れば、その白札には小難しく不気味な言葉を連想させるような漢字が連なっているのが分かっただろう。

ジッポがネットを駆使して集めてくれた退魔道具の数々。札にはそれぞれ大小の威力がある。しかし相手はテマリだ。出し惜しみをしている余裕などあるはずもなく、浜夜はスーツの内側に仕舞ってあったそれを片手で掴むだけ掴むと、振り向きもせず背後に放り投げたのだ。

日頃のテマリなら難なく回避出来たかもしれない。だが浜夜の無防備な背中では、猶予なきテマリにとって喉から手が出るほどに欲したもの。ましてや自らが仕掛けた罠に掛かった獲物。ならば勝利を確信し視界が狭くなったのも当然と言えた。

「糸目……糸目エエエエ!!!!」

怨嗟と苦悶が入り混じった怒号。

最後のチャンスだった。

所詮は低級なる魑魅魍魎相手に用いる小道具。テマリ相手に大した効果などあるはずもないだろう。浜夜もそこまでは期待していない。

——仕留めなくてはならない。

眼前にそびえ立つ、居城の主を。

この僅かなる一瞬で。

自分がテマリに殺される前に——たった一言、その顔を見て謝り

たい——

般若の足がおかめから離れた。

解放——ではない。

確実なる地面の足場を確保したのだ。

それはつまり——

浜夜善の覚悟が浜夜善に伝わったことでもある。

己の魂を賭ける渾身の一撃が次に来ることを般若は理解したのだ。
浜夜は言葉を発さない。

だが般若に……伝えたいことがあった。

テマリの激情が背後から迫ってくる。

だから、ただ心の中で思う。

それで伝わる。

なぜ般若が、夢の中でおかめにその日本刀を突き立てていたのか。
その理由は自分自身だ。長い年月を経て浜夜の心に忍び込んで来たのは諦念。周りを見渡せば、自分と同年代の者達は皆楽しそうに青春を謳歌していた。

いつの頃からだろう。

お姉ちゃんが救いであると同時に、枷となっていたのは。

心の底に芽生えつつあった、その身勝手な思いを実行していたのが——この般若だった。お姉ちゃんを守る守護者。同時にお姉ちゃんを殺す処刑人。大いなる矛盾の存在。おかめを守りつつも常に足蹴にしていたことは、それで説明がつくだろう。

謝罪を胸中で口にしようとして——

般若から発せられた黒き熱を前にそれは溶ける。

——怒っていた。

あの日の浜夜が今の浜夜へと。

大切な人を想う心は不変。同時に——地の底でくすぶる淀んだ情。
忘れたと思う心。

その集大成が今目の前にいる修羅の面をつけた白袴の男だ。

先に仕掛けたのは般若の方だ。

思い込みかもしれない。自分は再び夢の中で彷徨い続けているのかもしれない。

面は永遠にその顔を変えることはない。

なのに。

作り物である般若の憤怒の面に……怒りのシワが寄せられた気がしたのだ。

浜夜に迫り来る日本刀に、僅かな人間臭さを感じたと思うのは空想か。

ごめんなさい、ありがとう。思考をすっ飛ばして二つの言葉が思い浮かぶ――

袈裟斬りに注がれる銀閃はこの異世界からの脱出口だ。それも二度と戻って来れない片道切符。身を任せるわけにはいかない。まだ

……早い。

刀を重ねた。

二つの世界が交差する。

死への世界。生への世界。

それがこのような異空間の、おまけに祭りの最中だと言うのだから滑稽だ。

哭く。囃し立てる笛の音のと真ん中で。飾られた世界に魂の鳴き声が天へと上がった。

それは――一振りの日本刀が根元から解き放たれた瞬間だった――
旋回する刃。

空に煌く月へ挑戦するかのように飛んでいく白銀はどこか神々しくもあり、一つの物語の終わりさえも連想させた。

そう、終わっていたのだ。

天を駆ける刃に一瞬皆が目を奪われたその時――

地上では浜夜の日本刀が般若の胸を貫いていた。

力は均衡しなかった。

般若の心が憤怒に染まった時、浜夜の心はそれに応じた変化をもたらした。まず謝罪。次に浮かんだのが……謝辞。

「……今まで、ありがとう。不甲斐ない僕の我侭で生み出され、それでもずっとここでお姉ちゃんを守ろうとしてくれていたんだよね。怒って当然さ、主がこんなどうしようもない男で、自分で生み出したはずの世界すら忘れていたのだから」

日本刀を引き抜く。血は流れなかった。前のめりに倒れようとする般若を、浜夜は……支えない。

般若の額に……亀裂が走った。

「でも、もう大丈夫だから。お姉ちゃんの未来を奪ってしまった僕は、もはや何をしても許されないけど……少なくとも、君が刀を持って四六時中番人をする必要はない。僕は消えてしまつかもしれないけれど、僕の素晴らしい仲間達が、きつとお姉ちゃんを支えてくれる」

刀の扱いが素人であろうとも、怒りに身を任せた人間が武と適合しないことくらいは浜夜も理解している。相手の怒気に押されてはいけない。冷静に自分の心と対話すればつけ入る隙は必ずある。そう分かっているながらも恐怖があった。相手が鬼の形相で自分を殺しに来るのだ。だが自分は……一人ではない。この瞬間にも皆が自分を見ている。

ここ数日間だけのことではない。皆の助けがあったからこそ自分分はここにいられた。

その思いが差だった。

実に青臭い。

自分のようなはぐれ者がヒーローになどなれるはずもないのに。白袴が、力を失ったかのように両膝をつく。そして天を仰いだ。その面が——まるでクルミを割るかのよう——

実に心地良い音を立てて般若の面は真つ二つに砕ける。

祭りが——終わろうとしていた。

般若の素顔があらわとなり、周りからどよめきが上がった。

浜夜はそれを見ない。阿呆と誹られるかもしれないが自分は般若と言葉を交わしたと思っている、心で、元々繋がっている深いどこかで。

素顔や表情など何の意味もない。自分が知ろうと思えばいつでも知ることが出来るのだ——

うつ伏せに沈みながらも、こちらを見上げているおかめ。

浜夜は駆け出した。

祭りに残された最後の意味。たった一つの真実。

蓄積された思いを解き放つ時。

「ごめん……お姉ちゃん……」

まだだ。素顔を見て、相手の目を見てきちんと謝るのだ。その後なら死んだって構わない。

浜夜の手が、おかめの面に触れる——寸前。

両膝に灼熱の激痛が走った。

「もう死ね！ 貴様はこの国の敵だ糸目！！」

言葉だけで相手を殺せるかのような呪詛に対し振り返る道理はない。

結果は膝から突き出ている刃物を見れば十分だ。それは自分の鮮血を浴びておどろおどろしい生き物のように蠢いていた。地に足を着く時間さえ惜しい。左足は脛を、右足は腿をやられた。心臓や脳を貫かれなかったことに安堵する。ならばおそらく狙いが外れたのだろ。泣きたくなるような苦痛は声となって口から飛び出る前に飲み込んだ。お姉ちゃんの前で無様な醜態を晒したくない。日本刀で十本の楔を切断する。

もう少し——もう少しだけ生かせてほしい。

気づけば笛の音は止まっていた。

視界の端に僅かに映った背景。歩くことも走ることも知らず、常に踊り続けていたひよっとこ達がその動きを止め、自分達の劇を見つめている。呆然と揃って立ち尽くすその姿はまさに阿呆。

お面を掴む。

浜夜は——

おかめの顔を空へと投げ捨てた——

時が止まった。

浜夜だけではない。仲間達も、テマリでさえもその動きが止まる。

「……何で……？」

浜夜の呟きに答えられる者はいない。

仮面の下は素顔は——

殻。

何もない。

目も、鼻も口も眉毛も。そこに本来あるはずの凹凸が一切ない、ただ滑らかな肌の色の顔の輪郭が卵のように広がっていたのだ。まるで遊楽施設の裏側、ハリボテで作られた舞台背景の背中だ。表面には夢の世界が広がり、子供が覗くことのないその裏側は無機質に、必要な骨組みだけを剥き出しにして作られている。

肌色で作られたのつぺらぼう。背筋が凍る。

それはあまりに不気味な顔。凝視できない異形。

「お姉ちゃんじゃない……」

人形のセツト。舞台を整えるために低予算で作られた脇役達。

「それじゃあ、どこにいるんだ……!?!」

苛立ち混じりの浜夜の叫びに……今度は答える者がいた。

テマリだった。

絶対なる無慈悲な答え。今度こそ浜夜は——その瘴気に当てられ振り返ってしまう。制限時間のないクイズ。永遠に続く茶番。ならば――

「終わりにしよう。糸目」

足が思うように動かず尻餅をつく浜夜の前で、絶対零度を思わせるかのような凍えた眩きが耳を貫いた。心臓を冷たい手で掴まれたように体中に怯えが走る。

誰かが自分の名前を呼んだ。

仲間の誰か。もしかしたら全員が叫んだのかもしれない。

壮絶。

古来の人間が創造した修羅の面が般若なら、今のテマリの顔は何と呼べば良いのだろうか。

不動明王。強いてあげるならばそれが一番近い……

見なければ良かった。

人は神に睨まれて動けるほど凶太い生き物ではない。

猫又の怒りは、ただ彼女がそこに立っているだけで浜夜も仲間の動きをも一時停止させる。

飛来する真紅の刃。

そこに更なる朱が交じった時は自分の命が尽き果てた時だ。

——動けない。

視界が白に覆われた。

紙を貫くようにてごたえのない、拍子抜けした音。

白袴が動いていた……そして脈動した。

浜夜の眼前でテマリの爪をその身に受け止めたのは般若だった。

「——ツツツ……！」

声にならない声をテマリがあげる。

そして吠えた。それは獣の怒り。

仮面なき般若の手に刀は握られていない。その身を挺して浜夜を庇い、十の楔を全身で受け止めたのだ。

掴む。力強く握る。次にその楔で縛られたのはテマリの方だった。自らの武器が敵の体内に潜り、彼女は一時の呪縛に陥ったのだ。

命の灯火を自らで吹き消すような行動を取った般若。それが浜夜の全身を封じていた呪縛を否応なしに解き放つ。

自由だ。

だが——何をすれば良い！？

般若が足蹴にしていたおかめは、お姉ちゃんではなかった。

ならばまさか、この世界にお姉ちゃんは最初からいなかったのだろうか。——違う。これだけのセット。人員配置。狂うほど一途な

設定。ならば主役は必ずこの世界のどこかにいる。特定の場所に隠れることなど出来ないはずだ。代々木公園、歌舞伎町、祭りの場所は毎度異なっているのだから。般若が踏みつけていたおかめはきつとフェイク。幼き自分が生み出した強固な檻は、敵の侵入を想定しトラップさえも作り出していたのかもしれない。

でも——ならば、お姉ちゃんはどこに？

テマリの、狂気とも思えるほどに禍々しい声が夜空に木霊する。

爪を自らの体内に押さえ込む般若の両手は既に傷だらけた。この狂宴に相応しい綱引き合戦。妖怪と人の生み出した人外が赤い口――

プを引き寄せあう。優勝者に与えられるは人間の命。

辺りを見て戦慄する。数百、見渡すだけでもそれだけのおかめがこちらを人形のように見つめている。あの面を一つ一つ剥がしていくわけにもいかない。それに……上手く言葉に表現出来ないが、そんな「適当」な所にお姉ちゃんを自分が置くとも思えない。

激情を全て吐露したような叫び。

思考に没頭しながらも本能的に振り向いてしまう。

見ると、「阿」像が雪相手にその棍を振り下ろした所だった。激しい衝撃が地面を穿つ。声は彼女のものだ。ずっと続けていたのだろう、身をかわし木刀で巨体相手に奮闘している姿が見えた。

振動音に震え——思い立つ。そう言えば先からいやに静かだ。

笛の音は止まり、和太鼓の響きも聞こえない——とそこまで考えて崩れ落ちたやくらが目に入る。先程ジッポの一撃で解体された物だ。和太鼓は瓦礫に埋もれたのか、その姿は見えなくなっている。

「あ」

そこで気づく。

——いた。

——般若ではない。足蹴にされたおかめでもない。周りで踊り続けていた脇役達でもない。

ある種、特別な存在。ある種、この祭りの頂点。真ん中。……祭りの中心には何がある？ この歌舞伎町で行われている祭りの中心には誰がいた？

走り出そうとして——転ぶ。

忘れていた。自分は両足を貫かれていたのだ。

這う。

両手で地面を這って行く。足から流れ出る鮮血がペンキのように跡を引いた。

真相は分らない。

でも……一つの考えが思い浮かんだ。

誰がお姉ちゃんなのか。その考えが正しいと仮定したら……これ

まで気づかなかった事実が次々と目の前に飛び出て来る。

自分はお姉ちゃんを閉じ込めた。でも、もしかしたら——力の強かったお姉ちゃんは、この世界の中でも僅かな自由があったのかも
しれない。言葉が喋れなくとも、もしかしたら自由の利く、系のよ
うに細い何かが存在したのかも。

面は見る者によってその姿を変える。面白くも、不気味にも映る。
呂旛の言う通りだ。

ならば。

それはきつと音楽とて例外ではない。自分の心次第でいくらでも
在り方が変わる。

時には禍々しく聞こえた。ある時は恐怖を抱いた。この祭りに対
する自分の心象そのものだ。

彼女はその太鼓を叩き続けた。

喋れない。何も伝えられない。それでも——

励ますように。

鼓舞するように。

常に、この祭りの中心で、自分へ力を与えようとしていたのでは
ないだろうか。

「お姉ちゃん——」

記憶を手繰る。

崩壊したやぐら。確かあの時、上にいたひよつとはそのまま下
へと落ちていったはずだ。

ひよつとは男、おかめは女。それは一般常識だが、そもそも面
の下にまではそれは通じない。

その時、一人のひよつとこの姿が視界に入った。
間違いない。

今度こそ。

和太鼓を失い、ずっとその場にいたのだろう。そのひよつとは
朽ちた木材の山の中に両膝について力なくしゃがみ込んでいた。

無事——のような。遠目に目立った外傷はない。

這う。

這う。這う。這う。

浜夜は使い物にならなくなった足を引きずり、瓦礫の山の頂点を目指して登る。

新宿はどこまで傷ついただろう。

テマリの怨念に満ちた声が全てを物語っている。

自分はもう死ぬしかない。

一人の人間のために、淡い期待に縋ってこの街を、この国をチツプに賭場を開いたのだから。そして負けた。あっさりと。祭りを操る力など存在せず、露呈するのは自分の醜さのみ。

自分が生きている限り人が飲み込まれ続けていく。

自分が一歩お姉ちゃんに近づく度に破碎音が遠くで鳴り響く。

それでも……こんなどうしようもない浜夜善だけれども……

その人は励ましてくれた。自分に光を与えてくれた。

この先の人生をまっとうすることはきっと叶わないけれど――
逝く前にお詫びと、お礼と、お別れを言いたい。

欲塗れの十字架は既に自分の背中を押し潰す勢いで心を圧迫している。

視界がぼやけた。

自然と涙が零れ落ちていたのだ。その滴には様々な思いが込められているのだろう。

「ごめん……今まで……ごめんね……お姉ちゃん」

どうせならばお姉ちゃんに自分を殺してほしい。そんな馬鹿げた妄想を抱く。そうだ、そもそも彼女が一番の被害者なのだ。怒り狂い、自分を殺すに最も相応しい人。

雄叫び。

次いで重い何かが倒れ落ちる音。

――背後にて最後の白き門が破られたことを知る。

銃声が鳴り響いた。

でもきつと、あの追っ手はそんなもの歯牙にもかけない。

山に登る。

尖った木片がシャツを切り裂いた。穴の開いた足を瓦礫に擦り付けると体内の血液が沸騰するかのような熱い激痛が流れた。足の機能を果たすその両手は擦り傷に塗れ、幾つもの赤い筋が手の平に、手首に刻まれた。

ひよつとは声もなく、ただ静かに浜夜を見つめていた。

手を伸ばす。お互いが触れ合えるかの距離。

赤い面へ触れ――

そこへ背後から迫る死。

念じる。

右手には日本刀が出現していた。最後の抵抗と言わんばかりに、浜夜はそれを振り向きざまに、半ば勘で後方へと叩きつける。でたらめな、形だけの薙ぎ払い。

固い物とぶつかり合う感触。

その幾つかは天へ上がり……

幾つかは振り返った浜夜の上半身に吸い込まれていった。焼けつくような痛み。口から吐き出されたのは血の塊。

涙で濡れていた視界が更に曇る。

胸から溢れ出る鮮血と共に意識も流れ落ちそうになった。

「捕まえた……」

テマリと繋がる。

浜夜を貫いたその爪は鉤状に変形し、その体を捕まえて離さない。だがどのみち浜夜もここから動くつもりはなかった。

仰向けに倒れた体。眼前に広がるは提灯と夜空。そして――月。

その中にひよつとこの顔が落ちる。

自分を――見下ろしているのだ。

テマリが飛び掛って来る。左手で浜夜の体を束縛し、右手に連なる五本の武器を収束させ、一本の刃へと変えて。

傷ついた自分にそれを防ぐ手立てはない。

防ぐ必要も――ない。

浜夜は——眼前に広がるひよつとこの面を手で掴むと——

無造作に放り投げた。

胸を貫かれる——

花の香りが空へと舞った。

その芳しい風に乗せられ——浜夜の生気が天へ昇っていく。

顔を……見たい。

安定しない濁った視界に更なるバグが発生する。肉体の核である心臓を貫かれた浜夜の瞳は、その機能を低下するどころか停止にまで追いやられたのだ。

「……ごめん……」

遠くから差し込む、提灯と思われる橙色の明かりだけがぼんやりと光る。

ひよつとこの面の下にある素顔を見ることは……もはや叶わない。

「……ごめんね、お姉ちゃん……。……ありがとう……。さようなら

……」

でも、その素顔が誰のものは言うまでもなかった。

浜夜にしか分らない。

月が似合うこの歌舞伎町。なのに……

提灯の明かりの他に——白い、眩しい、そう、まるで——

太陽のような煌きがその頭上に輝いていたのだから。

自分を見下ろす暖かな光から言葉は落ちてこない。喋れないのかもしれない。それでも自分を見つめてくれていることだけは分かった。比喻で使っていた彼女への表現が、今はいやに当てはまる気がする。暖かい温もり。心を照らされている。死の間際だと言うのに体が不思議な高揚感に包まれた。

全ての物音がやんでいた。

振動の一つも感じられない。

やがて閉じられる世界。瞼に閉ざされていく視界。

その中に、一滴の滴が落ちた。温かいそれは浜夜の頬で跳ね、流れて行く。

お姉ちゃんではない、別の誰かのものだ。遠くへ飛んで行きそんな意識を呼び覚ます。

自分の問題はこれで終わり。

でもあと一つ、問題が残っていたではないか。

「また……一人ぼっちだな……テマリ……」

香りが動いた。

あの三人はきつと平気。雪は……自分が約束を裏切ってしまい、立ち直るのに少し時間がかかるかもしれないけれど、きつとジッポとアオイが支えてくれる。

でもテマリは――

自分が彼女にしてあげられることは、もはや――

手を数センチ動かす。その程度の動きでさえ億劫だ。体の機能が次々と深い眠りへとついていく。

日本刀を……芳香へ向けてそつと振った。

「？」

疑問符が空から落ちてくる。

優しく触れる程度に、刃がテマリの素肌を切り裂いたのが分かった。痛みに呻くようなことはない。それより単に、テマリは今の行動の意味を知りたがっているだろう。

「しばらくは……その傷を見て……思い出して……」

その一言で全てを理解したのだろう。刃物による切り口が、如何なる傷跡として肌に刻まれるか。それは正に自分の象徴。……返答の代わりなのか、僅かに空気が動いた。

「竹様を……僕を……しばらくテマリの傍に置いてくれないかな」

言葉と同時に血が口から吹き出た。

ああ。もうきつと――喋ることも出来ない。

小さな。

本当にささやかな笑いが大気を動かす。

いつもの声。

聞き慣れた声だ。

「精一杯考えた口説き文句がそれか？」

ぼす、と乾いた何かが額に当たる。

仰向けになっっている自分の顔からそれは落ちることはない。ずっと乗せられたままだ。

「不合格」

……見ずとも、それが何か理解した。二度目だ。どうやらそれは、彼女にとって通知表の代わりらしい。

これで良い。

自分がテマリを引っ張るなど天地が返っても無理だ。

やはり……こうやって、からかわれるくらいが丁度良い。

日本刀が物悲しい音を立てて地面に転がった。

それが――

祭りの終わりだった。

エピソード

ひと気の欠片もない神社だった。

賽銭箱も鈴も設置されているが、老朽化した木造の小屋と、手入れが必要と思われる雑草を見る限りそれは形骸化している感じが否めない。

裏手はもつと酷かった。空き缶やタバコの吸殻、雑誌や瓶、テレビまで捨ててある。だがそれ等を綺麗に片付ければ幾十人も人間が踊る十分なスペースを確保出来るであろう。

ここから生まれた。

浜夜善の中で舞い続けた怪物達の故郷。

雪、ジッポ、アオイの三人は荒地の片隅に手頃な大きさの石を置くとそこに花を添える。雪は最初その石に文字を刻もうと躍起になっていたが、思うようにいかず諦めたらしい、代わりに枝で地面の土に文字を刻んだ。雨が降れば、風が吹けば消えてしまうであろう三文字。

浜夜善。

「でも良いのかなあ？ 神社にこんな勝手にお墓作っちゃって」
雪の懸念は最もだ。そして、それを吹き飛ばす人間の意見も最もだった。

「良いんだよ。そもそもこれが墓なんて誰も気づかねえ。中に死体が埋まっているわけでもないし、言わばこれは俺達の遊びみたいなモンなんだからよ」

「……遊びでお墓作られたら、善君も堪らないと思うよ？」
青い空。

広がる入道雲。

しばらく三人は小さな墓の前にし、汗を拭いながら談笑を交わす。やがて背後から足音が鳴った。雑草がそこそこ元氣よく顔を伸ばしているの、踏みつける人の足音はそれなりに大きく響く。

「何やっているの？ ……って、これ僕のお墓！？」

三人の眼前に現れた浜夜の目にとまったのは、たった今雪が掘ったばかりの名前だ。暑さ以外のもので体力を奪われた浜夜はしゃがみ込む。

——それでも、間違っではない。

もしかしたら、このお墓の存在は然るべきものなのかもしれない。

「遅いんだよ善」

「ああ、ごめん。でも凄いよ雪。車のキー、本当にシートの上にあったよ。ありがとう」

「……刺さっていたはずのキーが、どうして車を停止させた後、シートの上にワープするのか私は不思議で仕方ないんだけどさあ……」

浜夜さん」

元々は一人でここへ来るつもりだった。

それを告げて出ようとしたら——なぜか皆がついて来たことに、驚きよりも嬉しさが勝った。

般若は消滅した。

ひよっとこ達も、おかめも——あの悪夢の祭りは浜夜が目覚めた

時には全て消えていたのだ。

ズレは僅かに残った。

詳しい「仕組み」は分からない。それでも、新宿の約百人が一斉に数十分間の記憶を失い、幾つかの建物には鈍器で何度も叩いたかのような生々しい破壊の傷跡が残されていた。

その現実の下、時が流れている。

祭りの終わりが長引いたせいで、彼等が処理しきれず明るみに出してしまったのだろう。実際には記憶を消されたことさえも知らない人間は四桁は下らないだろうし、倒壊した建物も数百は存在しているのだと思う。それがこの程度のミステリーとして済んでしまっているのだから彼等の力は凄まじい。破壊の傷跡、集団で人が記憶を失う、その二点から世間ではテロリズムの線が濃厚らしいが……その世論さえも彼等の誘導かもしれないと思うのは考えすぎだろうか——せつかく皆がお墓を作ってくれたのだから、そこに手を合わせることにする。どのみちそれが目的だ。

誰も知らない。存在しないはずの人間。でも自分は確かに……言葉を交わしたのだ。生み出した本人にさえ忘れ去られ、それでも一途にその使命を果たそうとした。

最後に般若は——お姉ちゃんに迫ろうとする自分よりも、自分を襲撃しようとするテマリの阻止を優先させた。それは彼の中であらかじめ定められていた優先順位だったのか……それとも、もしかしたら何か理由があつてのことなのか。今となつては確かめる術はない。

一礼。そして控え目に高鳴る心臓をノックする。

三人はそんな浜夜を声なく見つめていた。帰りの号令を浜夜が出さなければずっとそうしていたに違いない。これは決別であり——葬式でもあり——回帰だった。

橘瑞菜。それがお姉ちゃんの名前だ。搜索願が出された時に初めてお姉ちゃんの名前を知ったが、呼び方を変えるのもしっくりこな

かつたので今のままに至る。

そこはかつて呂旛が収容されたあの名もなき病室だ。どこことなく監獄を思わせる暗い廊下。せめてものお願いとして、名前のついたプレートだけ部屋の前に掲げさせてもらっている。

祭りの終わり。

——お姉ちゃんは生きていた。

——そして——目が覚めた時、なぜか自分も生きていた。……体に空いたはずの傷もなく。

消えていたのはテマリだけだ。

驚くべきことに、お姉ちゃんの姿は当時のまま、高校生の時と全く変わらぬ姿であった。お姉ちゃんの両親に無事を伝えようかとも思ったが、一巡の後にそれは却下した。あまりに衝撃が大きすぎる。今は——彼女が無事に目覚めるのを待つ。

「目覚めは半年後か、一年後か、命に別状はないが今すぐと言うわけにはいかん」

そう告げるとシワと染みで形作られた顔の老齡の医師は、たるんだ瞼の奥から鋭い眼光を放った。何でも医療の他に靈的な力にも通じているらしく、アオイが特別に呼んでくれた人らしい。

「体自身には問題ないが、魂を深く削られている。つい最近、何か強大な力を使ったな？」

その言葉を聞いてから一週間が経つ。お姉ちゃんはずっと眠ったままだった。

長く、市松人形のような黒髪を撫でる。優しく柔らかい感触。

「大人になった今でさえ、お姉ちゃんに迷惑かけちゃったんだね……」

本当に——浜夜善はどうしようもない。

太陽は常に自分を照らし続けてくれていたのだ。昔も……今も。

あの異世界でさえも。

面を外したあの時、太陽は輝いていた。それが今は眠り続けている。ならば一つの答えが浮かぶ。

自分を殺してくれることさえ望んだのに——
そんな淀んだ感情でさえ、日の光の下で真っ白に変えてしまったのだ。

祭りが消えたことは自分の死を意味する。だが五体満足にこうして存在している自分。祭りの中心で常に和太鼓を叩き続けていたお姉ちゃんには、空っぽになった心臓に再び光を戻す力さえも備わっていたとでも言うのだろうか。

推測のフィルター越しでしか見えない真実。聞いてみたいことが沢山ある。でも今は……

「ゆっくり休んで……今度は僕がお姉ちゃんの真似事をするよ。……きつと下手くそだけど」

お天道様が眠っているのならば、代わりに活躍するのは自分の出番だ。

月のように常に満ち欠けしている半端者。

安らかな寝顔に見送られ、温かな日の下へと歩き出す——

大根とナスをタッパに入れて机に置くと、浜夜は一息ついた。

異路色系目相談所の開かれた窓の奥には見事なまでの晴天が広がっている。

「なあ、浜夜さん！　どっちのデザインが良い！？　私の方だよな！！！？」

「善、コイツに言っただけでやってくれよ！　こんな乙女チックな絵で客が来るかっての！　俺の方が完璧だろ！？」

もっと行動を広げていきたい。

お姉ちゃんのように上手くは出来ないかもしれないけど、人外の方が原因で困っている人達を一人でも多く助けたい。仲間にそう伝えたいのだ。

A4サイズのチラシの内容を巡って早速意見が対立しているらしい。台所にまで押しかけてきた二人に辟易とする。だが情けないことに自分にはセンスがないので的確なアドバイスが出来ない……

「アオイに聞いてみてよ。……あ、でも病み上がりのマリアで付き
っ切りだから、後で——」

言い終わる前に、二頭の闘牛は突進するかのように台所から退出
してしまう。あれだけの元気があれば、これからどんな客が来よう
とも乗り切れるだろう。

「あれ？」

気づくと机の上に置いてあった、ぬか漬けの入ったタツパが跡形
もなく消えている。

確かに置いたのだ。目を離したのは……ほんの十秒程度だけ。床
下に落ちたわけでもないようだ。

顔を上げる。

額に軽い衝撃。

何かがぶつかった。

それはバウンドすると机の上に転がり落ちる。

——カラになった透明のタツパだった。

呆然。

慌てて窓の外を見回してみるも、そこには青と白がどこまでも気持
ち良く続いているだけ——

風が吹いた。冷たいわけではなく、熱くもない、ごく普通の七月
の風。

「クツ」

最初に浜夜の心に沸き起こったのは笑い。それは我慢出来ず吹き
出すように口から漏れる。

盗人にはその笑いに心当たりがあったのか、心なしか不機嫌にな
ったようなオーラが浜夜にまで漂ってきた。タツパを流しに放り込
むと浜夜は一人心地に呟く。

「まだなんだよ……。まだ完成しないんだ真のぬか漬けは。こん
な物じゃない」

そう言えば、別れ際にぬか漬けを渡そうと思いついたは良いもの
の、結局それは実現出来ていなかったことを思い出す。

約束をしていた。

つまみと共に酒を飲み交わす約束。

食い物の恨みとは恐ろしいものだ。あらゆるしがらみを解き放つてまで発現されるのだから。

古今東西それは変わらないと言うことだろう。

……と、まあ一応理由付けはそんなもので良いのではないだろうか。

「子供っぽいのは別に、意外に結構可愛い所あるよな……」

目の前が真っ暗になった。

自分の体が宙に浮いているのを感じる。

銃弾のように額に飛来したそれは――

彼女からの、不合格の証。

ああ、これで良い。

やはりこのように、からかわれるくらいが――丁度良い。

闇に沈む。

気を失う直前、風に乗って花の香りが台所を乱舞したのを感じた。

完

最終話（後書き）

ここまで読んで下さった方、本当にどうもありがとうございました。三週間近くやってみたいで、見るとチビチビとアップしている日もあれば、その倍近い量をアップしている日もあったりで、どうにも下手くそな連載の仕方だったと反省しております；

面白かった点、つまらなかった点、何でも結構ですので感想を頂けたら幸いです。

書いても書いても課題尽くしで……拙い文章でお見苦しい点もございますが、そう遠くないうちに新しい物を連載しようと思っておりますので、宜しければお願いします。

メルアド↓pirot2226@yahoo.co.jp
HP↓<http://tobiryu.hp.infoseek.co.jp/>

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3305j/>

孤独なワルツは猫も食わない

2010年10月8日14時42分発行